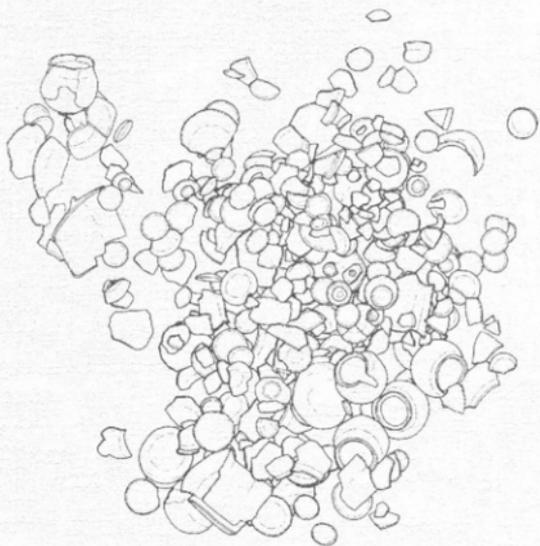


# 史跡齋宮跡

平成13年度発掘調査概報



2003年3月

齋宮歴史博物館



132次調査区全景（東から）



133次調査区全景（南西から）



133次調査区 S E8391



133次調査区出土 金銅製釧・丸柄(表) (1:1)



133次調査区出土 金銅製釧・丸柄(裏) (1:1)

# 序

平成13年度は、平成8年度から開始した齋宮跡ロマン再生事業の最終年度で、平成14年3月3日には1/10史跡全体模型の完成を見ました。これによって、近鉄齋宮駅北側の「いつきのみや歴史体験館」を含む周辺一帯を「齋宮跡歴史ロマン広場」として整備する事業が一段落したことになります。

しかし、1/10史跡全体模型の中では、発掘調査成果からその内容がある程度確認できた方格地割のうち、寮庫・神殿・内院の3区画と八脚門のある鈴池西区画にのみ建物模型を設置しているに止まります。齋宮の方格地割は、現在の認識では東西7区画・南北4区画で、北西の4区画分を1大区画とする見方でも25区画あります。これら全ての区画が明らかになり、模型で全体を表示できるようになるためには、まだまだ調査・研究を進めなければなりません。また、方格地割の存在が判明した史跡東部に対し、史跡西部では方格地割以前、とくに奈良時代を中心とした「初期齋宮」の存在が言われています。さらに、模型で表示した状況は概ね奈良時代末から平安時代初頭頃の齋宮であり、平安時代前期以降の状況の追求も課題として残されています。

平成13年度には、3ヶ所の計画調査を実施しています。第132次調査は、史跡西部の状況を把握するために行ったもので、とくに「初期齋宮」の情報を得る目的でした。第133次調査は、寮庫区画南部の状況把握を目的としたものです。第135次調査は、1/10史跡全体模型との関係から、遊水池となる地点を事前に調査したものです。それぞれの成果については本文のなかで各担当が述べておりますのでぜひ御味読ください。

これらの成果を見ますと、史跡齋宮跡ではかれこれ30年間も発掘調査を継続しており、かなりのデータが蓄積されているわけですが、それでも毎年の調査によって新たな発見や疑問点が出てくるがよくわかります。地元明和町や三重県は言うまでもなく、日本国民共通の財産として、史跡齋宮跡に関する「知の情報」を提供し続け、この激動の時代においてもなお絶やすことのない、いや、このような時代だからこそ忘れてはならない「歴史に学ぶ姿勢」の浸透に、少しでも寄与できればと思います。

史跡齋宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、地元明和町在住の方々、明和町および関係機関、齋宮跡調査研究指導委員をはじめとする諸先生方や文化庁から、有形無形の援助を頂いております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

齋宮歴史博物館

館長 桂川 哲

# 例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成13年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査(第132・133・135次調査)の概要をまとめたものである。
- 2 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査(第134次調査)の報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法(旧国土座標)の第VI座標系を基準とし、世界測地系の対応は、平成13年度については行っていない。方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 4 遺構の時期区分は、「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年)による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。  
SA；柱列 SB；掘立柱建物 SD；溝 SE；井戸 SF；道路 SH；竪穴住居  
SK；土坑 SX；土壇墓・墓 SZ；落ち込み・その他
- 6 遺物実測図は、実物の4分の1を基本とし、資料の性格に応じて変更したものもある。遺物写真は、とくに指定した物以外は縮尺不同である。
- 7 遺構の埋土や出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』(1995年版)に拠る。
- 8 遺物の文字表現には、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「碗」、「つき」は「杯」を用いている。
- 9 本書の執筆は、駒田利治・泉雄二・伊藤裕偉・水橋公恵があたり、目次および文末に記した。編集は調査研究グループで行った。また、発掘調査および資料整理については、西村秋子・杉原泰子・八木光代・山口香代のほか、次の学生諸氏の参加があった。  
井上紗織(専修大学)、大西瞳(花園大学)、三品典生・清野陽一・服部英世・辻昌平・山田真靖・竹内絵里奈・鈴木敦夫・阿部美保・奥野絵美(以上、三重大学)

## 目 次

I	前 言 .....	泉・伊藤(1)
1	平成13年度の概要	
2	調査体制	
3	調査研究	
4	調査区の設定と表示方法	
II	第132次調査 .....	水橋(9)
1	調査の契機と経過	
2	遺構	
3	遺物	
4	まとめ	
III	第133次調査 .....	伊藤(37)
1	調査の契機と経過	
2	調査区の層位	
3	遺構	
4	出土遺物	
5	まとめと検討	
IV	第135次調査 .....	駒田(109)
1	調査の契機と経過	
2	遺構	
3	遺物	
4	まとめ	
付録	斎宮跡発掘調査回数一覧 .....	(123)

## 挿 図 目 次

第1-1図 史跡斎宮跡位置図	第III-3図 第133次調査区平面図
第1-2図 平成13年度発掘調査区位置図	第III-4図 第133次調査区土層
第1-3図 斎宮跡方格地割区画名称	第III-5図 第133次調査 SB1854平面・断面図
第1-4図 史跡斎宮跡地区・グリット表示方法 (2002年)	第III-6図 第133次調査 SB8463平面・断面図
第1-5図 史跡斎宮跡における大地区表示 (2002年)	第III-7図 第133次調査 SE8391遺物出土状況図
第II-1図 第132次調査区位置図	第III-8図 第133次調査 S D2836・S K8392付近平 面・土層断面図
第II-2図 第132次調査区 大地区・グリット図	第III-9図 第133次調査 S K8407平面・土層断面図
第II-3図 第132次調査区平面図	第III-10図 第133次調査 S K8395・8416土層断面図
第II-4図 第132次調査 S X8357平面図・土層図・遺 物出土状況図	第III-11図 第133次調査 S K8425平面・土層断面図
第II-5図 第132次調査 S X8379平面図・土層図	第III-12図 墨書土器「文」と出土地点の関係
第II-6図 第132次調査 S X8379遺物出土状況図	第III-13図 斎宮III-2期土器分類模式図
第II-7図 第132次調査区出土遺物実測図(1)	第III-14図 第133次調査区出土遺物実測図(1)
第II-8図 第132次調査区出土遺物実測図(2)	第III-15図 第133次調査区出土遺物実測図(2)
第II-9図 第132次調査区出土遺物実測図(3)	第III-16図 第133次調査区出土遺物実測図(3)
第II-10図 第132次調査区出土遺物実測図(4)	第III-17図 第133次調査区出土遺物実測図(4)
第III-1図 第133次調査区位置図	第III-18図 第133次調査区出土遺物実測図(5)
第III-2図 第133次調査区 大地区・グリット図	第III-19図 第133次調査区出土遺物実測図(6)
	第III-20図 第133次調査区出土遺物実測図(7)
	第III-21図 第133次調査区出土遺物実測図(8)

第Ⅲ-22図	第133次調査区 遺構変遷図	第Ⅳ-2図	第135次調査区平面図
第Ⅲ-23図	方格地割西加座南ブロック内建物配置と区画溝の関係(奈良末期)	第Ⅳ-3図	第135次調査区出土遺物実測図
第Ⅲ-24図	各遺跡の土器組成(11~12世紀代)	第Ⅳ-4図	史跡斎宮跡地内井戸分布図
第Ⅳ-1図	第135次調査区位置図	第Ⅳ-5図	斎宮跡 S E 7600・7920断面図

## 表 目 次

第Ⅰ-1表	平成13年度発掘調査一覧	第Ⅲ-7表	第133次調査区掘立柱建物一覧(2)
第Ⅱ-1表	第132次調査区遺構一覧	第Ⅲ-8表	第133次調査区出土遺物観察表(1)
第Ⅱ-2表	第132次調査出土遺物観察表(1)	第Ⅲ-9表	第133次調査区出土遺物観察表(2)
第Ⅱ-3表	第132次調査出土遺物観察表(2)	第Ⅲ-10表	第133次調査区出土遺物観察表(3)
第Ⅱ-4表	第132次調査出土遺物観察表(3)	第Ⅲ-11表	第133次調査区出土遺物観察表(4)
第Ⅲ-1表	第133次 S E 8391出土土器組成	第Ⅲ-12表	第133次調査区出土遺物観察表(5)
第Ⅲ-2表	第133次調査区緑釉陶器出土地点・破片数一覧	第Ⅲ-13表	第133次調査区出土遺物観察表(6)
第Ⅲ-3表	第133次調査区遺構一覧(1)	第Ⅳ-1表	斎宮跡検出の井戸一覧(1)
第Ⅲ-4表	第133次調査区遺構一覧(2)	第Ⅳ-2表	斎宮跡検出の井戸一覧(2)
第Ⅲ-5表	第133次調査区遺構一覧(3)	第Ⅳ-3表	第135次調査区遺構一覧
第Ⅲ-6表	第133次調査区掘立柱建物一覧(1)	第Ⅳ-4表	第135次調査区出土遺物観察表

## 写 真 図 版 目 次

図版Ⅱ-1	第132次調査 遺構(1)	図版Ⅲ-8	第133次調査 遺構(8)
図版Ⅱ-2	第132次調査 遺構(2)	図版Ⅲ-9	第133次調査 遺物(1)
図版Ⅱ-3	第132次調査 遺構(3)	図版Ⅲ-10	第133次調査 遺物(2)
図版Ⅱ-4	第132次調査 遺構(4)	図版Ⅲ-11	第133次調査 遺物(3)
図版Ⅱ-5	第132次調査 遺構(5)	図版Ⅲ-12	第133次調査 遺物(4)
図版Ⅱ-6	第132次調査 遺物(1)	図版Ⅲ-13	第133次調査 遺物(5)
図版Ⅱ-7	第132次調査 遺物(2)	図版Ⅲ-14	第133次調査 遺物(6)
図版Ⅱ-8	第132次調査 遺物(3)	図版Ⅲ-15	第133次調査 遺物(7)
図版Ⅱ-9	第132次調査 遺物(4)	図版Ⅲ-16	第133次調査 遺物(8)
図版Ⅱ-10	第132次調査 遺物(5)	図版Ⅲ-17	第133次調査 遺物(9)
図版Ⅲ-1	第133次調査 遺構(1)	図版Ⅲ-18	第133次調査 遺物(10)
図版Ⅲ-2	第133次調査 遺構(2)	図版Ⅲ-19	第133次調査 遺物(11)
図版Ⅲ-3	第133次調査 遺構(3)	図版Ⅲ-20	第133次調査 遺物(12)
図版Ⅲ-4	第133次調査 遺構(4)	図版Ⅲ-21	第133次調査 遺物(13)
図版Ⅲ-5	第133次調査 遺構(5)	図版Ⅲ-22	第133次調査 遺物(14)
図版Ⅲ-6	第133次調査 遺構(6)	図版Ⅳ-1	第135次調査 遺構(1)
図版Ⅲ-7	第133次調査 遺構(7)	図版Ⅳ-2	第135次調査 遺構(2)・遺物

# I 前 言

## 1 平成13年度事業の概要

**経過** 明和町竹川吉里地区での宅地開発計画に伴い、昭和45年に始まる齋宮跡の発掘調査は、文化庁の補助事業として、昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定され、指定以降史跡解明の計画調査を継続して実施している。

**発掘調査** これまでの発掘調査成果の蓄積から、奈良時代後期から平安時代前期を中心に展開を想定している史跡東部の方格地割において、齋宮寮の中核部の可能性が強い牛養・鍛冶山地区における構造解明については『齋宮跡発掘調査報告書Ⅰ』（2000年）で提示してきたところである。最北端の寮庫推定区画についても平成12年度の調査で解明を進めて来たところであるが、この区画間の神殿推定区画の東半部については不明な点が多いため、平成13年度は第133次調査を実施した。

また、史跡西部に存在が予測される飛鳥・奈良時代の齋宮跡については不明な点が多く、今年度はその第1年次目として、第132次調査を実施した。今後、齋宮跡の発掘調査については、史跡東部の平安時代の齋宮跡と史跡西部の飛鳥・奈良時代の齋宮跡解明の二本立てで進めていくことになる。

なお、整備に伴う事前調査を第135次調査として実施している。各次数の調査内容については本文を参照されたい。

**史跡整備** 『史跡齋宮跡整備基本構想』に基づき、平成8年度から近鉄齋宮駅北側で実施している大規模な史跡整備事業は、文化庁の補助を受け、平成8年度は「史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場事業）」として、方格地割北西隅の外周施設である道路・溝の復元整備及びヤナギ・マツによる並木整備を行った。9年度からは文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」に採択され、同年度から11年度の3カ年にわたり、体験学習施設「いつきのみや歴史体験館」の建築工事並びに体験館周辺の外工事を実施した。平成12年度からは、本事業のもう一つの核である「1/10史跡全体模型」整備事業に着手し、「1/10史跡全体模型整備実施設計」を策定した。実施設計に基づき、1/10野外建物模型製作委託業務、基盤整備工事並びに両事業にかかる設計監理委託業務を平成12・13年度の債務負担事業として契約を結び、事業を実施した。

平成13年度は、前年度からの債務負担事業である「1/10野外模型製作委託業務」・「1/10史跡全体模型基盤整備工事」などを引き続き実施したほか、齋王の森から南に延びる方格地割りの区画間道路・溝の復元整備である「方格地割外周等整備事業」、1/10史跡全体模型内のガイダンス施設である「音声ガイダンス設備設置工事」のほか、1/10史跡全体模型整備地の案内板やシンボル用のサイン（看板）工事を実施した。平成8年から開始した整備事業は、「齋宮跡歴史ロマン広場」として、平成14年3月3日に開園式を行った。

なお、平成14年3月2日には、中真文化庁主任文化財調査官による「史跡の楽しみ方」、鈴木嘉吉元奈良国立文化財研究所長による「今よみがえる齋宮跡の建物」の開園記念特別講演会を齋宮歴史博物館でおこなった。



第1-1図 史跡斎宮跡位置図 (1 : 50,000) 国土地理院発行1/25,000「松阪」「明野」(平成4年)より



## 2 調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は斎宮歴史博物館調査研究グループが担当した。当報告に関わる組織は以下の体制である。

平成13年度	駒田利治(主幹兼グループリーダー) 泉 雄二(主幹)・伊藤裕偉(技師兼学芸員)・水橋公恵(技師兼学芸員)
平成14年度	泉 雄二(主幹兼グループリーダー) 伊藤裕偉(技師兼学芸員)・小濱 学(主事兼学芸員)・水橋公恵(技師兼学芸員)

## 3 調査研究

**指導委員会議** 斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、指導委員会議を実施している。平成13年度は、第1回を平成13年6月3日(日)、第2回を平成13年11月5日(金)、第3回目を平成14年3月3日(日)に開催した。指導委員の方々は下記のとおりである(順不同・敬称略)。

<b>調査指導委員</b>	上村喜久子(名古屋短期大学教授)
	狩野 久(京都橘女子大学教授)
	北原 理雄(千葉大学教授)
	佐々木恵介(聖心女子大学助教授)
	鈴木 嘉吉(元奈良国立文化財研究所所長)
	所 京子(聖徳学園岐阜大学教授)
	八賀 晋(三重大学名誉教授)
	町田 章(奈良国立文化財研究所所長)
	渡辺 寛(皇學館大学教授)

調査次数	大地区	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	所在地	土地所有者	現状変更名	保存地区区分
132	H10	750	H13.5.15~8.14	明和町竹川字中塚内439-5-446-1	明和町	計画発掘調査	1
133	T10-T11	910	H13.8.16~12.10	明和町斎宮字西加盛2,713-2,714-2,729	明和町・森本暢彦・股部幸生	計画発掘調査	2
134-1	Q14	3.4	H13.9.13	明和町斎宮字鶴池333-1, 4,438	八田明美	浄化槽	4
134-2	I13	0.5	H13.11.23	明和町竹川字南塚	明和町	水道管仮設	3
134-3	I13	1.2	H13.11.27	明和町竹川字南塚	明和町	水道管仮設	3
134-4	P12	2.0	H14.1.9	明和町斎宮字内山	明和町	水道管仮設	3
134-5	Q13	1.0	H14.2.6	明和町斎宮字牛菜	明和町	水道管仮設	3
134-6	U11	2.2	H14.1.16	明和町斎宮字緑池山2,363-1	川合和男	住宅改修	4
134-7	P12	5.8	H14.1.28	明和町斎宮字牛菜	明和町	水道管本管	3
134-8	P12	10.8	H14.1.30~31	明和町斎宮字内山	明和町	水道管本管	3
134-9	L8-M8	390.0	H14.2.11~3.22	明和町斎宮字塚山3,322-2	澄野恵子	盛土盛地	3
134-10	T7	9.0	H13.4.22	明和町斎宮字東前沖3,554	明和町	創設改修	3
134-11	I12	4.0	H13.8.8	明和町竹川字東基354-1	鈴木正己	住宅新築	4
134-12	P9	3.4	H14.2.5	明和町斎宮字上園2,296-16	奥田悦夫	浄化槽	4
134-13	F11	2.7	H14.2.25	明和町竹川字花園659-5	高橋長郎	浄化槽	4
134-14	U12	3.5	H14.3.4	明和町斎宮字笹川2,359	丸山照夫	浄化槽	4
135	O9-P9	1330	H13.8.20~10.30	明和町斎宮字宮ノ前3,122-3,123-3,131-3,132	明和町	計画発掘調査	1
調査面積計		3429.5	(内訳:計画調査2,990m <sup>2</sup> 、現状変更緊急調査439.5m <sup>2</sup> )				

第1-1表 平成13年度発掘調査一覧



第1-3图 斎宮跡方格地割区画名称 (1:5,000)

## 助言

調査および報告書作成にあたっては、下記の方々からも助言を得た。  
(順不同・敬称略、所属は平成13年度当時)

井上和人(奈良文化財研究所)、上村安生(三重県生活文化部)、大川勝宏(三重県教育委員会)、尾野善裕(京都国立博物館)、木野本和之(亀山市教育委員会)、中野敦夫(明和町教育委員会)、費元洋(豊橋市教育委員会)、森島康雄((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)、橋本久和(高槻市教育委員会)、濱邊一機(北勢町教育委員会)、百瀬正恒((財)京都市埋蔵文化財研究所)、山中章(三重大学)、渡辺博人(各務原市教育委員会)、大川操・角正芳浩・竹田憲治・萩原義彦・森川常厚(三重県埋蔵文化財センター)

(泉 雄二)

## 4 調査区の設定と表示方法

### 大地区の表示

斎宮跡の調査区表示方法については、2000(平成12)年度までは小字・畦畔・筆を単位とした表記を行ってきた。しかしこの方法では、地番の存在しない公道や、調査前に筆境が不明となっていた場合などでは厳密な対応が不可能である。そのため2001年度から、史跡全体をカバーする調査区表示に変更することとした。

表示は史跡全体を100m升に区切り、西→東にA～W(アルファベット大文字)、北→南に1～14とし、冒頭に「6A」の記号を付加したうえで一辺100mの1区画を「6AD12」のように表現する。実際の区割りは、第1～5図に示した。なお、史跡周辺部に緩衝地帯を置いているので、実際に存在するのはB～W・3～14である。

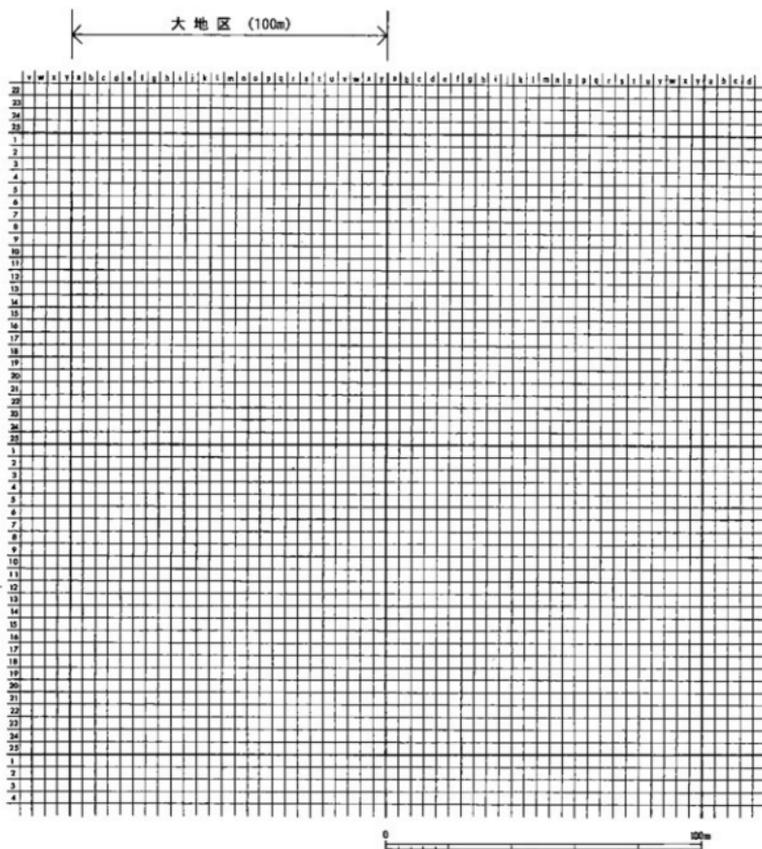
### 小地区の表示

2000年度以前は、方向を国土座標軸に合わせたうえで調査区単位で小地区(グリット)割りを決定していたため、斎宮跡全体として統一された基準が存在しなかった。そこで、2001年度以降は上記大地区表示を基に、一辺4mのグリット番号も統一を図った。グリットは西→東にa～y(アルファベット小文字)、北→南に1～25とした。つまり、大地区内を4m間隔で25等分することで、大地区内がa1～y25の625グリットで表記することとした。したがって、1グリットの位置は、大地区名+グリット名で表現されることになる。実際の区割りは第1～4図に示した。

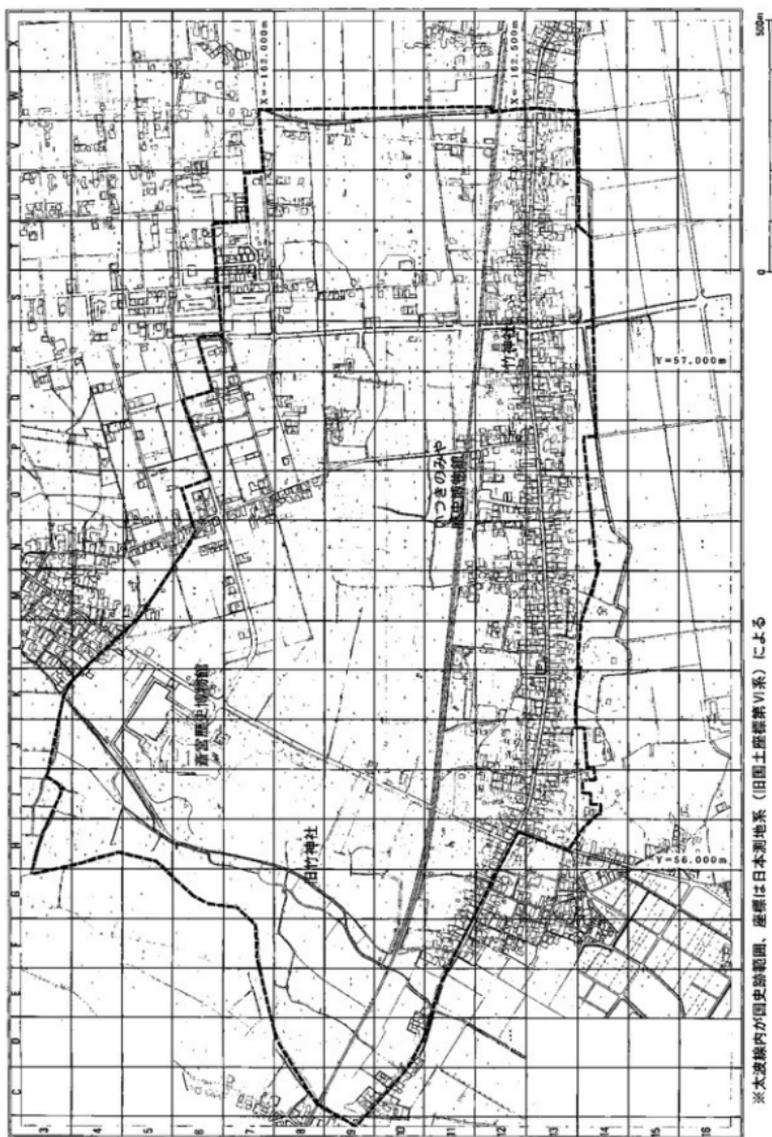
### 基準座標

史跡斎宮跡の発掘調査は30年来の蓄積がある。これまでの調査は、全て日本測地系(旧国土座標)第VI系による座標を基準として用いている。2002年4月からは世界測地系(ITRF, GRS-80)による測量への準拠が法的に唱われているが、既存の調査成果を円滑に用いながら調査を進めるために、旧国土座標の成果を引き続き用いることとした。なお、2002年度以降の調査では、世界測地系に則った国土座標表示を併記する方法を考えている。

(伊藤裕偉)



第 I - 4 図 史跡斎宮跡地区・グリッド表示方法 (2002年)



※本図域内が国史跡範囲、産屋は日本測地系（田間土路線新VI系）による

第1-5図 史跡斎宮跡における大地区表示（2002年）

## Ⅱ 第132次調査

(6AH10 中垣内地区)

### 1 調査の契機と経過

平成13年度第1回目の計画調査として平成13年5月15日から8月14日にかけて実施した第132次調査では、史跡指定地西部の大字竹川字中垣内地区の台地750m<sup>2</sup>を調査対象とした。調査地は、齋宮歴史博物館から南へ約400m、近鉄山田線の北側に位置しており、地目は畑地である。

ここ数年、齋宮歴史博物館は、平安時代頃の齋宮中枢部にあたる史跡指定地東部を中心に発掘調査を行ってきており、奈良時代末から平安時代の齋宮の状況はかなり明らかになってきたと言えてよい。

その一方で、齋宮跡が発見されるきっかけとなった蹄脚硯の出土地である史跡指定地西部の調査はあまり進んでおらず、この地域にあると目されてきた飛鳥・奈良時代の齋宮については、実態はおろか所在地すら明確になってはいない。そこで、平成13年度の計画調査では、史跡指定地東部の調査についても継続して行いつつ、西部の調査を進めて、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物の広がりを確認するとともに、史跡西部に存在していたとされる成立期の齋宮を解明する手がかりを求めることとした。

これまでに実施された史跡指定地西部の調査では、飛鳥～奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物が多数確認されており、蹄脚硯・羊形硯・鳥形硯・金銅製帯金具・大型赤彩土馬といった特殊な遺物の出土も少なくない。特に、今回の調査地点については、40mほど北側で昭和55年度に行われた第30次調査<sup>(1)</sup>に際して、飛鳥・奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物・柵が検出され、土師器・須恵器といった一般的な遺物ばかりでなく奈良三彩が出土していることから、奈良時代の齋宮にとって重要な一面を占めていることが想定されていた。



第Ⅱ-1図 第132次調査区位置図 (1:2,000)

## 2 遺構

調査区の形状については、予算の関係上、私有地の借り上げが難しかったため、公有地の形に制約された。このため大小2つの矩形を組み合わせた不整形となった。調査は、北西側の小さな矩形の調査区(西調査区)から開始し、南東側の調査区(東調査区)へと展開した。

基本的な層序は、上から表土(耕作土)・旧耕作土・地山であるが、西調査区では地山の上に不均質な黒ボク土が堆積しており、東調査区東半では、部分的に表土直下で地山が検出された。地山は、東から西へ向かって深くなっており、現地表面からの深さは東南隅付近で約20cm(標高12.8m)、北西隅で約70cm(標高12.3m)である。遺構検出については地山上面で行なった。

調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓4基・土坑1基、奈良時代の溝1条・柵1列・土坑1基、平安時代～鎌倉時代の溝・土坑などを確認した。

### (1) 弥生時代中期

この時期の主な遺構としては、方形周溝墓4基と土坑1基が挙げられる。方形周溝墓はいずれも後世の削平をうけており、墳丘部分は残っていない。

S X 8349

西調査区の北西隅で検出した直角に屈曲する溝。屈曲部から西側へは長さ約5m、東側へは約3mのところ調査区北壁にあたり、調査区外へ続く。溝の幅は、西側溝の中央付近が最も広く、検出面で約1.3m、底面で約0.6mである。屈曲部分は狭くなるが(検出面で約0.7m、底面で0.2m)、浅くはならない。断面は逆台形を呈する。方位は西溝でN-38°-W。埋土は、基本的に黒色土と黒褐色土の互層で、自然堆積土と考えられるが、流れ込む方向に偏りは認められなかった。

遺物としては、屈曲部分よりも西側では弥生土器片のみ出土したが、東側では土師器甕や放射状暗文が施された土師器皿、須恵器甕などの破片も出土した<sup>(2)</sup>。

S X 8359

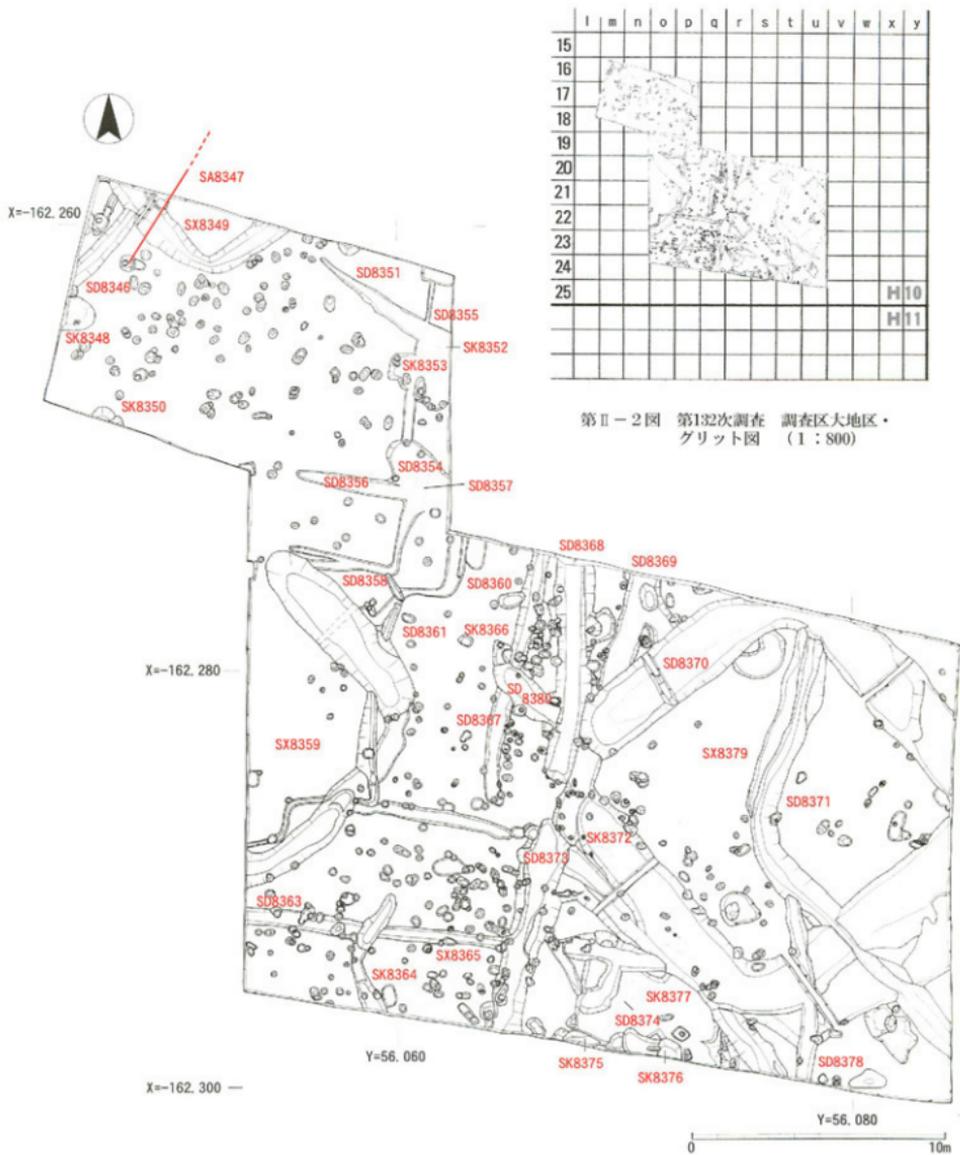
東調査区の西側で確認された方形周溝墓。西半は調査区外に続いており、今回検出できたのは東半のみであるが、一辺の長さ約8mの正方形を呈すると考えられる。周溝の北隅は、明確に切れて陸橋状になっており、東隅は浅くなっている。周溝の規模は、北東溝の幅2.3m、検出面からの深さ0.5m、南東溝の幅1.2m、検出面からの深さ約0.5mである。方位は北溝でN-42°-W。埋土は、自然堆積土で、色調や地山・黒ボク土の混じり具合から3層に分層できた。周溝で囲まれた内側から土が流れ込んだ状況が観察できることから、盛土された墳丘を想定できる。

遺物としては、北東溝の北端や南東溝の中央付近より、墳丘から転げ落ちたような状態の弥生土器が出土した。

S X 8365

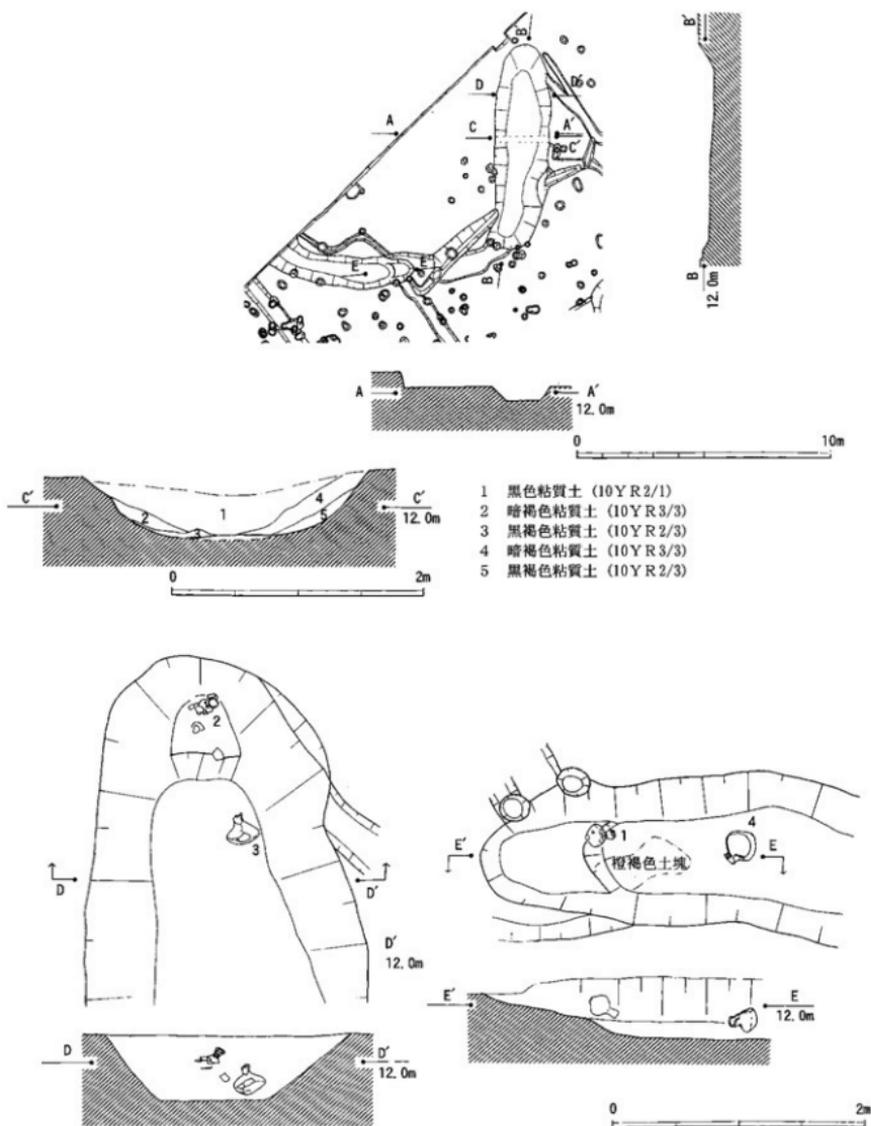
東調査区南壁際で確認された方形周溝墓。検出できたのは、南西溝から北西溝の一部及び北東溝である。墓の規模は、溝の位置関係から、一辺の長さが約7mになると考えられる。西隅は、鈍角で若干浅くなる。周溝は、幅0.4~0.8m、検出面からの深さ0.15mほどで、隅は若干狭くなる。方位は南西溝でN-21°-W。埋土は、下層が地山ブロックと黒ボク土ブロックの混成層で、その上をしまりのやや悪い黒褐色土が覆っている。

南東溝については、墓の形が一般的な略正方形であれば、調査区の範囲内に一部がかかるはずであるが検出できなかった。全般的に溝の残存状況があまり良くないこと



第Ⅱ-2図 第132次調査 調査区大地区・グリット図 (1:800)

第Ⅱ-3図 第132次調査 遺構平面図 (1:200)



第Ⅱ-4圖 第132次調査 SX 8359平面圖 (1:200)・土層圖 (1:40)・遺物出土狀況圖 (1:40)

から、周溝底面まで削平が及んでしまったことは充分考えられる。北西溝については、中央付近で途切れ、東半部分は、地山にシミのような色の濃い場所が点在していたが、溝として検出することができなかった。これを周溝の底面残欠として繋げた場合、北西溝の中央は陸橋状になり、外側へ張り出す形状になると考えられる。

遺物としては、調査区南壁から弥生土器の甕が1点出土した。

S X 8379

東調査区の東半部で確認された方形周溝墓。北西溝と南西溝には後世の溝が重複して検出された。一辺の長さ約10mの正方形を呈し、北隅と東隅は調査区外に及ぶ。周溝は、西隅が切れて陸橋状になっていたが、東隅は残存状態が悪いためはっきりしない。周溝の規模は、幅2.4~2.8m、検出面からの深さ約0.6m。方位は北東溝でN-40°-W。埋土は、地山ブロックや黒ボク土を含んでおり、その堆積状況から内側の墳丘が徐々に崩れて周溝が埋まっていったと推測される。

埋土からは、主に弥生土器が出土したが、上層には須恵器や土師器が少量混ざる。

S K 8353

西調査区東壁にかかる浅い落ち込み状の土坑。長さ3.6m程の不整形で、検出面からの深さは約0.1m。S D 8351と重複するが、新旧関係は不明瞭であった。埋土は黒褐色土である。

遺物は、弥生土器の壺と甕が大半を占めている。他に、土師器皿・須恵器甕もあるが、小片であり、調査時の混入品と考えられる。

### (2) 奈良時代前期

この時期の主な遺構としては、西調査区北西隅付近の溝1条と柵1列、東調査区南壁中央付近の土坑1基が挙げられる。

S D 8346

西調査区の北西隅で検出された断面逆台形を呈する溝。幅約0.8m、底面の幅約0.3m、調査区北壁での深さ約0.6m。平面形は緩やかなカーブを描いているが、直線的に捉えると方位は、N-40°-Eである。切り合い関係から、方形周溝墓S X 8349よりも新しく、柵S A 8347よりも古いことが判る。

遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器が出土した。

S A 8347

西調査区北西隅で検出された2個の柱穴。掘形はいずれも一辺の長さ約0.6mの平面隅丸方形、柱痕跡は直径約20cmの平面円形を呈する。柱穴を結んだラインの方位はN-30°-E、柱間は約2.8mである。

第30次調査のS A 1674の延長線上に位置しており、形状や柱間が似ていることから、関連を想定して柵とした。調査区内には、これに続く柱穴が見あたらないため、西側へ曲がり調査区外へ続く可能性を想定している。

遺物としては、土師器が出土した。

S K 8377

東調査区南壁際で検出された。南側は調査区外へ続くが、調査区内での規模は、長さ5.7m×短辺4.5m、検出面からの深さ約0.25mである。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物としては、土師器・須恵器・瓦・砥石などが出土した。

### (3) 平安時代～鎌倉時代

この時期の主な遺構としては、東調査区中央で検出された溝などが挙げられる。また、建物の間取りを復元できなかったが、調査区全域に散在するPitの中に当該時期に属するものが含まれる。

S D 8369

東調査区北半中央で検出された南北方向の溝。切り合い関係から方形周溝墓S X 8379

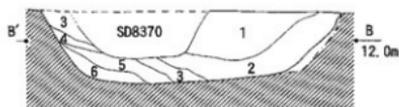
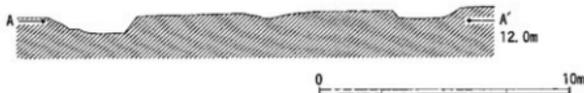
よりも新しく、S D8368・S D8373よりも古いことが判る。調査区北壁での土層断面は、幅1.4m、底面の幅1.0m、深さ0.3mの浅い逆台形を呈する。方位はN-19° -E。上下層に分けられる埋土は、いずれも黒褐色の粘質土であるが、上層は地山粒を多く含むためやや淡い色調を呈する。

遺物としては、土師器・灰釉陶器皿が出土した。

### S D8367

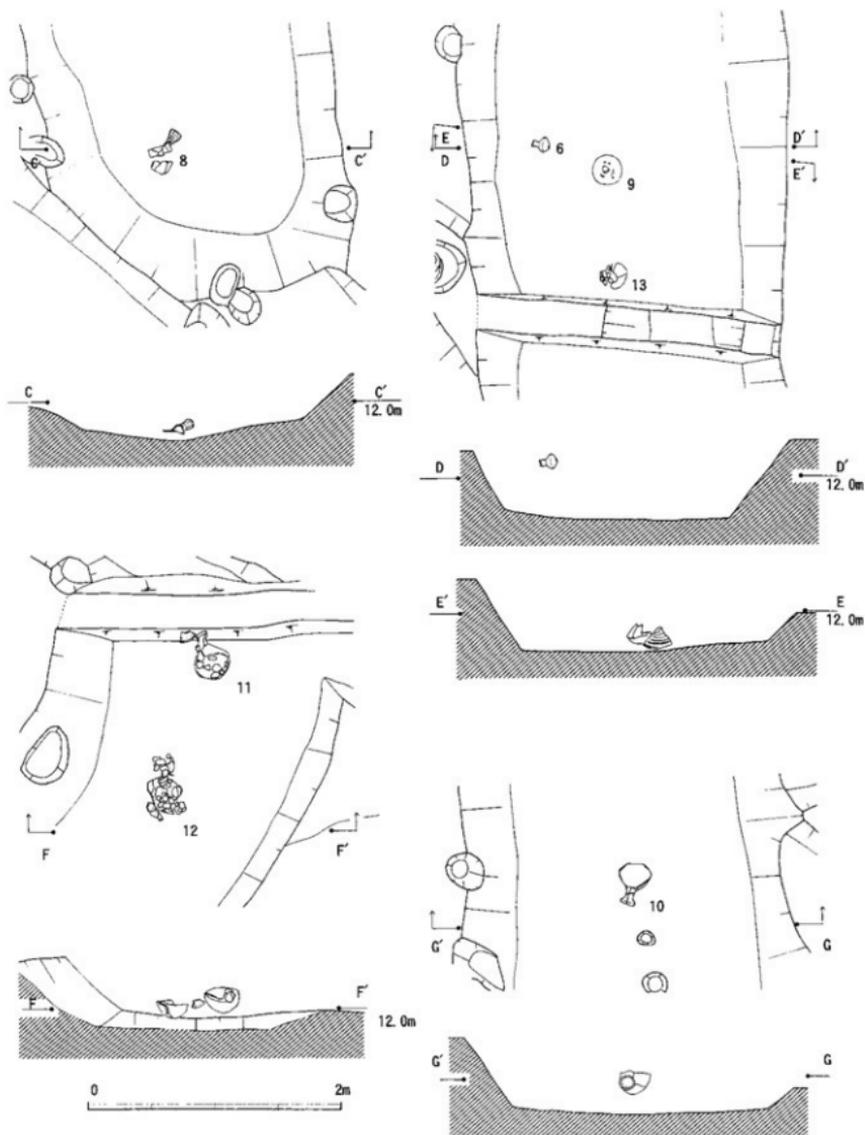
東調査区北半中央で検出された南北方向の溝。調査区北壁から南へ約11mのところを途切れる。切り合い関係からS D8380・S K8366よりも新しく、S D8368よりも古いことが判る。調査区北壁での土層断面は、幅0.9m、深さ0.3mの緩やかに開く「U」字形を呈する。方位はN-15° -E。埋土は、地山粒の含み具合により3層に分かれるが、いずれも黒褐色粘質土である。最初に東側から埋まり、後に西側から埋まったようである。

遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗<sup>(2)</sup>が出土した。



- 1 黒色粘質土 (10Y R 2/1)
- 2 暗褐色粘質土 (10Y R 3/3)
- 3 黄褐色粘質土 (2.5Y R 5/4)
- 4 地山B r (2.5Y 5/4) と黒ボクB r (10Y R 3/2)
- 5 地山B r と黒ボクB r (地山B r 多量)
- 6 地山B r と黒ボクB r

第Ⅱ-5図 第132次調査 SX8379 平面図 (1:200)・土層図 (1:40)



第Ⅱ-6図 第132次調査S X 8379遺物出土状況図 (1:40)

S D8368 東調査区北半中央で検出された南北方向の溝。切り合い関係からS D8367・8369・8380よりも新しいことが判る。調査区北壁から南へ約9mのところまで途切れる。調査区北壁での土層断面は、幅2.1m、底面の幅0.4m、深さ1.0mの逆台形を呈す。北半分は南北の方位にのるが、南半分は若干東に振れる。はじめに東側から地山ブロックを含まない土が流入し、ある程度埋まった後は水平堆積となっている。

遺物としては、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗が出土した。

S K8372 東調査区の中央付近にあるS X8369の埋土上面で、伏せた状態の山茶碗と石が検出された。いずれも茶褐色の炭化物が付着しており、S X8369とは別遺構の土坑墓である可能性を想定した。埋土の差異が僅かであったので、平面観察でも、S D8373掘削後の断面観察でも明確な遺構として捉えられなかったが、微妙に土質の異なる範囲から、概ね長辺1.2m×短辺0.8mの長方形を呈していたのではないかと推測している。

遺物としては、山茶碗・石が出土した。

S D8373 東調査区南半中央で検出された鋭角に曲がる溝。調査区南壁から調査区外へ続く。切り合い関係から方形周溝墓S X8365・8379やS K8372・8377よりも新しく、S D8374よりも古いことが判る。調査区南壁での土層断面は、西側が幅2.2m、深さ約0.7mの緩やかに開く「U」字形を呈する。屈曲部で浅くなり、東側では深さ0.55mになる。調査区南壁の土層観察の結果、西側の溝には数度の掘り直しが認められた。

遺物としては、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・常滑陶器が出土した。

#### (4) 時期不明

S K8364 東調査区南壁の際で検出された土坑。長辺0.9m、短辺0.5m、検出面からの深さ約0.1mの平面略長方形を呈する。埋土に炭を含む。

遺物は出土しなかった。

Pit 調査区全体に飛鳥・奈良時代～中世のものと考えられる柱穴・小穴が多数確認された。S A8347以外は建物として間取りを復元することができなかったが、何らかの建物になるものもあると思われる。

遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗などが出土した。

### 3 遺物(第Ⅱ-7～10回)

出土遺物は弥生時代～中世の土器・石器などで、コンテナケースに29箱の量である。

#### (1) 弥生時代中期

方形周溝墓S X8359・8379を中心に弥生土器壺・甕が出土した。壺が大半を占め、甕は非常に少なく、高杯は確認できない。壺は、内湾口縁細頸壺・受口状口縁細頸壺・受口状口縁短頸壺・広口壺があり、なかでも細頸壺が多い。

文様は、広口壺や内湾口縁壺に櫛描列点文・櫛描簾状文・櫛描直線文・櫛描波状文などの櫛描文が多用されるのに対し、受口状口縁の壺には凹線文と刷毛目が施されているものが多い。S X8359出土受口状口縁細頸壺(2)は、口縁部と頸部に円形浮文があり、竹管で押さえてある。S X8379出土短頸壺(13)は外面上半が無文である。

体部下半外面にはヘラミガキが施されている。穿孔は、1・3・9の下半部と6の底部に認められ、いずれも焼成後に行なわれたものである。

S K8353から出土した弥生土器は、口縁部に板状工具の押圧による刻み目がある甕

(14)と、体部上半に櫛描直線文、体部下半にヘラミガキが施される壺(15)であり、方形周溝臺出土のものと類似する。

時期については、垂流遺賀川式に属する広口壺(61)以外の弥生土器はすべて中期後葉に比定される。

## (2) 奈良時代前期

S K8377から奈良時代の土師器・須恵器などが出土した。土師器の杯(20)・皿(21~23)・蓋(24・25)・甕(27)・甕・盤(26)、須恵器の杯・深い杯(30)・蓋・高杯の脚(31)・円面硯(32)・台付壺(34)・平瓶(35)・鉢(33)・瓶類・甕、瓦?、砥石(36)などがある。

土師器については、大半が小破片であり、全体的に表面が磨耗しているものが多く、年代を絞り込むことが非常に難しい。一方、須恵器については、年代決定の材料に恵まれている都城でも出土することから編年研究の進んでいる猿投窯と美濃須衛窯の製品と見られるもの(猿投窯系製品30・31と美濃須衛窯系製品35)があり、概ね8世紀前半頃の年代が与えられる。ただし、土師器の皿(29)は、平安京で10世紀初め頃にみられる皿に形状が類似しており、この土坑に伴う土器ではなく、調査時に誤って取上げたものと考えられる。

### 包含層

S D8346・S K8377付近からこの時期の土師器・須恵器が出土した。土師器皿(67)は、底部外面に文字が墨書されている。破片のため、左半分しか残っていないが、「厨」の字である可能性が考えられる。須恵器蓋(72)は、内面に墨痕・磨耗痕が確認されるため、硯に転用されている。高台付きの須恵器杯(73)は、内面中央に同心円文の当て具痕が観察される。西調査区の北西隅のグリッドから出土した須恵器(72・73)は、ともに猿投窯系製品で、奈良時代前半に比定され、S K8377出土遺物とほぼ同時期のものである。

### Pit

出土遺物には、土師器杯・皿(58)・蓋・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋(60)・甕などがある。

## (3) 平安時代～鎌倉時代

平安時代の遺物としては、S D8368・S D8369とその付近の包含層などから灰釉陶器が出土しているが、量的には少ない。包含層出土灰釉陶器皿(74)は、平安京で10世紀初め頃の土師器に伴って出土することの多いものである。

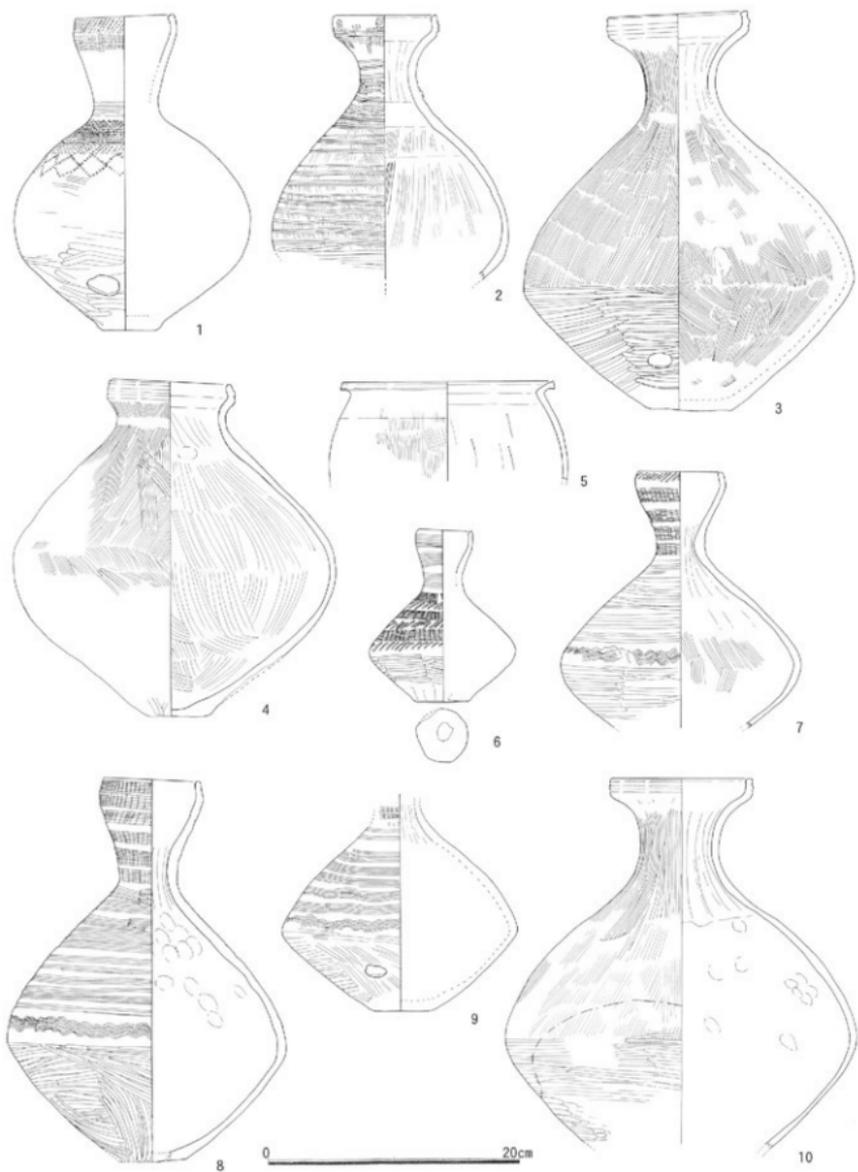
### S D8368

S D8368・S D8373などからは、平安時代末期から鎌倉時代の遺物が出土した。

土師器(皿・鍋・甕)、須恵器甕、灰釉陶器椀皿類、山茶碗(碗41~46・小碗47・鉢・甕)などがある。

土師器皿はいずれも非ロクロ成型で、口径12cm程の厚手のものと口径6cm程の薄手のものに大別できる。

山茶碗は、非常にゆがんだ形の高台をもつものや高台に砂粒痕が認められるものが多い。胎土にも砂粒が多く含まれているなど、渥美窯産の特徴を見出すことができるものがある。型式的には、渥美・湖西窯では山茶碗を生産していないとされる瀬戸窯編年<sup>(4)</sup>第3型式併行のものから、渥美・湖西窯編年<sup>(5)</sup>Ⅲ期2段階(第7型式併行)のものまであり、Ⅱ期(第5型式併行)を中心としている。内面はすべて磨耗しており、古い型式のものほど磨耗の度合いが著しい傾向が見受けられる。鉢は片口部分の口縁部片がある。壺は、頸部の破片で内外面に自然釉が厚くかかっている。甕(48)は口頭



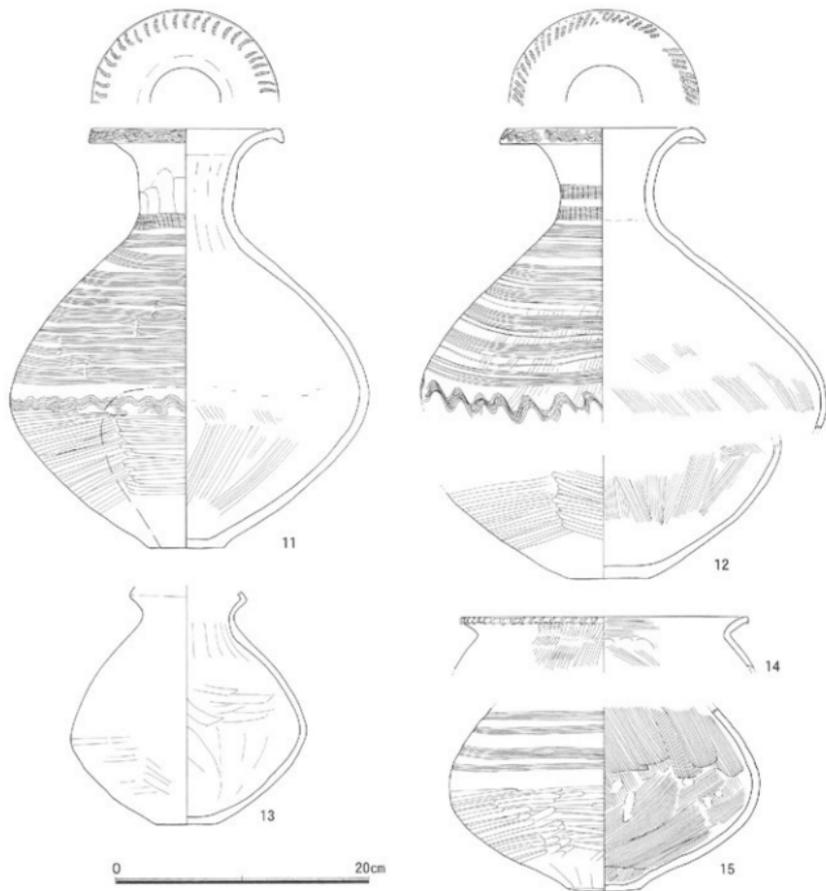
第II-7图 第132次調查区出土遺物実測図(1)(1:4, 1~4: SX8359, 5: SX8365, 6~10: SX8379)

部の破片で、内外面に灰釉が施されているが、特に外面は横方向に刷毛塗りの痕跡が明瞭に観察できるものである。

**S K 8372** 褐色の炭化物が付着した山茶碗の完形品1点(49)がある。灰釉をつけかけた輪花碗で、高台に髹殺痕が認められるものである。渥美・湖西窯製品と見られ、I期中段階(瀬戸窯編年第4型式に併行)に比定できる。

**S D 8373** 土師器皿(50~52)・甕(53)、灰釉陶器小碗(54)、山茶碗(55)、常滑陶器鉢(56)・甕(57)などがあり、方形周溝墓S X 8379や奈良時代の土坑S K 8377と接する付近では、弥生土器や土師器杯、須恵器も出土した。

土師器皿は、非ロクロ成型とロクロ成型のものがある。山茶碗は、S D 8368出土のものとは大差ないが、型式的に中心をなす渥美・湖西窯編年II期への集中度合いが高い



第II-8図 第132次調査区出土遺物実測図(2)(1:4, 11~13: S X 8379, 14・15: S K 8353)

ようである。常滑陶器には押印の施された甕と鉢がある。

包含層

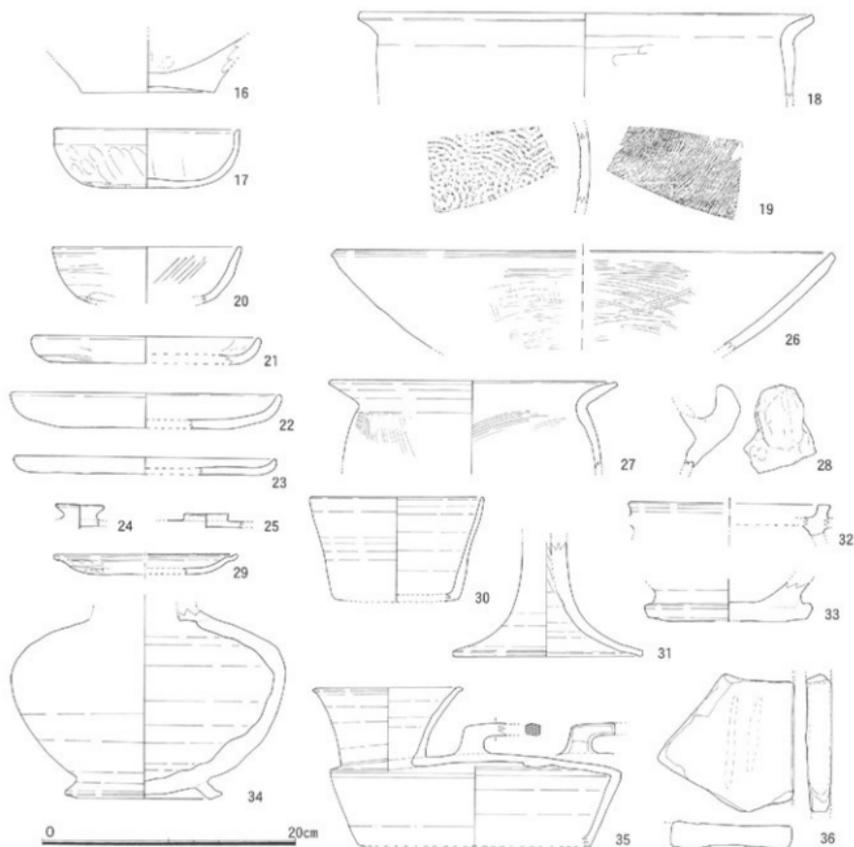
ロクロ成形土師器(70)・山茶碗(75~79)・中国製磁器(青磁・白磁)・国産磁器・鉄釘などがある。

Pit

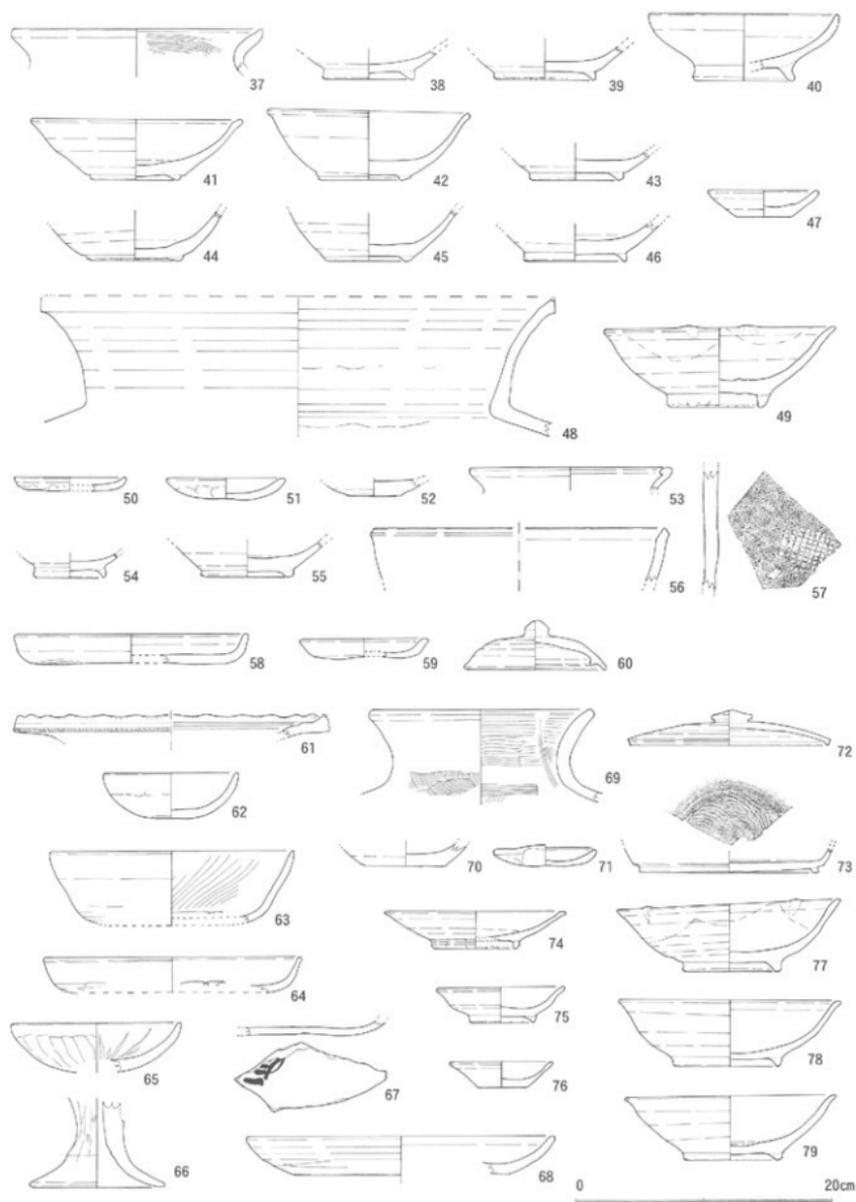
土師器皿(59)・山茶碗などがある。

(4) 特殊遺物

墨書土器 1点(包含層出土67)・硯 2点・青磁 6点(表土・包含層出土)・白磁 2点(包含層出土)・鉄釘 1点(包含層出土)があるが、他調査区に比べて非常に少なく、緑釉陶器は 1点もない。硯は S K 8377 出土須恵器円面硯(32)と包含層出土須恵器杯蓋の転用硯(72)がある。土師器甕の胴部にヘラ記号が認められるものも包含層から 2点出土しているが小片のため全容は不明である。



第Ⅱ-9図 第132次調査区出土遺物実測図(3)(1:4, 16~19:SD8346, 20~36:SK8377)



第Ⅱ-10図 第132次調査×出土遺物実測図(4)(1:4, 37: S D8369, 38~40: S D8367, 41~48: S D8368, 49: S K8372, 50~57: S D8373, 58~60: P i t, 61~79: 包含層)

## 4 まとめ

### (1) 方形周溝墓

断定できないものも含めて4基の方形周溝墓が確認された。斎宮跡でこれまでに調査された方形周溝墓は、古里地区周辺の四隅に陸橋をもつタイプと、第107次調査地周辺の隅が浅く狭くなるタイプに大きく二分されている<sup>(6)</sup>。今回の調査で確認された方形周溝墓は、一部しか調査できなかったものや残存状態が悪いものがあり、全体像が知れるのはS X 8379しかないが、どちらかといえば形態的にも位置的にも後者の一群に属するようである。ただ、隅が浅くならないものや、途切れる隅と浅くなる隅を有するもの、辺の中央に陸橋があるものなど、その様相は一様ではない。

### (2) 奈良時代

第30次調査で確認された奈良時代の溝S D 1635は、その西側約8mのところにある溝S D 1622と平行しているため、道路側溝と考えられる。今回検出したS D 8346は、このS D 1635の延長線上にあり、規模・形状が概ね類似していることから同一の溝であり、西側が道路になるのではないかと考えている。

また、同じく第30次調査のS A 1674を南へ延長した線上で柱穴2穴確認したため、柵とした。S A 1674の柱穴の間隔は2.5m～3.3mと一定していないが、平均すると約2.8mになり、S A 8347の柱間に概ね合致している。

第30次調査区では、道路や柵の東側にも掘立柱建物などの遺構の広がりが見られたが、今回は土坑1基のみで建物は確認されなかった。包含層出土の奈良時代遺物も、土坑のグリッドを除けば、西調査区西隅から比較的多く出土した。以上の所見から、奈良時代の斎宮に関連する建物や区画が存在する場所は、第30次や今回の調査区よりも西側の可能性が高いと考えられる。また、S D 8346・S A 8347からは詳細な時期が判別可能な遺物は出土していないが、周辺の包含層から出土した須恵器の年代観から、調査区西側に想定される施設は、S K 8377とほぼ同時期の奈良時代前期に属すると考えられる。

### (3) 平安時代～鎌倉時代

この時期の溝は、方形周溝墓の隅で途切れるS D 8368や角度が変わるS D 8373、周溝に重複するS D 8370など、方形周溝墓に規制されて掘削されているようである。また、時期不明の柱穴や小穴が方形周溝墓の内側から殆ど確認されないことを加味すると、少なくともこの頃までは、方形周溝墓がある程度の高さを保っていたと考えられる。

(水橋公恵)

## 註

(1) 三重県斎宮跡調査事務所「三重県斎宮跡調査事務所年報 1980 史跡斎宮跡—発掘調査概報—」(1981年)

(2) 少量の小片ではあるが奈良時代の土器片が出土していることや、推定される規模や周溝の断面形態は、他の方形周溝墓との相違点として挙げられる一方、位置や方位に関係性の深さを読み取ることもできる。推定される遺構範囲の一部を調査したに過ぎないため、ここでは方形周溝墓の可能性を想定し、周辺の調査の進展を待ちたい。

(3) いわゆる「山茶碗」については、様々な見解・呼称があるが、本稿では壺器系陶器第2類(白瓷系陶器)(植崎彰一「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1977年)を指す名称として使用する。

(4) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号 1994年)

(5) 註(4)に同じ。

(6) 赤岩操「Ⅲ. 第107次調査」(『史跡斎宮跡 平成6年度 発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1995年)

通番	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	主なグリット	時期	査宮編年	備考
SD 8346	道路側溝?	132	溝 1	H10	m16	奈良前半	I-2	第30次SD1635の延長線上
SA 8347	欄?	132	m16-p4・5・n16-p1	H10	m16・n17	奈良前半	I-2	第30次SA1674の延長線上
SK 8348		132	土坑 2	H10	m17	奈良?		
SX 8349	方形周溝墓?	132	溝 2・3	H10	m~o16	弥生?		
SK 8350		132	土坑 3	H10	m18	不明		
SD 8351		132	溝 5	H10	p17	奈良~		
SK 8352		132	土坑 1	H10	p17	弥生		
SK 8353		132	土坑 5	H10	p17,p18	弥生		SD8355より古い
SD 8354		132	溝 16	H10	p19	不明		SD8355・8357・8360より古い
SD 8355	小溝	132	溝 4	H10	p17~19	中世以降		
SD 8356		132	溝 6	H10	o19,p19	古代~		
SD 8357	小溝	132	溝 14	H10	p19	中世以降		
SD 8358	小溝	132	溝 7	H10	o19	中世以降		
SX 8359	方形周溝墓	132	溝 10	H10	o19,o20,p22	弥生		
SD 8360	小溝	132	溝 15	H10	q20	中世以降		
SD 8361	小溝	132	溝 8・9	H10	p20,p21	中世以降		
SD 8362		132	溝 11	H10	p22,q22	不明		SD8362と平行
SD 8363		132	溝 12	H10	o23,q23	不明		SD8362と平行
SK 8364		132	土坑 19	H10	p24	不明		埋土に炭を多く含む
SX 8365	方形周溝墓	132	溝 13	H10	p23,p24	弥生		
SK 8366		132	土坑 17	H10	q20,p21	弥生		SD8367より古い
SD 8367		132	溝 24	H10	q20,q21	中世前期		
SD 8368		132	溝 17	H10	r20,r21	中世前期		
SD 8369		132	溝 18	H10	r20,r21	古代以降		
SD 8370		132	溝 23	H10	s21	不明		SX8379の周溝に重複
SD 8371		132	溝 21	H10	t20~23	中世以降		SX8379より新しい
SK 8372		132	土坑 6	H10	r22	中世		
SD 8373		132	溝 19	H10	q23,r23	中世		
SD 8374		132	溝 22	H10	r24	中世以降		SD8373より新しい
SK 8375		132	土坑 18	H10	r24	弥生?		
SK 8376		132	土坑 14	H10	s24	中世前期?		SK8377より新しい
SK 8377		132	土坑 20	H10	r24,s24	奈良前半	I-2	
SD 8378		132	溝 30	H10	t24.25	不明		SX8379より新しい
SX 8379	方形周溝墓	132	溝 25・27・29	H10	s20,t24,u21	弥生		
SD 8380		132	溝 28	H10	q21	不明		SD8367・8368より古い

第II-1表 第132次調査遺構一覧

No.	出土 説明	器種	法 型 (cm)	製法・技法の特徴	胎土	構成	色 調	残存度	痕 跡	登録No.
1	SD6359	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	7.6 4.1 2.6 口:ヨコナデ、体外:(上)ハケメ+ナデ+細編 列点文、(下)ハケメ+ヘラミガキ	1mm 細粒 多含	灰	にぶい黄緑10YR7/4	完形	内湾口縁、体:横成後穿孔 外:縞6本/約1.5cm	000-01
2	SD6359	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	6.8 3.3 2.9 口:ヨコナデ+薄文+特管文、外:(上)ハケメ +細編列点文、(下)ヘラミガキ、内:ハケメ	灰	淡黄2.5Y7/4	高欠損	突口状口縁 外:ハケ5本/cm	001-01	
3	SD6359	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	10.8 6.5 2.9 口:ヨコナデ、体外:(上)ハケメ、(下)ヘラミガ キ、底外:ナデ、内:ハケメ	灰	橙7.5YR7/6	一部欠	突口状口縁 体:横成後穿孔 外:ハケ7本/1.2cm、縞縞	002-01	
4	SD6359	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	9.2 4.5 2.7 口:ヨコナデ、体外:(上)ハケメ、(中)不明、 (下)ヘラミガキ、内:ハケメ	灰	明黄褐10YR7/6	3/4	明黄褐10YR7/6 内:ハケ3本/cm	004-01	
5	SD6365	養生土器 甕	口径 底径 器高	16.8 10.0 2.7 口:ヨコナデ、外:ハケメ、内:板ナデ	雲母 砂粒 多含	灰	明黄褐10YR8/6	口1/5	外:ハケ5本/cm	014-03
6	SD6379	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	4.2 4.1 13.8 口:ヨコナデ、体外:(上)細編直線文+細編 4.1)杖文+細編列点文、(下)ヘラミガキ	1mm 細粒 多含	灰	にぶい黄緑10YR8/4	ほぼ 完形	内湾口縁、体:横成後穿孔 外:縞状文9本/1.2cm	000-01
7	SD6379	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	6.3 19.0 20.2 口:細編列点文、体外:(頭)細編直線文、 (上)細編直線文、(中)細編直線文、(下)ヘラ ミガキ、内:ハケメ	やや粗 白色粒 多含	灰	橙7.5YR7/6	口蓋 完形	内湾口縁 内:ハケ7本/1.2cm	012-01
8	SD6379	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	7.4 22.2 31.0 口:ヨコナデ、体外:(頭)細編直線文、(上)細 編直線文、(中)細編直線文、(下)ヘラミガ キ、内:ユビオサエ	白色粒 雲母 多含	灰	橙7.5YR7/6	ほぼ 完形	内湾口縁 外:縞状文6本/cm、縞縞	000-01
9	SD6379	養生土器 甕	口径 底径 器高	4.8 6.3 27.7 体外:(頭)細編直線文、(上)細編直線文、 (中)細編直線文、(下)ヘラミガキ、内:不明	雲 母多 含	灰	にぶい黄緑10YR8/4	体のみ	体:横成後穿孔	008-01
10	SD6379	養生土器 細磁甕	口径 底径 器高	11.0 27.7 30.3 口:ヨコナデ、体外:(上)ハケメ、(下)ヘラミガ キ、内:ユビオサエ	1mm 細粒 多含	灰	橙7.5YR7/6	口完形	突口状口縁、口:二条の筋縞 外:ハケ5本/cm、縞縞	011-01
11	SD6379	養生土器 広口甕	口径 底径 器高	14.8 34.6 20.2 口:ヨコナデ+細編列点文、細編直線文、体 6.0)外:(頭)板ナデ、細編直線文、(上)細編直線 文、(中)細編直線文、(下)ヘラミガキ、体内: (上)ユビ、(下)ハケメ	灰	明赤褐5YR5/6	ほぼ 完形	外:縞縞	009-01	
12	SD6379	養生土器 広口甕	口径 底径 器高	14.2 6.1 14.2 口:ヨコナデ+細編列点文+細編直線文、体 6.1)外:(頭)縞状文、(上)黄緑文、(中)波状文、 (下)ヘラミガキ、内:ハケメ	灰	橙5YR6/6	5/6	内:ハケ6本/cm	010-01	
13	SD6379	養生土器 短甕	口径 底径 器高	4.7 4.8 1.0 外:(上)不明、(下)ヘラミガキ、内:(上)板ナ デ、(下)ナデ	雲 母 多 含	灰	橙7.5YR7/6	3/5	007-01	
14	SK8353	養生土器 甕	口径 底径 器高	22.2 10.0 14.2 口:外:ヨコナデ+刺刺(キザミ)、体外:ハケ メ、口内:ヨコハケ、体内:ユビオサエ	雲 母 多 含	灰	橙7.5YR6/6	口1/6	019-02	
15	SK8353	養生土器 甕	口径 底径 器高	5.7 4.8 1.0 体外:(上)細編直線文、(下)ヘラミガキ、(底 部)板状工具によるナデ上、体内:ハケメ	灰	橙7.5YR6/6	体1/2 感完形	外:ハケ5本/7.5cm	019-01	
16	SD6346	養生土器 土師甕	口径 底径 器高	10.4 14.2 2.8 体外:ナデ、底外:無筋面、内:ユビ	粗 1mm 砂粒 多含	灰	明黄褐10YR7/6	底のみ 完形	013-01	
17	SD6346	土師器 甕	口径 底径 器高	14.2 14.2 2.8 口:ヨコナデ、外:ナデ、ユビオサエ(底一部は 4.8cm目黒板ナデ)、内:板ナデ	灰	にぶい橙7.5YR7/4	3/4	014-01		
18	SD6346	土師器 甕	口径 底径 器高	(36.0) 10.0 14.2 口~外:ヨコナデ、内:板ナデ	やや粗 1mm 砂粒 多含	灰	にぶい黄緑10YR7/4	口1/8	013-02	
19	SD6346	須恵器 甕	口径 底径 器高	— — —	密 硬	灰白5Y7/1	—	体部片	013-03	
20	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	14.2 14.2 2.8 口:ヨコナデ、外:ヘラミガキ(一部ヘラミガ キ)、内:ハケメ+杖文+放射状縞文	やや中 粒	灰	橙7.5YR6/6	口1/6	放射状縞文	020-05
21	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	17.6 14.2 2.8 口:ヨコナデ、体外:ヨコナデ+ミガキ、底外:ケ ズリ、内:ヨコナデ+放射状縞文	雲 母多 含	灰	橙7.5YR6/6	口1/10	放射状縞文	020-06
22	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	21.0 2.8 2.8 口~内:ヨコナデ、外:不明	雲 母多 含	灰	橙7.5YR6/6	1/4	020-07	
23	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	20.5 1.4 2.8 口~内:ヨコナデ、外:ケズリ	雲 母多 含	灰	黄緑10YR6/6	1/4	020-08	
24	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	— — —	外:ヨコナデ、内:不明	灰	橙7.5YR6/6	底のみ	020-03	
25	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	— — —	ヨコナデ	灰	橙7.5YR6/6	底のみ	020-02	
26	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	(40.0) 10.0 14.2 外:ハケメ+ヘラミガキ、内:ケズリ+後編い ヘラミガキ	雲 母多 含	灰	橙5YR6/6	口1/10	022-02	
27	SK8377	土師器 甕	口径 底径 器高	22.6 10.0 14.2 口:ヨコナデ、外:ハケメ、内:不明(一部ハケ メ)	灰	淡黄褐10YR8/4	口1/5	022-01		
28	SK8377	土師器 把手	口径 底径 器高	— — —	—	灰	にぶい黄緑10YR7/4	把手 のみ	021-01	

第Ⅱ-2表 第132次調査出土遺物観察表(1)

No.	出土 品類	器種	法 量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色 調	残存度	備 考	登録No.
29	SK8377	土師器 盃	口径 縁高	口:ヨコナデ、体外:ユビオサエ、ヨコ方向のケズリ、底外:放射状のケズリ	並 軟	黄褐色10YR8/4	口1/10			020-04
30	SK8377	須恵器 杯	口径	13.7 体外~内:ロクロナデ、底外:ロクロケズリ後ナデ	細 硬	灰黄褐10YR5/2	1/4			023-02
31	SK8377	須恵器 高杯	底径	14.8 ロクロナデ、内:しぼり痕	並 硬	黄褐色10YR8/6	脚4/5			023-03
32	SK8377	須恵器 瓶	口径	(15.0) ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	底高 1/10	すかし		021-02
33	SK8377	須恵器 鉢	最大径	13.3 体外:ヨコナデ(底部:タタキ後ヨコナデ)、底外:放射状なし、体内:ヨコナデ、底内:ナデ	並 硬	灰5Y5/1	底3/4			023-04
34	SK8377	須恵器 付台蓋	底径	10.8 体外(上)ロクロナデ、(中)タタキ、(下)ロクロケズリ後ナデ、内:ロクロナデ	並 硬	灰10Y5/1	下半部 2/3	内:蓋体のくす付着		024-02
35	SK8377	須恵器 平皿	口径 底径	11.2 18.4 口~体内:ロクロナデ、体外:ロクロケズリ後ナデ、内:ロクロナデ	並 硬	灰5Y6/1	1/2	腹部接合部付着:空気孔		024-01
36	SK8377	灰石 厚さ	2.0			にぶい黄褐7.5YR5/4				023-01
37	SD8369	土師器 壺	口径	19.7 口:ヨコナデ、内:ハケテ	並 軟	にぶい黄褐色10YR7/3	口1/8	内:ハケテ本ノコ		017-01
38	SD8367	灰土師 山茶碗	高台径	6.7 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:磨耗		018-02
39	SD8367	灰土師 碗	高台径	7.5 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:磨耗 高台:粒数値		018-03
40	SD8361	土師器 椀	口径 高台径 器高	14.8 7.6 5.3 口:ヨコナデ、体外:無面長+53、底外:貼付7.6ナデ、内:不定方向の楕円ナデ	並 軟	にぶい黄褐10YR7/4	1/3			018-01
41	SD8368	山茶碗 高台径 器高	16.4 7.2 4.9 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	口1/6	内:高台:磨耗		018-01
42	SD8368	山茶碗 高台径 器高	15.7 7.3 5.2 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	細 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:磨耗 高台:砂粒状			015-01
43	SD8368	山茶碗 高台径	7.3 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り後ロクロケズリ	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:磨耗			018-03
44	SD8368	山茶碗 高台径	7.5 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	細 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:磨耗 高台:粒数値			015-03
45	SD8368	山茶碗 高台径	7.1 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	細 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:やや磨耗 高台:砂粒状			015-02
46	SD8368	山茶碗 高台径	8.0 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:磨耗			016-02
47	SD8368	山茶碗 小皿	口径 高台径 器高	8.3 4.2 2.1 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	細 硬	灰白5Y7/1	1/2	内:磨耗		015-04
48	SD8368	灰土師器 壺	口径	30.5 口:ヨコナデ(体外:一部タタキ)	並 硬	灰白5Y7/1	口の大き 1/4	口外:灰土(ハケテ)		016-04
49	SK8372	山茶碗 縁花 器高	17.8 7.0 6.2 体外~内:ロクロナデ、体外:不明	並 硬	灰白5Y7/1	完形		縁花4個、縁のツケガケヶ所、黒褐色炭化物付着 高台:砂粒状		020-01
50	SD8373	土師器 皿	口径 縁高	8.8 1.1 口~内:ヨコナデ、外:ユビオサエ	並 軟	明黄褐10YR7/6	1/6			017-02
51	SD8373	土師器 皿	口径 縁高	8.8 1.7 口~内:ヨコナデ、体外:ユビオサエ、底外:ユビオサエ+ケズリ?	並 軟	明黄褐10YR7/6	1/4			017-03
52	SD8373	ロクロ 土師器 皿	底径	4.5 体外~内:ロクロナデ、底外:糸切り痕	並 軟	にぶい黄褐色10YR7/3	底完形			017-04
53	SD8373	土師器 壺	口径	15.3 ヨコナデ	並 軟	黄褐色10YR8/4	口1/8			017-05
54	SD8373	灰土師器 小瓶	高台径	5.4 ロクロナデ	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	内:全量灰土		017-06
55	SD8373	山茶碗 高台径	7.3 ロクロナデ(底内:ユビナデ)	並 硬	灰白5Y7/1	底完形	底外:砂粒 内:炭色化、磨耗			017-07
56	SD8372	灰土師器 片口鉢	口径	33.0 ロクロナデ	並 硬	褐10YR4/6	口1/12	自然輪+付着		017-08

第II-3表 第132次調査出土遺物観察表(2)

編	出土遺構	器種	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考	登録No	
57	SD3E373	常滑陶器		—	コナデ	並	緑赤褐5YR3/4	破片		017-09	
58	Pit	土師器 皿	口径 18.1 器高 1.4	口:コナデ、外:ヘラケズリ、内:ナデ	並	並	橙 5YR7/8	1/10		029-03	
59	Pit	土師器 皿	口径 9.7 器高 1.6	口:コナデ、外:磨製皿、内:不明	並	並	明黄褐 10YR7/6	底一部欠損	底外:磨製皿	029-02	
60	Pit	土師器 鉢	口径 11.0 器高 3.9	口:ロクロナデ、体外(下)ロクロナデ、(上)ヘラケズリ、体内:ロクロナデ、天内:一方向ナデ	～1mm小粒石多量	硬	灰白5Y7/1	3/5		028-01	
61	包舎層	弥生土器 広口甕	—	—	口:灰緑+割み目、外:コナデ、内:窪底沈線	並	灰にふい黄褐 10YR7/4	口小片		029-01	
62	包舎層	土師器 鉢	口径 10.5 器高 3.6	口～内:コナデ、外:粘土砥底	並	並	灰にふい黄褐 10YR7/4	1/2		029-05	
63	包舎層	土師器 碗	口径 19.1	体外:コナデ(底部:ヘラケズリ)、内:コナデ+隈文	やや精緻な自由	軟	橙 5YR6/8	1/8	内:一段放射状隈文+螺旋隈文(再許留り)	025-02	
64	包舎層	土師器 皿	口径 20.0	口～体外:コナデ(底部:ヘラケズリ)、内:コナデ+螺旋隈文	やや精緻	軟	橙 5YR6/8	口1/8	螺旋隈文	029-03	
65	包舎層	土師器 高杯	口径 13.2	口:コナデ、外:ヘラケズリ、内:コナデ後編い放射状隈文	並	軟	橙 5YR6/8	杯1/2	65と同一器体か	025-06	
66	包舎層	土師器 高杯	口径 9.8	底:コナデ、脚外:ハケメ、二帯り底、器内:無調整	並	軟	橙 5YR6/8	器5/6	65と同一器体か	029-07	
67	包舎層	土師器 皿	—	—	外:ユビオサエ+ヘラケズリ、内:ハケメ	並	軟	橙 5YR6/8	破片	底外:「磨き」?	029-03
68	包舎層	土師器 高杯	口径 24.0	口～体外:コナデ(底部:ヘラケズリ)、底外:不明、内:コナデ	やや精緻	軟	橙 5YR6/8	口1/6		029-04	
69	包舎層	土師器 須臾甕	口径 17.2	口外:コナデ、体外:ナメタテハケ、内:ヨコハケ	並	軟	橙 7.5YR7/8	口1/4		026-01	
70	包舎層	ロクロナデ 土師器 杯	口径 6.5	体外～内:ロクロナデ、底外:糸切り底	並	硬	明黄褐 10YR7/6	底残存 完整		029-08	
71	包舎層	土師器 皿	口径 7.6 器高 1.6	口:コナデ、外:ユビオサエ、内:不明	並	軟	明黄褐 10YR7/6	完整		029-02	
72	包舎層	須臾甕 土師器 杯	口径 15.4 器高 2.8	口～外:ロクロナデ、内:糸切り底	並	硬	暗灰黄 2.5Y5/2	1/10	内:磨粒+泥痕	029-03	
73	包舎層	須臾甕 土師器 杯	口径 13.9	体外:ロクロナデ、底外:ロクロナデ、内:ロクロナデ	並	硬	暗灰黄 2.5Y5/2	底1/3	内:面にて其痕	029-04	
74	包舎層	須臾甕 土師器 杯	口径 13.8 器高 3.0	口外～体外:(上)ロクロナデ、(下)ロクロナデ、内:コナデ	並	硬	灰白5Y7/1	1/3	体:ハケヌリ灰胎 内:裏ね焼き痕 底:磨粒	029-06	
75	包舎層	山家窯 小碗	口径 9.5 器高 4.5 器底 2.8	体外～内:ロクロナデ、底外:糸切り底	並	硬	灰白5Y7/1	3/5	内:全面自然釉 台:粉砕底	026-06	
76	包舎層	山家窯 小碗	口径 7.8 底径 4.0 器高 2.1	体外～内:ロクロナデ、底外:糸切り底	並	硬	灰白5Y7/1	4/5	内:やや磨粒	026-07	
77	包舎層	須臾甕 土師器 杯	口径 17.2 器高 5.3	体外～内:ロクロナデ、底外:糸切り底	並	硬	灰白7/0	口一部欠損	灰緑ツケカケ、輪花4器 内:磨粒 高台:砂粒底	026-01	
78	包舎層	山家窯 碗	口径 17.0 器高 8.0 器底 5.3	体外～内:ロクロナデ、底外:糸切り底	やや精緻	硬	灰白5Y7/1	1/2	内外:一部黒付層 内:高台:磨粒	028-02	
79	包舎層	山家窯 碗	口径 16.2 器高 7.1 器底 5.2	体外～内:ロクロナデ、底外:糸切り底	並	硬	灰白5Y7/1	1/2	内:黒付層 台:砂粒底	027-01	

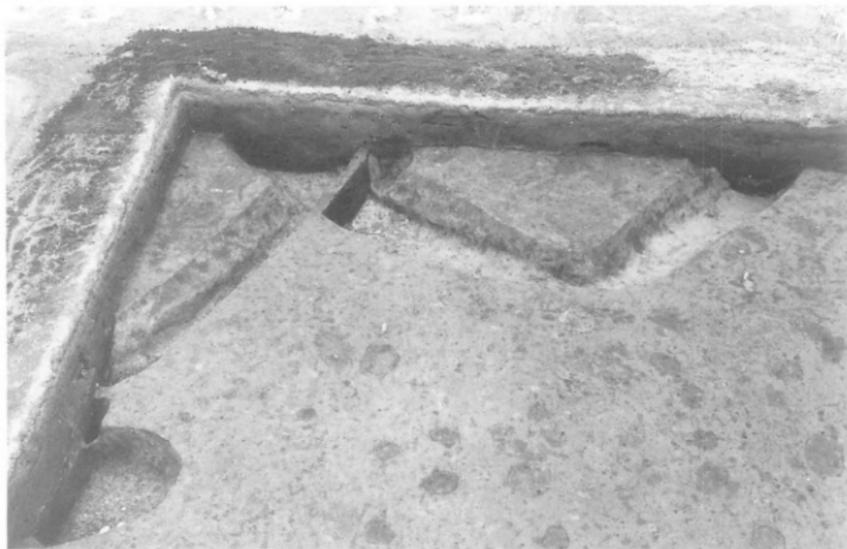
第Ⅱ-4表 第132次調査出土遺物観察表(3)



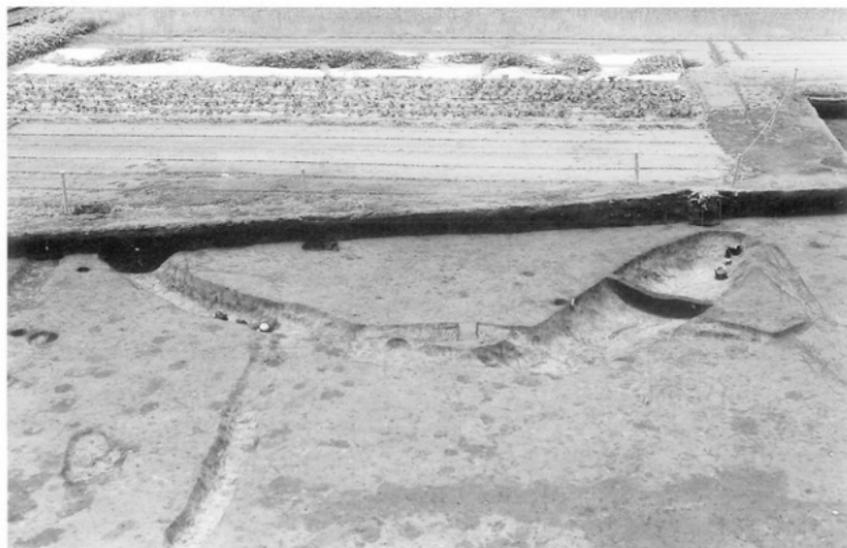
調査区遠景(東から)



調査区全景(真上から、上が北)



S D8346・S A8347・S K8348・S X8349 (南から)



S X8359 (東から)



S X 8359 遺物出土状況(南東から)



S X 8359 遺物出土状況(北東から)



S X 8379 (北西から)



S D 8367・8368・8369 (北から)



S X 8379 遺物出土状況(北東から)



S X 8379 遺物出土状況(南西から)



1



3



2



4



6



9



8



10



11



12



11  
(口縁部)



13



2  
(口頸部)



5



60



14



31



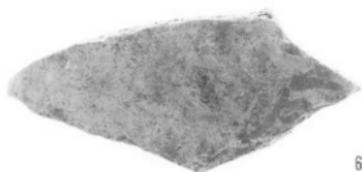
17



34



62



67



35



40



41



59



42



71



77



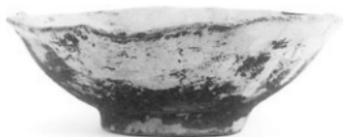
75



76



78



49



79

### Ⅲ 第133次調査

(6A T10・T11 西加座地区)

#### 1 調査の契機と経過

第133次調査区は、1980年度に行った第34次調査の東に隣接する位置にあたる。現況は畑地である。1982年度の第47次6AFK-Kトレンチがほぼ調査区内に含まれている。

史跡東部では、奈良時代後期以降に造営されたと考えられる、一辺約120mを基本とする方格地割が展開しており、今回の調査区は「西加座南ブロック」内に相当する。2003年3月に公開された「斎宮跡歴史ロマン広場」における1/10模型で、西加座南ブロックの西部は「神殿」空間として位置づけられ、そのような建物配置が復元されている。今回の調査区は「神殿」空間の東に隣接する場所であり、その空間構成および西加座南ブロック南東部における方格地割区画溝との関係の把握を目的として行った。

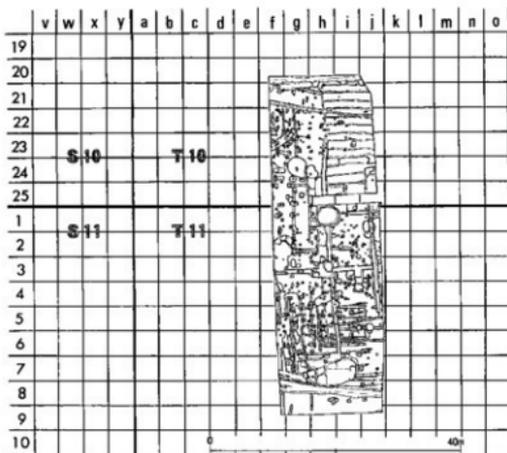
調査は2002年8月16日から開始し、同年12月10日に埋め戻しが完了した。最終調査面積は約910m<sup>2</sup>であった。この間、8月23日に体験発掘(参加者36名)を、11月18日には現地説明会(参加者約110名)を開催した。

#### 2 調査区の層位

調査区の現況は畑地である。現状での標高は、調査区南端部で約9.6m、北端で約10.1mであり、南に向かってやや低い状況である。調査区の遺構は、表土直下の暗褐色土層上面で近世の遺構が、暗褐色土下面で古代の遺構が確認できる。古代の遺構検出面は、北部が赤褐色土、中央部が黄灰色土、南部が黒色土であるが、南部の黒色土



第三-1図 第133次調査区位置図(1:2,000) 太破線は、想定される方格地割区画溝の位置



第三-2図 第133次調査区 大地区・グリット図(1:800)

上からは明確に遺構が確認できなかつたために、調査では黄灰色土層まで下げて遺構検出を行っている。赤褐色土～黄灰色土は段丘上における2次堆積土で、黒色土はいわゆる「黒ボク」に相当し、赤褐色～黄灰色土上に堆積したものである。

これらの遺構検出面における基盤層の状況は、調査区の南部にかつて段丘上に形成された小規模な解析谷が存在していたことを示しており、それが現況の標高差としても現れていると考えられる。黒ボクはちょうどその谷状地に相当する部分に見られる。

したがって、斎宮寮機能時期である古代においても、調査区南部は水捌けの悪い土地条件であったものと想定される。

### 3 遺構

主軸方位の  
表示方法

今回の調査区では、奈良時代から平安時代にかけての古代、および近世の遺構を確認している。ここでは主立った遺構を採り上げるので、それ以外の遺構については第三-3～7表に示した遺構および掘立柱建物一覧を参照されたい。なお、掘立柱建物の主軸方位は、南北棟・東西棟を問わず全てN軸基準で表記している。したがって、東西棟の場合は棟方向に垂直となる角度となっている。

#### (1) 古代の遺構

##### a 掘立柱建物

SB1843

SB1843は、調査区北部のT10区f・g21グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、南側柱列の東寄り2柱穴を確認した。東西は3間(6.4m)である。南北の間数は近世の溝SD8421で破壊されているため不明であるが、おそらく南北は2間で、東西棟の側柱建物になると考えられる。主軸はN1°Wである。柱掘形は一边約60cmの略方形で、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、Ⅱ-2期の遺物を含んでおり、それ以降の時期の建物と考えられる。

SB1848

SB1848は、調査区北部のT10区f・g22・23グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西3間(6.1m)・南北2間(3.8m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN2°Wである。柱掘形は一边約50～60cmの隅丸方形で、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量で、Ⅱ期の遺物を含んでいる。それ以上の特定はできない。

SB1853

SB1853は、調査区北部のT10区f・g24・25グリット付近で検出した遺構である。



真北 0° 21' 12"  
磁北 6° 20'



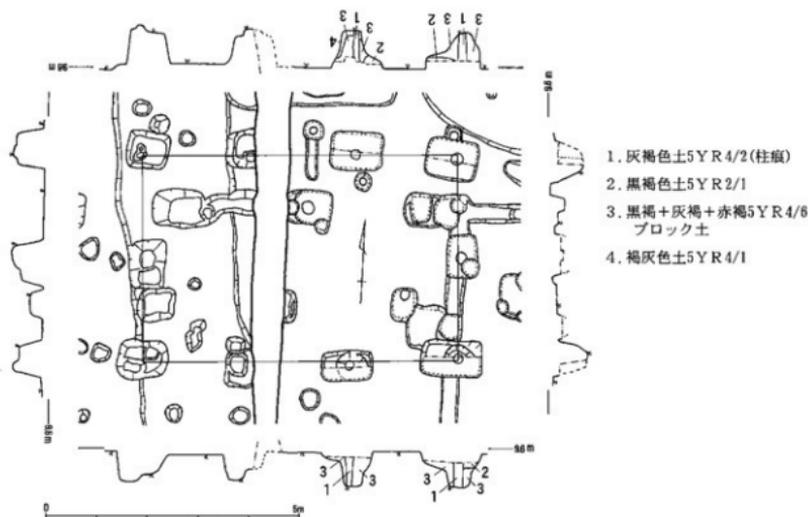
第34次調査区

第133次調査区

※座標は日本測地系（旧国土座標第Ⅵ系）による







第Ⅲ-5図 第133次調査 SB1854 平面・断面図 (1:100)

第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西5間(12.1m)・南北2間(4.8m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN3°Wである。柱掘形は長辺約40cmの略長方形ないしは楕円形である。掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、I-3・4期の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

**SB1854**

SB1854(第Ⅲ-5図)は、調査区北部のT10区f・g24・25グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西3間(6.3m)・南北2間(4.1m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN2°Wである。

柱掘形は、上部平面形は長辺約110cm・短辺約80cmの隅丸長方形である。2南北側柱の4基について柱掘形の断ち割り調査を行ったところ、掘形底には段差が形成されており、柱の据えられる部分が深く設定されていることが判明した。柱痕跡は直径20cm程度で、規模は小さい。

出土遺物は微量で、Ⅱ-2期の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

**SB1860**

SB1860は、調査区中央部のT10区f・g25グリットからT11区f・g2グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西5間(12.2m)・南北3間(7.4m)で、南部の1間は庇となる東西棟の建物である。主軸はN4°Wである。柱掘形は一辺約80cmの方形である。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅡ-1期に相当する時期の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

**SB1864**

SB1864は、調査区南部のT11区f・g4・5グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西3間(5.8m)・南北2間(3.8m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN2°Wである。柱掘形は長辺約80cm・短辺約

40cmの隅丸長方形である。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅡ-1期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

SB1870

SB1870は、調査区南部のT11区f~h5・6グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西5間(12.2m)・南北2間(4.9m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN3°Wである。柱掘形は一辺約60cmの隅丸方形である。掘形内では柱痕跡の確認のみを行っており、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅡ-1期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。柱掘形の重複関係から、SB8462よりは古いことがわかる。

SB1872

SB1872は、調査区南部のT11区f~h5・6グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きで、東半部を確認した。東西5間(8.3m)・南北2間(3.4m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN0°でほぼ真北を向く。柱掘形は直径約40~50cmの円形を呈するものが中心で、一部略正方形のものも見られる。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅡ-4期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

SB8451

SB8451は、調査区北部のT10区f22~h23グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区にも西側柱列が及んでいるが、今回の調査で掘立柱建物と確認できた遺構である。東西5間(8.3m)・南北2間(4.1m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN4°Eである。柱掘形は直径約30cm前後の略円形を呈するものが中心で、一部やや方形のものも見られる。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅢ-2期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

SB8452

SB8452は、調査区南部のT10区f23~i23グリット付近で検出した遺構である。東西5間(10.0m)・南北2間(4.2m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN4°Eである。柱掘形は直径約40cm前後の円形を呈する。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていないが、近世の攪乱遺構が及んでいる東側柱列付近の状況を見ると検出面からそれほど深いものではないことがわかる。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅢ-1期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

SB8453

SB8453は、調査区南部のT10区f22~h23グリット付近で検出した遺構である。東西5間(9.2m)・南北2間(3.9m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN1°Wである。柱掘形は一辺約50cm程度の略方形と、直径約40cmの円形のもの混在する。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、h23グリットpit3から残りの良い土師器台付小皿が出土しており、その遺物からⅢ-1期前後の建物と考えられる。

SB8454

SB8454は、調査区中央部のT11区f1~g2グリット付近で検出した遺構である。

第34次調査区に西側柱列、第47次調査区に南側柱列が及んでいるが、今回の調査で掘立柱建物と確認できた遺構である。東西2間(4.1m)・南北3間(6.7m)で、南北棟の側柱建物である。主軸はN0°でほぼ真北を向く。柱掘形は一边約40cm前後の略方形を呈する。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅡ-2期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。土坑SK8397との重複があるが、第47次調査区部分に相当するため、時間的な前後関係は不明である。SB1860とも重複関係があり、それよりも新しい建物である。

**SB8455**

SB8455は、調査区中央部のT11区f・g4グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区と第47次調査区にその大半が及んでいるが、今回の調査で掘立柱建物と確認できた遺構である。東西5間(9.4m)・南北2間(4.1m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN3°Wである。柱掘形は直径約30cm前後の略円形を呈するものが中心である。今回新たに調査した範囲においては、掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形および柱痕跡内にⅢ-2期頃の遺物を含んでおり、その前後の建物と考えられる。

**SB8456**

SB8456は、調査区中央部のT11区g・h4グリット付近で検出した遺構である。第47次調査区に北側柱列が及んでいるが、今回の調査で掘立柱建物と確認できた遺構である。東西2間(3.7m)・南北3間(5.4m)で、東西棟の側柱建物であるが、中央に棟持柱と考えられるピットが伴っている。主軸はN1°Wである。柱掘形は直径約40cm前後の略円形を呈するものが中心で、一部やや方形のものも見られる。今回新たに調査した範囲においては、掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅢ-1期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。

**SB8457**

SB8457は、調査区中央部のT11区f4~i5グリット付近で検出した遺構である。東西6間(11.8m)・南北3間(5.8m)の、東西棟側柱建物と見ることができ、後述のようにSB8458の底部分と見ることでもできる。主軸はN3°Eである。柱掘形は直径約30cm前後の略円形を呈する。掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていない。

なお、後述のSB8460はSB8457の南側柱列と完全に一致するため、これがSB8457の付属施設である可能性もあるが、ここではひとまず分離しておいた。

出土遺物は、柱痕跡内にⅢ-2期頃の良好な遺物を含んでいるものがあり、その頃には廃絶したものと考えられる。

**SB8458**

SB8458は、調査区中央部のT11区g4~h5グリット付近で検出した遺構である。東西4間(7.8m)以上・南北2間(4.1m)で、東西棟の側柱建物である。第34次調査区には南北の側柱列が及んでいないため、調査区境に残した未調査部分に1間分があり、東西は5間と考えられる。南北は2間としたが、東側柱列は後述のSB8459と共有することになってしまう。これらのことから、SB8458は単独の建物ではなく、方向と位置がほぼ揃っているSB8457の身舎部分(SB8457は底)と考えることもできる。主

軸はN3°Eである。柱掘形は直径約30cm前後の略円形を呈するものが中心である、ほとんどのピット掘形内では柱痕跡の確認のみを行い、掘形底までの掘削は行っていないが、一部掘り抜いてしまったものもある。

出土遺物は微量であるが、掘形にⅢ期頃の遺物を含んでおり、それ以降の建物と考えられる。柱穴の重複関係から、SB8461・8462よりも新しく、SB8459よりは古いことがわかる。

**SB8459**

SB8459は、調査区中央部のT11区g4～i5グリット付近で検出した遺構である。東西3間(6.3m)・南北2間(3.6m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN2°Wである。柱掘形は直径約30cm前後の略円形を呈するものである。掘形内に柱痕跡が明確でなかったため、大部分の柱穴を全て完掘している。

出土遺物は微細なため、Ⅲ期の範疇までしか分からない。柱穴の重複関係から、SB8458よりも新しい建物であることがわかる。

**SB8460**

SB8460は、調査区南部のT11区f6～h6グリット付近で検出した遺構である。東西5間(9.2m)・南北2間(4.0m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN3°Eである。前述のように、北側柱列がSB8457の南側柱列と一致してしまうため、SB8457の付属施設である可能性もある。柱掘形は直径約30cm前後の略円形を呈するものである。掘形内に柱痕跡が明確でないものもあったため、一部の柱穴については完掘している。

出土遺物は微量であるが、Ⅲ-2期頃のものを含んでおり、それ以降の建物と考えられる。柱穴の重複関係から、SB1870よりも新しい建物であることがわかる。

**SB8457・8458  
・8460の関係**

SB8457・8458・8460は、3棟分の掘立柱建物として記述したが、これらがまるとまって1棟の掘立柱建物と考えることもできる。

SB8457とSB8458はいずれも主軸方位がN3°Eで完全に一致し、南北両側柱の間の約0.91m(3尺)、東側柱の間の約1.81m(6尺)と、寸法的にもバランスがよい。したがって、SB8458を身舎、SB8457を庇と見ることが可能である。ただし、両建物の側柱間は南北とも性格には合致していないことが前代までの掘立柱建物と異なっており、両建物を完全に同一建物と見ることに躊躇を覚える点である。

SB8460の北側柱列はSB8457の南側柱列とほぼ完全に一致し、重複とするにはあまりにも合致しすぎている。ただし、SB8460北側柱列中央のピットのみ他ではまとめることのできないピットが重複している。これは、SB8457が本体としてまず先に存在し、その後にSB8460を附属させたため、何らかの要因でこのピットのみ再掘削されたのではないかと考えられる。SB8460の東妻柱は他のピットに比べて異様に大きく、ここが入り口などの施設となっていた可能性を示唆しているのではないだろう。ただしSB8460が、SB8457の廃絶後そのピットに完全に重なる形で築造された場合にはその重複が見られないことも考えられる。

以上のことから、この建物については一応3棟分として記述したが、それよりも、これ全てで1棟である可能性の方が高いと考えておく。

**SB8461**

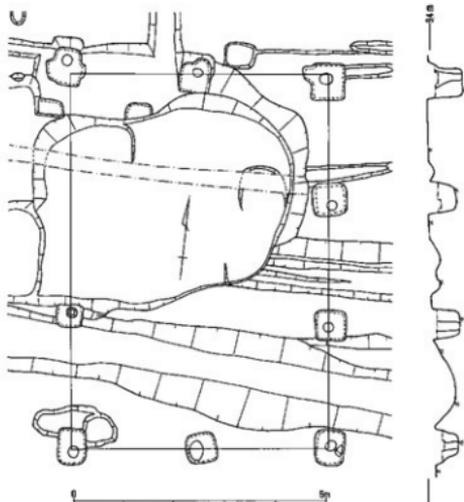
SB8461は、調査区南部のT11区h5～i6グリット付近で検出した遺構である。東西3間(5.2m)・南北2間(3.6m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN4°Wである。柱掘形は一辺約50cm前後の略方形を呈するものである。SB8462との重複関係

を見るために、一部の柱穴については断ち割りを行った。

出土遺物は微細であるが、掘形にⅡ-2期のものを含んでいることから、それ以降の建物と考えられる。柱穴の重複関係から、SB8462よりも新しい建物であることがわかる。

#### SB8462

SB8462は、調査区南部のT11区g6～i6グリット付近で検出した遺構である。東西3間(6.7m)・南北2間(4.6m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN5°Wである。柱掘形は一边約大きいものでは一边約90cm、小さいものでは一边約60cmと不揃いである。SB8461との重複関係を見るために、一部の柱穴については断ち割りを行った。



第三-6図 第133次調査 SB8463 平面・断面図 (1:100)

出土遺物は微細であるが、掘形にⅡ-1期のものを含んでいることから、それ以降の建物と考えられる。柱穴の重複関係から、SB1872・8461よりも古い建物であることがわかる。

#### SB8463

SB8463(第三-6図)は、調査区南部のT11区h7～j8グリット付近で検出した遺構である。東西2間(5.2m)・南北3間(7.6m)で、南北棟の側柱建物である。主軸はN6°Wである。柱掘形は一边約60cm前後の隅丸方形を呈する。東側柱列については、柱穴の深さと柱痕跡を確認するために断ち割りを行った。柱穴内の埋土が黒色土で柱痕跡はそれとほとんど同じであるため、あまり明瞭には確認できなかった。

出土遺物は微細であるが、掘形にⅠ-2期に相当すると考えられる土師器片を含むことから、それ以降の建物と考えられる。重複関係から、土坑SK8395よりも古い建物であることがわかる。

#### SB8464

SB8464は、調査区南部のT11区g7グリット付近で検出した遺構である。近世の溝で大部分の柱穴が削平されており、確認できたのは東側で1基、北側で1基の計2基のみである。したがって、建物規模や方位は不明である。柱掘形の方向を見ると、N0°のように考えられるが正確ではない。

出土遺物は微量で、斎宮Ⅱ期のものが含まれている。

#### SB8465

SB8465は、調査区北部のT10区h21～i22グリット付近で検出した遺構である。近世の攪乱遺構によりほとんど削平されているが、東西3間(5.6m)・南北2間(3.8m)以上である。この調査区で確認されている建物の特徴から推察すれば、南北2間の東

西棟の側柱建物になると考えられる。主軸はN4°Eである。柱掘形は直径30cm前後の円形を呈するものである。調査段階で掘立柱建物であると認識できなかったため、全ての柱穴を完掘している。

出土遺物は微細で、Ⅲ期のものが含まれていることが分かる程度である。

S B 8466

S B 8466は、調査区北部のT10区 f 21・22グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きであるが、今回の調査によって掘立柱建物と認識した遺構である。北側は近世の遺構によりほとんど削平されているが、東西3間(5.9m)・南北2間(3.9m)以上である。この調査区で確認されている建物の特徴から推察すれば、南北は2間で東西棟の側柱建物になると考えられる。主軸はN0°と考えられる。柱掘形は直径30cm前後の略円形を呈するものである。

出土遺物は微細で、Ⅲ期のものが含まれていることが分かる程度である。

S B 8467

S B 8467は、調査区北部のT10区 f・g 22・23グリット付近で検出した遺構である。第34次調査区からの続きであるが、今回の調査によって掘立柱建物と認識した遺構である。東西4間(7.9m)・南北2間(4.1m)で、東西棟の側柱建物である。主軸はN4°Eである。柱掘形は、直径20～30cm前後の略円形を呈するものである。

出土遺物は少なく、Ⅲ期のものが含まれていることが分かる程度である。S B 1848を構成する柱穴との重複関係から、S B 1848よりは新しいといえる。

#### b 区画溝

S D 2836

S D 2836(Ⅲ-8図)は、調査区の東壁寄りで確認した遺構である。幅約1.0m、検出面からの深さ約60cmの断面U字形で、N4°W方位の南北溝である。T11区 j 1グリット付近では土坑S K 8381・8385・8392が埋没後に重複する。未調査地を挟んでT10区側ではS K 8425が完全に重複しているが、西層部は遺存していると考えられる。埋土は、最下層が黄色小ブロックを含む層であることから、溝掘削土は溝層部分に土壘状に積まれており、それが崩落したものと考えられる。

遺構は、当初の想定では調査区東縁部を縦断するものと想定されたが、南部はT11区 j 5グリットで、北部はT10区 j 24グリットでそれぞれ終息することが判明した。この間約24.0mである。なお、調査区北端部の延長上にあたるT10区 j 21グリットで検出したS Z 8420はS D 2836の延長線上にあたるため、区画溝としてはここまで延長していた可能性もある。この場合、区画溝の深さを一定に保たない何らかの意味があると考えられる。

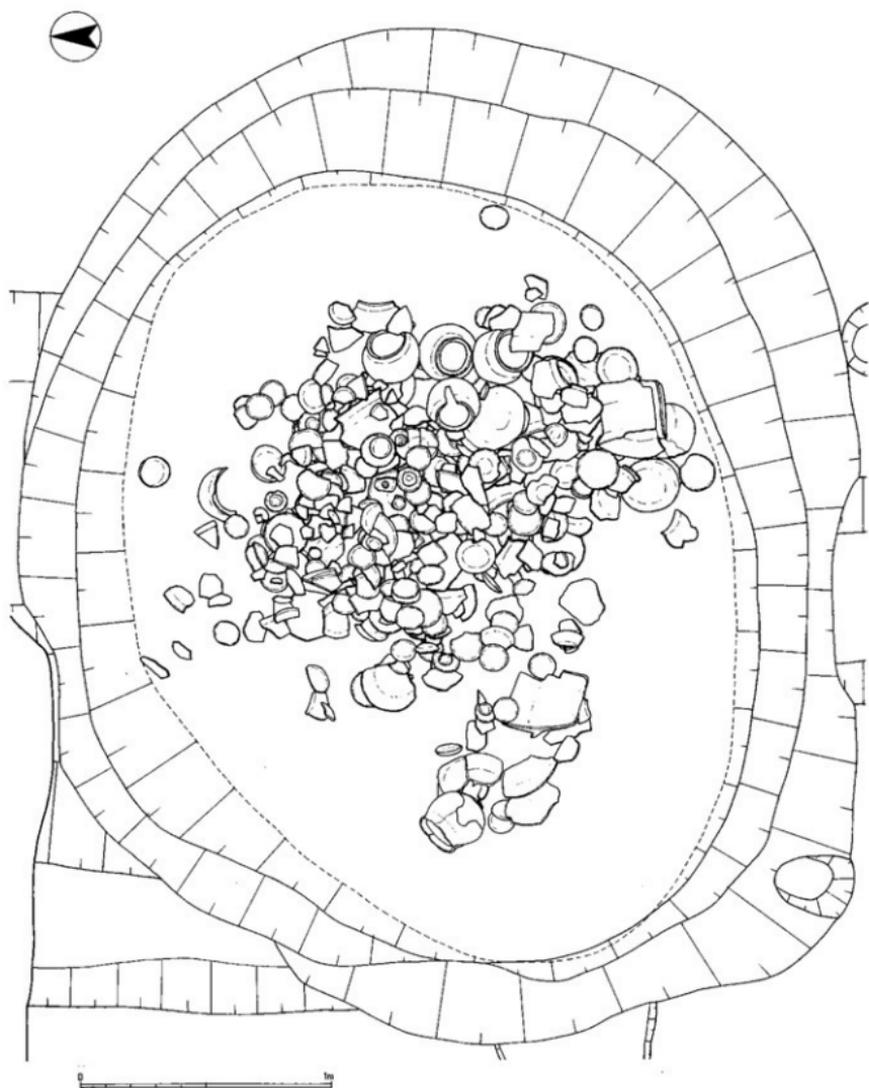
S Z 8420

埋土から出土した土器は少ないが、T11区 j 2グリット付近に見られる遺構の重複関係(Ⅲ-8図)から見ると、S D 2836より後出の土坑S K 8392がI-4期に相当すると考えられることから、斎宮I-4期には既に埋没しはじめていると考えられる。

S D 1857

8409

S D 1857・8409は、区画溝S D 2836に西から直交する東西方向の溝である。S D 1857は第47次調査で完掘されており、今回は再度検出したにとどまる。S D 8409はS D 1857の北側に並行して走る溝で、第34次調査区の溝S D 1856と一連の遺構と考えられる。S D 1857とS D 8409とは、芯々間の距離で約3.3mである。ただし、S D 1857が深さ約0.5mのしっかりしたものであるのに対し、S D 8409は深さ約0.1～0.2mと浅く、S D 8409が従属的なものであることを示している。また、S D 8409はS D 2836に接続せず、手前約3.0mで途切れている。



第Ⅲ-7図 第133次調査 井戸SE8391 遺物出土状況図 (1:20)

出土遺物は少量で明確な時期は示し得ないが、概ねⅠ期後半からⅡ期初頭頃のものと考えられる。

### c 井戸

SE8391

SE8391(第三-7図)は、調査区中央部のT11区h・i1グリッドで検出した。検出時の直径は約3.6~4.1mで、検出面から約60cm下までの間はややすぼまり、そこから土器群の存在する位置までの間はやや膨らむため、断面形は袋状を呈している。

検出面(標高約9.5m)から約1.5mの深さで、多量の土器群を検出した。土器群は厚さ約60cmの間にぎっしりと詰まっている。完形に近いものが多く、とくに土師器甕類が目立つが、量的には土師器小皿類が圧倒的に多い。土器群はⅢ-2期のもので、出土状況から見て廃棄に伴う一括性は確実であり、当該時期の良好な資料といえる。

土器群以下の掘削については、今回は行わなかった。土器群は井戸廃棄段階のものであるから、井戸そのものの機能時期はⅡ-4~Ⅲ-1期の範疇で考えるべきであろう。

なお遺構の北側には、断面箱塚状の溝が取り付けられている。未掘部分の下にあたるため、正確な形状や規模は分からないが、幅1.5m程度の未掘部分を挟んで北側にこの溝の延長が見られないことから、遺構に取り付けるために作成したスロープではないかと思われる。この溝埋土内からは土器群と同じ時期の土師器皿が含まれていることから、土器類を廃棄するにあたって作成された遺構である可能性もある。

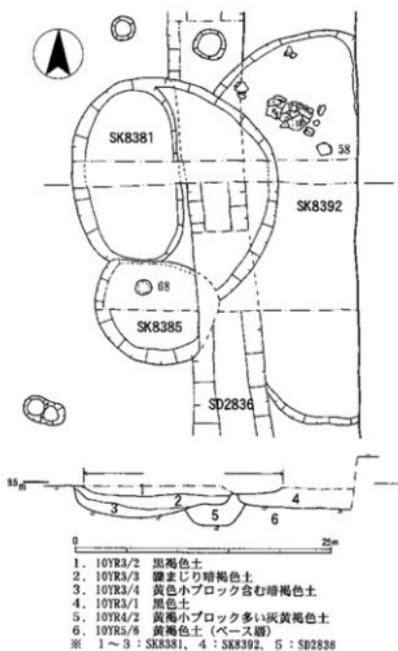
### d 土坑

SK8381

SK8381・8385・8392(第三-8図)は、調査区中央部のT11区j1グリッドで検出した遺構である。いずれも区画溝SD2836の埋没後に掘削された土坑で、重複関係からSK8392-SK8381-SK8385の順に掘削されたことがわかる。埋土内出土土器は、SK8392がⅠ-4期、SK8381・8385がⅡ-3期である。

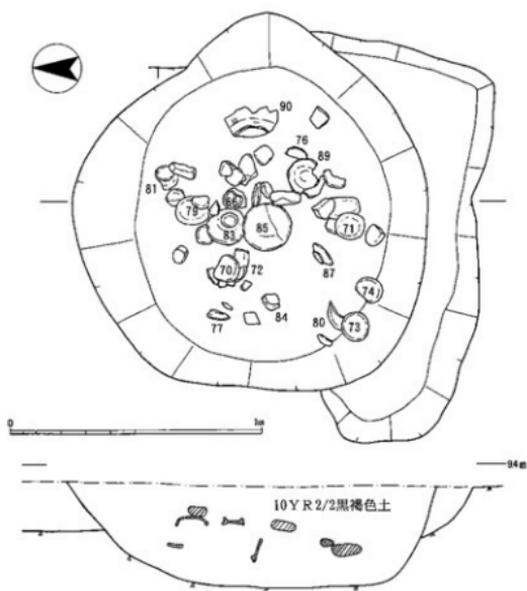
SK2823

SK2823・8397・8405・8406は、調査区中央部のT11区f・g2・3グリッドで検出した遺構である。SK2823は第47次調査区で既に確認されている遺構で、今回はその西端一部を確認したのみである。複数基の土坑が重複しているもので、平面的に何とか確認できたのは上記4遺構であるが、SK8405は最終的に



第三-8図 第133次調査 SD2836・SK8392付近・平面、土層図(1:50)

2箇所の窪みを持つために2基以上の重複と考えられ、本来は5基以上が重複した遺構と考えられる。しかし、土層観察用ベルトでも、これらの前後関係は明確にできなかった。出土遺物はそれほど多くないが、Ⅱ-4期からⅢ-2期にかけてのものがあつた、この間継続的に掘削されたものと考えられる。Ⅲ-2期相当の土器類は上層部で出土していることから、最終的には落ち込み状窪みとなって、漸次埋没していったと考えられる。なお、SK8397の埋土最下層には焼土を多く含んでいる。



第Ⅲ-9図 第133次調査 SK8407 平面・土層断面図(1:20)

SK8407

SK8407(第Ⅲ-9図)は、調査区中央部のT11区i・j 4グリッドで検出した。直径約1.4mの円形を呈し、深さは約40cmである。埋土内からはⅢ-2期に比定できる土師器・黒色土器・緑釉陶器などの供膳具を中心とした土器類がまとめて出土しており、前述のSE8391とともにこの時期の良好な資料である。

SK8395

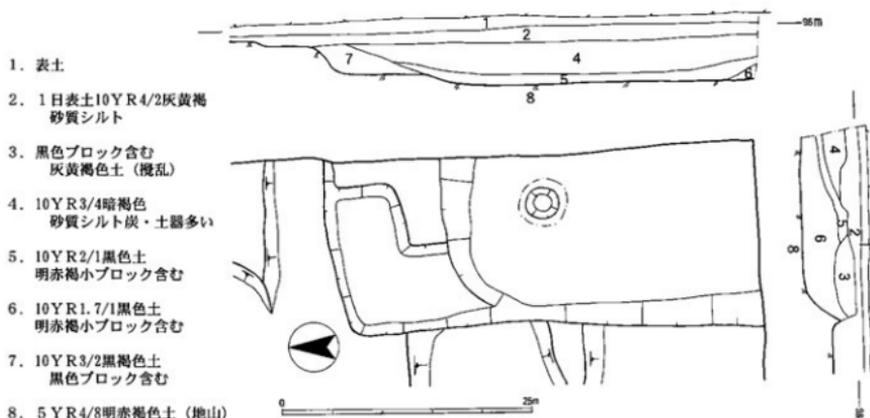
SK8395は、調査区南部のT11区h・i 7グリッドで検出した遺構である。掘立柱建物SB8463を破壊している。掘り上がりの状態では、東西約6.8m、南北約4.0mの不整形円形を呈する。

平面形では2基以上の土坑が重なった状態であるが、土層を観察する限り、横方向



※ 1~3: SK8395下層、6~10: SK8416、11~14: 遺構基盤層

第Ⅲ-10図 第133次調査 SK8395・8416 土層断面図(1:50)



第三-11図 133次調査 SK8425 平面・土層断面図 (1:50)

の重複は見られない。ただし、掘削当初には埋土内に東西に長い長方形のラインを確認しており、上下方向での重なりは存在しているものと考えられる。この長方形のラインが見えた範囲について調査段階では土坑19としており、今回はSK8395上層とした。土層図(第三-10図)では、概ね第1～3層が上層、第4・5層が下層にあたる。

出土遺物としては下層がⅡ-2期、上層がⅡ-2期を含むⅡ-3期に相当する。出土遺物量は多いが、あまりまとまてはいない。

SK8390

SK8425

SK8390・8425(第三-11図)は、調査区北東部のT10区j24からT11区j1グリットにかけて検出した遺構である。途中に未掘部分を挟むため、北部をSK8425、南部をSK8390としたが、両者は一連の遺構である可能性が高い。区画溝SD2836の西側法面に沿って東部を方形に掘削した遺構と考えられる。SK8425の埋土中には焼土・炭を多く含んでいる。出土遺物にはⅠ-4期頃のものを含むが、区画溝SD2836段階の遺物が混入している可能性も高い。

#### e 小規模溝群

調査区全域に、東西・南北方向の小溝が確認されている。傾向としては、調査区東寄りの区画溝SD1857に近い場所では東西方向、その他では南北方向となっている。溝は幅約20～30cm、検出面からの深さ約10cmで、なかには曲線状となるものもある。遺構埋土は黒色土である。埋土内からの出土土器は少量であるが、概ねⅡ-1～2期に集中する。

#### (2) 近世以降の遺構

近世の遺構に、溝SD1447・1842・2826・8382～8384・8421・8423がある。周辺に建物・井戸などが見られないことから、いずれも耕作に伴う導排水路と考えられる。SD1447からは、18世紀頃と考えられる南伊勢系の土師器小皿が出土している。

また、調査区北東部にあたるT10区東半部分は、近代以降と考えられる長方形の土取り坑が整然と並んでいる。掘削深度は遺構検出面からの深さで30cm程度であるが、小規模なピットはこの土取り坑によって削平されていると考えられる。先述の掘立柱建物SB8645もこの影響を受けている。

### 3 出土遺物

第133次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約145箱である。内訳は大部分が土器類で、少量の金属製品がある。

ここでは主立った遺物について記述する。分類については、斎宮分類<sup>(1)</sup>および平城・長岡・平安京における編年(以下、「都城編年」と呼称)<sup>(2)</sup>を参照し、部分的に今回観察した所見を交えて追加・変更している。

**土坑SK8395出土土器(1~53)** 土師器・須恵器がある。前章で見たように、上層と下層では時期的な違いが存在すると考えられる。しかし、遺構掘削時には明確に分層を行えなかった。調査段階で区分していた遺構上部埋土と下部埋土、およびいずれとも言えないもの、の3つに区分して記述する。

1~23は下部埋土で出土した土器類。1~2は椀A。椀Aには内面に放射状暗文の後に見込みに螺旋状暗文を施すもの(1)と、無文のもの(2)とがある。口縁部径にも差があり、調整方法としては、1は口縁部外面を多段で広くヨコナデしており、2は口縁上部のみを1段でヨコナデしている。この手法の違いが内面暗文の有無と対応する可能性もある。

3~12は杯Aで、ここではとくに「杯A1」とする。杯A1は比較的平坦な底部から2単位ほどのヨコナデによって外反して開く口縁部となる。口縁端部は面をなし内傾するものが多い。5の口縁部には油煙痕が見られる。11の底部外面には焼成後に「キ」字形の記号?が施されている。12は底部片で、外面に「月」の墨書が見られる。破片が小さく、単字かどうかは不明。13~16は椀Aに分類されることがあるが、底部が平坦であること、口縁部の立ち上がりが直線的であることから、形態上は杯に含め得るものであり、ここでは「杯A2」とする。杯A2は外反せずに直線的に開く口縁部でそのまま丸く収める口縁端部に至るものが多い。ただし、16のように外面にわずかながらでも屈曲があると、杯A1との区別が難しくなる。

17は土師器皿Aで、外反する口縁部にヨコナデによって内傾する口縁端部となるものであり、これをとくに「皿A1」とする。皿A1は杯A1との類似が強い。18は土師器高杯で、脚部は柱状に長いものである。脚部外面はヘラケズリにより13面の面取り状となっている。19は土師器台付鉢で、外面は口縁部付近にまでヘラケズリが施されている。

20は須恵器杯B。21は須恵器高杯の脚部。内外面に螺旋状のシボリ目が見える。22・23は須恵器甕の体部片で、同一個体と考えられる。いずれも内面の同心円当てで具痕の中央には「十」字形の装飾?が見える。

24~33は下部・上部埋土の区分ができなかったもの。24・25は椀Aに含められようが、24は口縁端部外面に面を持っており、やや様相が異なる。26は杯A1。27は皿A1。28は皿Aであるが、皿A1のように口縁部が外反せず、口縁端部は上方に面をなしているため、「皿A2」とする。

29は土師器壺E。外面は面取り風に上からケズリを行っている。30は獣足状に調整の見られる土師器。何かの脚部であろうか。外面には高杯の脚部に見られるような縦方向の切り込みが前後面に1ヶ所ずつ見られる。上端には剝離の痕跡が見られ、土馬であるとしても各部位が分割成形されたものと考えられる。

#### 「キ」字形の 記号 墨書「月」

#### 十字形装飾付 当具痕



第三-12図 墨書土器「文」と出土地点の関係

31は須恵器杯B、32は須恵器甕、33は灰陶器の段皿である。

34~40は上部埋土出土土器。34は土師器碗A、35は土師器杯A 1、36は土師器杯A 2である。37・38はいずれも土師器皿A 1。39は土師器皿Bで、外面をハケメで調整する。40は内面のみを黒化するいわゆる黒色土器A類の碗。高台外面に墨書があるが、右側を欠損している。この墨書土器は、第133次調査区の東約50mにあたる第58-1次調査区から出土した「文」字墨書土器<sup>(3)</sup>と、筆跡も、用いられた土器も同じである(第三-12図)。同一人物によって複数の土器に同じ文字が記載された事例として、西加座地区近隣の土地利用状況を見る上で興味深い事例といえる。

#### 墨書「文」と分布

41~53は土師器甕・鍋類。41・43・46は上部埋土で、他は下部埋土からの出土。いずれも体部上半に縦ないしは斜め縦方向のハケメを施し、体部下半にはヘラケズリを施すものである。体部内面のヘラケズリは51・52のように上へ掻き上げる方法であり、帯状の横方向ケズリはまだこの段階では出現していない。体部内面上半は、横方向の粗いハケメを施すものが多い。41は鉢に区分できるものか。42~46は甕Aで、口縁部径が20cm弱の小形のものである。43~46は口縁部が外反し、口縁端部へヨコナデ施すことにより内傾させているもので、手法的には杯A 1や皿A 1と共通する。47~51は長胴甕と考えられるもので、口縁部の特徴は概ね甕Aに共通するが、47・52は口縁端部が内傾しないものである。51は口縁端部外面に素地粘土を付加することによって横方向に口縁部を拡張している。53は把手付鍋で、把手の部分は欠損している。

これらの土器は、下部埋土では甕類がⅡ-1の時期に相当し、杯類はⅡ-1~2にあたる。上部埋土はⅡ-2~3期頃に相当するものである。

**SD2836出土土器**(54) 須恵器杯Aである。底部を回転ヘラケズリする。Ⅰ-3ないしはⅠ-4に相当する時期か。

**包含層出土土器**(55) 土師器杯Aである。外面のヘラミガキはループ状に連続する。内面は、斜放射状暗文の後に、見込み部分に螺旋状暗文を施す。口縁端部は上方に面をなすものである。底部外面には焼成前かとおもわれる「井」字形の記号<sup>(4)</sup>がある。全体形と口縁端部の特徴は斎宮に見られる形態とは異っており、雲出島貫遺跡出土土器<sup>(4)</sup>の形態と類似していることから、一志郡ないしは安濃郡辺りからの搬入品である可能性が高い。時期的には奈良時代後半期であろう。

#### 「井」字形の記号

一志・安濃郡からの搬入品？

**SK8428出土土器**(56・57) いずれも土師器。56は皿Bの蓋であろうか。宝珠形の摘みが付く。57は杯Gに相当する。56は斎宮であまり例が無いので都城編年に対比させると、平城Ⅳ併行期と見るのが妥当であり、斎宮ではⅠ-3ないしはⅠ-4に相当すると考えられる。

**SK8392出土土器**(58・59) 58は須恵器杯蓋。扁平な形態である。59は土師器杯B。内外面の調整は器表面が剥離しているため明瞭ではないが、部分的に残っているところを見ると、かなり精緻にヘラミガキが施されているようである。これらは、定期的にはⅠ-4並行期に相当するものであろう。

**SK8425出土土器**(60~64) 60~63は須恵器、64は土師器である。60は杯蓋、61は杯Aである。62は皿D、63は大形の杯Bである。64は頸部に焼成前穿孔した甕で、あまり類例が無い。須恵器の形態からは都城編年では平城Ⅲ併行期と考えられ、斎宮Ⅰ-3に相当する。

**SD8408出土土器**(65) 土師器碗Aである。内面には斜放射状暗文の後に螺旋状暗文を施す。体部外面は口縁部付近にまでヘラケズリが及んでいる。長岡京期の特徴であり、斎宮Ⅱ-1に相当する。

**SK8413出土土器**(66) 土師器杯Aである。口縁部は内面にやや肥厚する。底部外面には粗雑なヘラミガキが見られる。Ⅰ-4ないしはⅡ-1期の特徴である。

**SK8381・8385出土土器**(67・68) いずれも土師器杯Aである。外反する口縁部で、口縁端部が内傾する。底部には丸みがあり、68の方がより強い。いずれもⅡ-3期に相当するが、形態的に見ても68の方がやや後出する感があり、遺構の重複関係とも合致する。

**包含層出土土器**(69) 白磁の碗である。外面には輪花が表現されている。太宰府分類<sup>(5)</sup>のⅦ類に相当すると考えられ、おおよそ11世紀後半頃のものであろう。

**SK8407出土土器**(70~90) SK8407は小規模土坑で、ここからまとまって出土した土器類であるため、廃棄の同時性は確かな資料である。70~75は土師器小皿。口縁部外面がヨコナデによる面をなし、口縁端部も内側に面をなすものである。個体によって深さはまちまちであるが、基本的には同一系統のものと考えてよい。口縁部径は10~11cmである。76~79は土師器皿。前代までの杯Aの系統上にあると考えられる。口縁部に1単位のヨコナデを施すのが基本で、口縁端部は面をなすことなくそのまま収めている。口縁部径は13~14cmを基本としているようである。80・81は土師器台付碗。深い碗部に高台を貼付している。全体の調整手法は皿・小皿と共通する。

82~86は、回転成形によって製作されている碗。三重県では慣習的に「ロクロ土師器」と呼ばれているものであるが、その帰属を土師器にのみ求めることはできないので、ここでは「土師質土器」と呼称する<sup>(6)</sup>。このうち、82~84は黒化処理の見られるもので、その状態からはいわゆる「黒色土器」に含めることも可能である。83・84の底部外面には糸切り痕が見られる。83のみ外面の黒化部分が見られないが、いずれも内面と外面口縁部付近のみを黒化するA類<sup>(7)</sup>碗であろう。82は回転成形の後外面に手持ちのヘラケズリを施す。83のヘラケズリは底部のみで、これは回転ケズリである。84にはヘラケズリが見られない。ヘラミガキは、82は内面のみ、83・84は内外面ともに施されている。85・86は同様の回転成形をする土師質土器であるが、これらには黒化処理やへ

## 頸部焼成前穿孔甕

## ロクロ土師器と土師質土器

ラミガキなどの調整が見られない。

87は陶器小皿で、灰砂陶器の類に含めてよいであろう。百代寺窯式併行期<sup>(8)</sup>と考えられる。88は緑釉陶器の小皿で、東濃産と考えられる。硬質に焼かれており、施釉は全面に見られる。

89・90は土師器で、脚台部の付く鉢である。89の脚裾端部は内側に肥厚の見られるもので、同じ時期の土師器壺口縁部と類似する形態をなしている。

これらの土器群は、既存の編年案ではⅢ-1期に相当すると考えられる。後述のSE8391の資料群よりもやや古い様相と考えられるが、両者はかなり接近した時期と考えられる。

**SE8391出土土器(91~162)** 井戸廃絶後に廃棄場として用いられたと考えられる層中から、膨大な土器が出土している。出土土器の組成については、口縁部計測法に応用を加え<sup>(9)</sup>、その内訳を第Ⅲ-1表に示した。単純に計算しても、約450個体ある。完形品を中心に折り重なるようにして出土しており、その間に間層を含まないため、廃棄の同時性は全く問題ないと考えられる資料群である。

一括廃棄資料

土師器皿類

91~138は土師器の系統下にある土器。91~102は小皿で、口縁部径は10cm内外である。口縁部外面がヨコナデによる面をなし、口縁端部も上方に面をなすもの(小皿a、91~100)と、口縁部が外側に大きく開くもの(小皿b、101・102)の2形態に区分できる。103・104も小皿とするが、口縁部径が12cmほどあり、やや大きくて深いものである(小皿c)。小皿cは小皿aと手法的に共通している。

105~121は皿。口径が14cm内外で全体に浅く、口縁部は外反気味のもの(皿a、105~113)、口径が15cm内外で深く、口縁部は外反せず直立気味のもの(皿b、114~120)、口径20cmほどで全体に浅く、体部からそのまま開口縁部に至るもの(皿c、121)がある。皿aは小皿aと手法的に共通する。皿aと皿bとも関連しあっており、120はそれ中間的な形態といえる。皿cはこれ1個体のみが確認できたに過ぎない。いずれも口縁部外面のヨコナデは、屈曲点を持つものの概ね1単位である。

122・123は台付小椀。椀部の形態は皿bと概ね共通する。内面には123のように布目圧痕が残るもの

用途	種別	器形	計測部位	計測数値	採用数値
供 具	土 師 器	小皿	口縁	1477	1477
			口縁	407	538
		台付小皿	高台	538	
		台付小椀	口縁	56	56
			高台	26	
		皿	口縁	549	649
			口縁	75	220
		台付皿	高台	220	
			口縁	34	157
		台付椀	口縁	157	
			高台	157	
		土 師 質 土 器 (口 ケ ロ 土 師 器 )	小皿	口縁	142
	高台			342	
	口縁			238	510
	柱状高台小皿		高台	510	
			口縁	39	159
	台付小皿		高台	159	
			口縁	15	15
	台付小椀		高台	12	
			口縁	6	67
	皿		底	67	67
			口縁	20	41
	柱状高台皿		高台	159	
			口縁	41	41
	台付皿		口縁	4	113
			底	113	
	椀(組製)		口縁	36	52
			底	52	
	椀(組製)		口縁	0	36
		底	36	36	
黒色土器	(土師器)	口縁	33	88	
		底	68		
陶器	(土師質)	口縁	2	4	
		底	4	4	
炊 事 具	土 師 器	小皿	口縁	15	26
			底	26	26
		小椀	口縁	14	23
			底	23	23
		壺	口縁	161	294
			底	294	294
そ 貯 の 他 蔵	陶 器	口縁	373	373	
		口縁	18	48	
		底	36	48	
		把手	48	48	
大鉢	口縁	15	15		
	筒形	12	12		
	壺類ほか	7	7		
陶器	壺類ほか	口縁	7	7	
		底	6	6	

第Ⅲ-1表 井戸SE8391出土土器組成

があり、この器形が型作りである可能性を示唆している。

#### 脚台付「て」の 字状口縁小皿

124~131は台付小皿。124は京都方面で出土の多い「ての字口縁小皿」に脚台部が取り付けられたものである(台付小皿c)。京都方面では脚台の付くものは無いが、この個体のみ他の器種とは異なる素地粘土であり、斎宮で生産されたものとは考えにくい。近隣では伊賀地域にこの形態が見られ<sup>(10)</sup>、伊賀からの搬入品と推測する。

#### 伊賀からの搬 入?

125~130は、口縁部形態がそれぞれ少しづつ異なるものの、概ね同じ系統下のものと見てよからう。125~129は口径10~11cm内外、130・131は口径12cm弱で脚台部が大きいので、この2者で台付小皿をa・bに区分する。130・131の内面には布目圧痕が見られる。

132~134は台付皿。口径は15cm内外である。皿部が浅いもの(132)と深いもの(133・134)があり、志向が異なると考えられるが、出土例が少ないために今回はあえて区分しない。

135~138は台付椀。手法的には皿aと類似している。137は、外面にハケメによる調整が見られる。

#### 土師質土器類

139~162は、回転成形による土師質土器。外面底部には糸切り痕が見られる。素地粘土と成形の状況からは、混和物の多い粗い素地で粗い成形のもの(139~154・156~159)と、素地粘土が緊密・精緻で丁寧に仕上げるもの(155・160~162)とに分けられる。前者は土師器に使用する素地とほとんど変わらない。

139~144は小皿。口径は10cm内外である。口縁部形態では、直線的に開くもの(小皿a、139・140)と、内弯気味となるもの(小皿b、141~144)がある。145・146も小皿の一種で、やや深めのものである(小皿c)。

147~156は脚台の付く小皿類。147~153は脚台と皿部を一連で成形するもので、「柱状高台」と呼ばれているもの。147は小椀形をなす。148~152は浅く扁平な皿部に柱状の高台が付くもの(台付小皿a)。土師質土器類のなかで、最も多いのがこの器形である。台部の高さは152がやや高いが、この個体のようなものは数少なく、149~151の形態のものが大半を占めている。153は深めのもので、小皿cとの器形的特長が似る(台付小皿b)。154~156は糸切りの後に底部に輪高台を取り付けるもの(台付小皿c)。皿部は台付小皿aと類似した浅いものである。

157・158は脚台の付く皿類。柱状の高台となるもの(台付皿a、157)と、輪高台のもの(台付皿b、158)がある。いずれも直線的に大きく開く口縁部である。159は皿。玉縁状の口縁部を持つ。なお、土師質土器の皿類は出土数がかなり少ない。

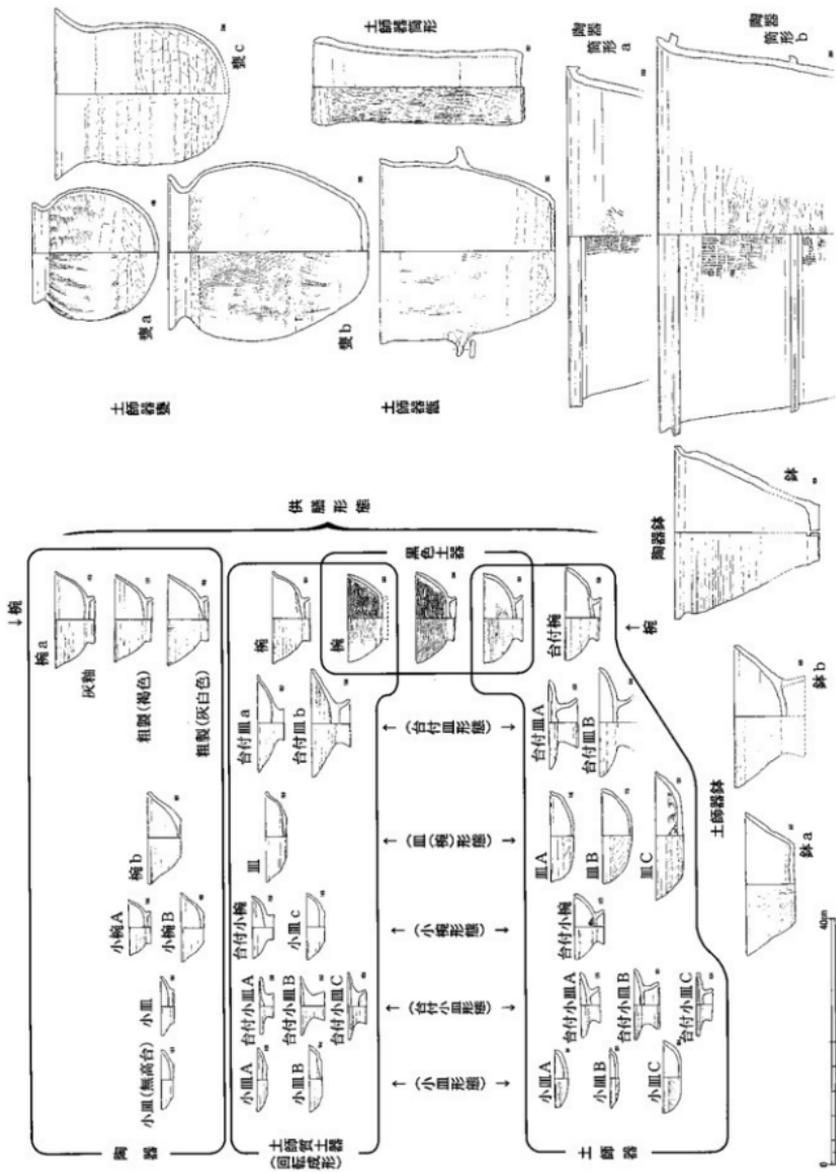
160~162は椀。大きさは15cm前後のもの(160・161)と19cm近くになるもの(162)があるが、前者のものが多い。いずれも極めて丁寧な作りのものである。口縁部や高台の形態から、灰釉陶器の影響を強く受けた一群と考えられる。

#### 灰釉陶器影響 の椀 陶器類

163~179は陶器椀皿類。163は小皿で、この時期の土器としては珍しく無高台のもの。164は高台の付く小皿で、灰釉陶器と考えられる。165は小椀で、これも無高台の珍しいもの(小椀b)。166は高台の付く小椀(小椀a)で、灰釉陶器の類である。

167は椀で、直線的に開く口縁部・直立する口縁端部・高台の付かない底部、という、この時期としては極めて珍しい器形をしている。168~179は高台の付く椀。168は4ヶ所に輪花、172~174には漬け掛けの灰釉が見られ、灰釉陶器の影響下にあると考

- 粗製の陶器碗** えられる。175～179は、陶器であるが、焼成不良で褐～黄褐色系の色調を呈し、一見土師質土器である。これら陶器碗の状況は、いずれも焼成こそ陶器とするものべきものであるが、成形・調整は極めて雑なものである。形態的には先述の土師質土器碗の方がよほど丁寧で、灰胎陶器の影響を考えやすい。
- 多様な黒色土器** 180～186は器表面に黒化処理を行うもので、いわゆる黒色土器である。いずれも内外面にヘラミガキを施している。先述の黒化処理状況による分類では、180～182はA類、183～186はB類に相当するが、製作の方法は複数存在している。180は回転成形によるもので、その手法から言えば土師質土器の一群に含めるべきものである。181は先述の土師器皿bと類似するもので、黒化処理とヘラミガキが無ければ土師器皿bや土師器台付碗との区別は難しい。182も同じく土師器系の形態である。内面にはループの大きな螺旋形でヘラミガキが施されている。183～186は、横ヘラミガキ・見込みに連続するミガキ、直線的に開く口縁部とそれぞれ類似した成形・調整を行っている。
- 土師器鉢** 187～189は土師器鉢。187・188は無高台(鉢a)、189は高台の付くもの(鉢b)である。187の口縁部形態は、後述の甕類と共通する。
- 陶器鉢** 190は陶器の鉢。底部は焼成前に穿孔されている。輪積み成形の後に回転台整形されている。体部外面には整形時の回転ナデによる凹凸が横方向に深く刻まれている。
- 筒形の土師器** 191は土師器で、筒状の形態をなす。底部は素地粘土を螺旋形に巡らせて整えた後、体部を輪積みで成形している。
- 平瓦** 192は平瓦。凹面に布目、凸面に縄タタキメを施すと考えられるが、小片のため屈曲が明確でなく、凹凸面の認識は逆転するかも知れない。須恵質の非常に硬質な焼成で、知多半島産のように見える。
- 土師器甕** 193～200は土師器甕。口径16cm前後、器高20cm前後で、体部が丸い形態のもの(甕a、193～197)、口径25cm前後、器高30cm以上で、長胴のもの(甕b、198・199)大きく開く口縁部で、長胴のもの(甕c、200)がある。量的には甕aが中心で、甕cはこの1個体があるに過ぎない。甕a・bでは、口縁部は短く外反し、内側に折り返して肥厚させるものであるが、その状況は個体差が認められ、193のようにほとんど肥厚の見られないものもある。口縁部形態として量的に多いのは195・196のような形態のものである。体部外面は、縦方向を基調とした粗いハケメを施した後、下半に横方向の帯状ヘラケズリを施しているものが多い。193のような、ハケメの代わりにオサエ・ナデのみで処理するものも数例見られる。体部内面は横方向のハケメないし板ナデの後、下半に帯状ヘラケズリないしは掻き上げヘラケズリを施している。
- 土師器甕** 201・202は土師器甕。いずれも底部は完全に削り落としており、前代までのものに見られるような一文字状の削り残しは見られない。体部を輪積みで成形し、ハケメなどの調整を行った後に把手を挿入している。把手はいずれも2方向にあり、切り込みを入れた後に内側から挿入しているようである。把手は小さく平坦で、もはや痕跡器官と評価すべきものである。口縁部形態は、先述の土師器甕と共通する。
- 大形の筒状陶器** 203・204は須恵器系の陶器で、いずれも大形の筒状をなすものと考えられる。外面は平行タタキメ、内面には同心円当てで具痕が観察できる。204は口縁部と体部に突帯を巡らせており、一見埴輪を連想させるものである。いくつかの破片があり、もう一段下にも突帯が巡るものと考えられる。井筒の可能性も考えられる。



第三-13圖 S E8391出土土器分類模式圖 (1:8)

以上の土器類は、陶器類が灰土陶器の百代寺並行期、「て」の字状口縁を呈する土師器台付小皿の形態が都城編年の平安Ⅳ期(中)に並行すると考えられる。斎宮ではⅢ-2期、11世紀中葉頃の土器群と考えられよう。

#### 土器の分類

S E 8391出土土器の分類案を、第Ⅲ-13図に示した。この図では、土師器・土師質土器・陶器・黒色土器という、製作手法や焼成上の違いを越えて見られる供膳形態全体としての対応関係を示すことを主眼とした。共通項で括ることのできる形態を、「小皿」・「台付小皿」・「小椀」・「皿」・「台付皿」・「椀」とした。

このように見ると、土師器・土師質土器は器形が揃っており、陶器は台付皿が欠如するものの、概ね揃えている。それに対し、黒色土器は椀のみである。黒色土器には、先述のように見方を変えれば土師器・土師質土器に含め得るものもあることなどから、極めて異質な一群であることが改めて指摘できよう。

#### 丸柄

石・鉄製品、その他(205~218) 205は石製帯飾具で、丸柄。幅3.2cm、高さ2.9

#### 銅線の遺存

cm、厚さ0.6cmである。蛇紋岩製で深緑色を呈する。裏面には留具装着のための穴が3ヶ所あり、そのうちの2ヶ所には留紐である銅線が残存している。

#### 金銅製ボタン

206は銅地に金箔ないしは金メッキを施した金銅製の鈕。正方形気味の菱形に整形し、中心から4辺の中央に向かって溝状に下げて装飾効果を出している。

#### 鎌

207は鎌。木柄に挟み込んで装着するもので、装着部分には木製の楔が遺存している。装着部分の端部は折り曲げられていると考えられるが、錆のために明確には確認できない。208・209は刀子。いずれもよく使い込まれている。2点ともS E 8391から出土した。210は先端を丸く加工したもので、何かの接続用部品であろう。211~213は鉄釘。いずれも断面方形である。211はS K 8422から出土した。214は棒状の鉄製品。芯部は丸い断面で、端部の一方は尖らせており、もう一方は断面方形に整形して屈曲している。断面方形の側は破損しているので、全体形は分からないが、箸のような使い方をするものの一部であろうか。

#### 鞆の羽口

215は土製品で、鞆羽口。やや小形でラッパ状に開いている。

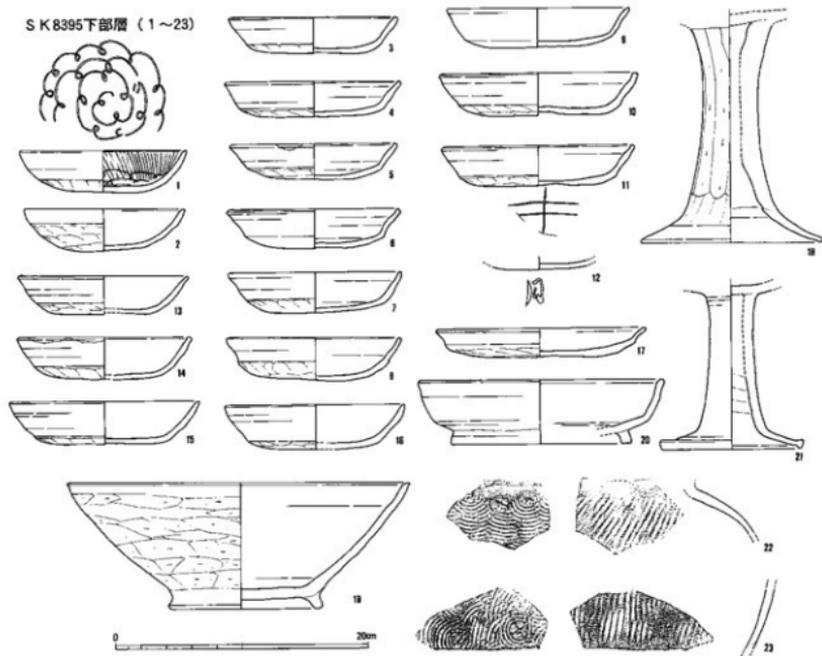
#### 砥石

216~218は砥石。216は泥岩製の仕上げ砥と考えられるもので、極めて小さいがよく使い込まれている。217は中砥と考えられ、砂岩製である。218は荒砥ないしは中砥と考えられ、砂岩製である。217はS K 8395、216・218はS E 8391から出土した。

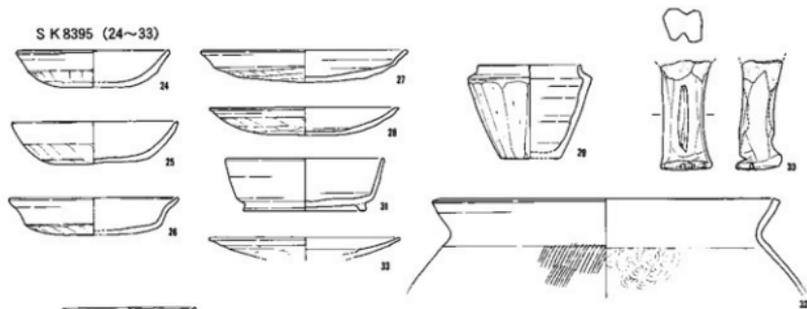
#### 緑釉陶器

緑釉陶器の出土状況 今回の調査区内における緑釉陶器の出土状況を、破片数として第Ⅲ-2表に掲載する。133次調査区における出土総破片数は49点である。破片であるために中には同一個体も含んでいるが、いずれにしてもそれほど多くはない。また、陰刻花文を施すものも存在するが稀である。器形としては、椀皿類以外は確認できなかった。S E 8391からの出土が群を抜いているが、これは混入した遺構以前の遺物が大半である。

S K 8395下部層 (1~23)



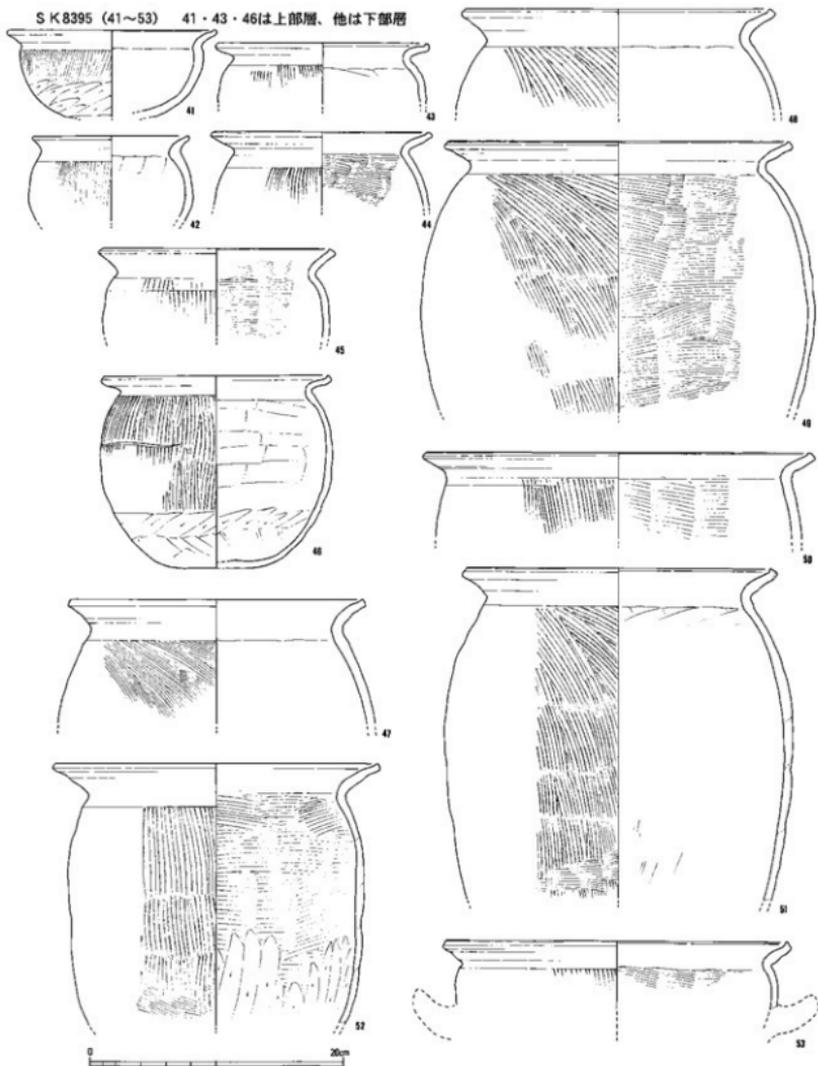
S K 8395 (24~33)



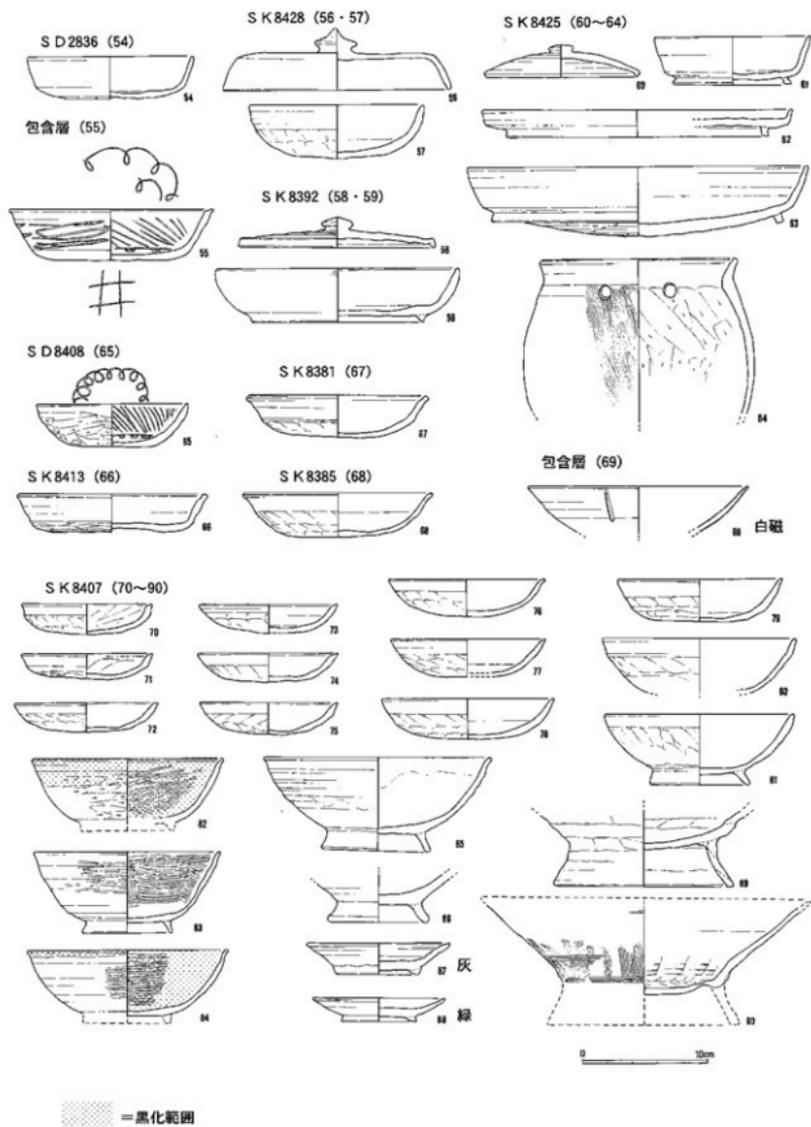
S K 8395上部層 (34~40)



第Ⅲ-14図 第133次調査区出土遺物実測図(1) (1:4)

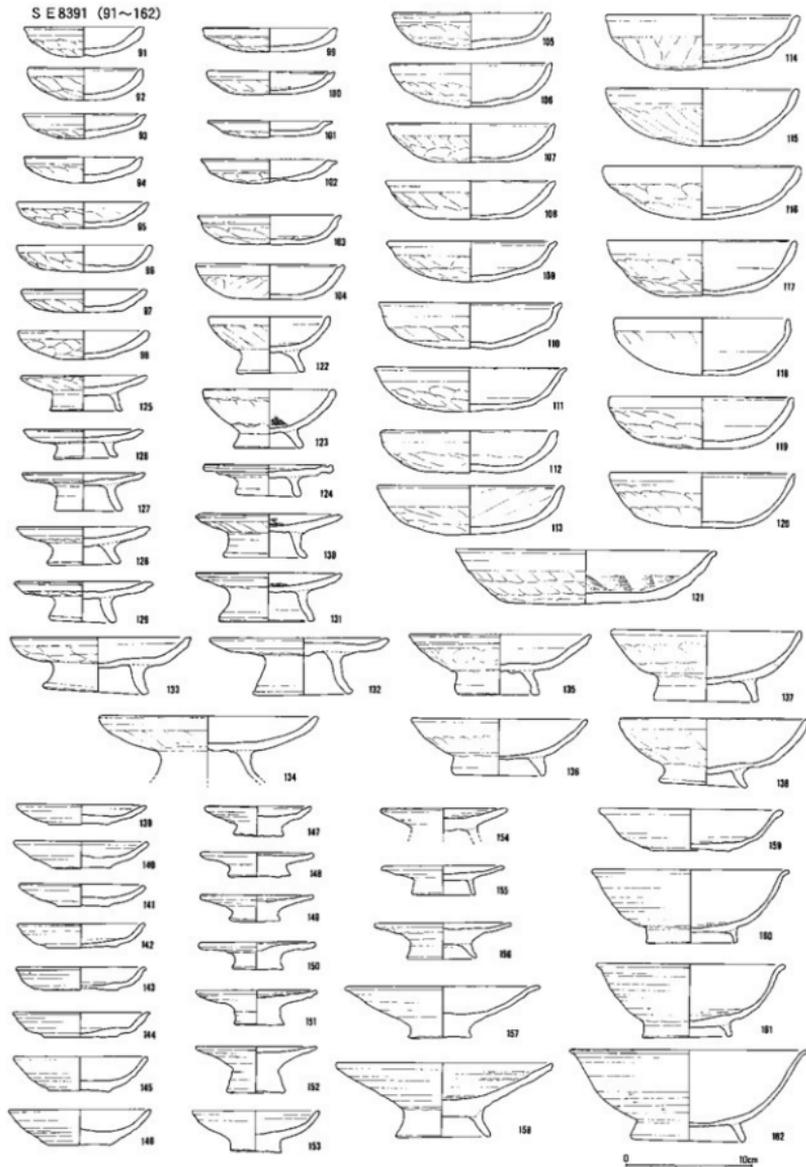


第Ⅲ-15図 第133次調査区出土遺物実測図(2) (1:4)



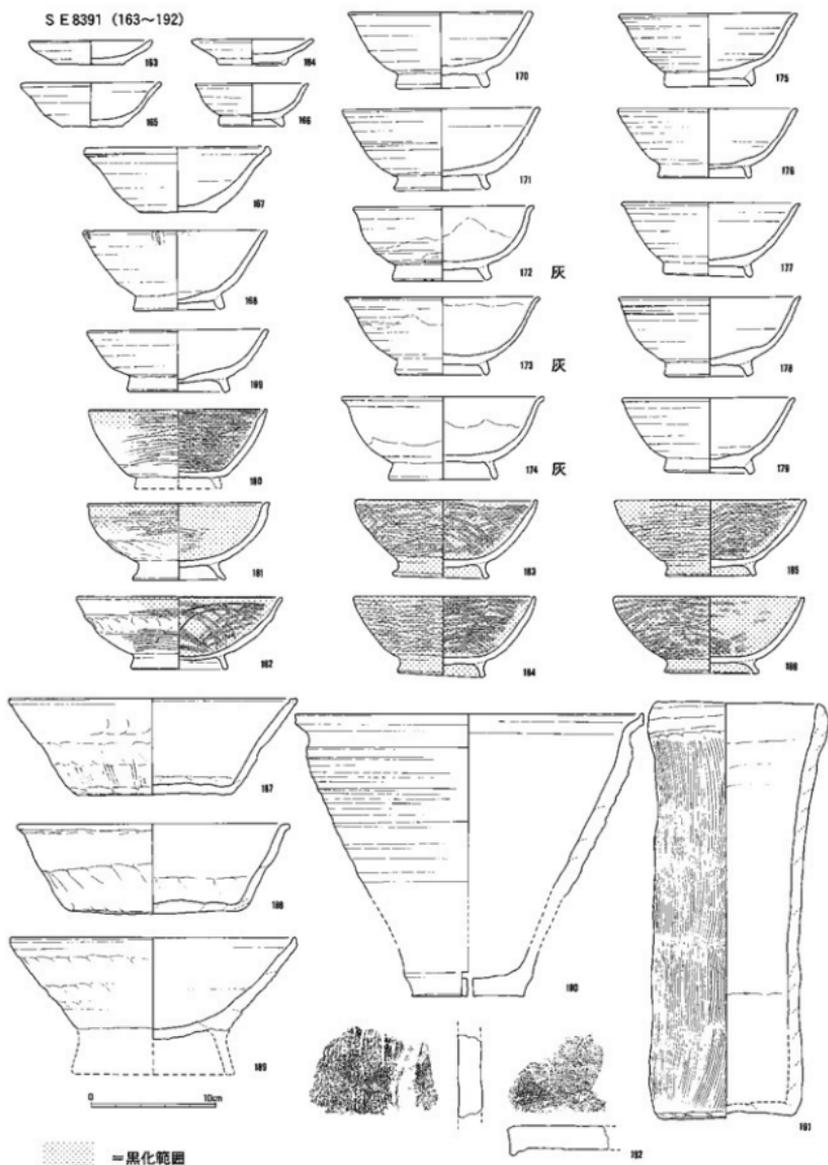
第三-16图 第133次調査区出土遺物実測图(3) (1:4)

S E 8391 (91~162)



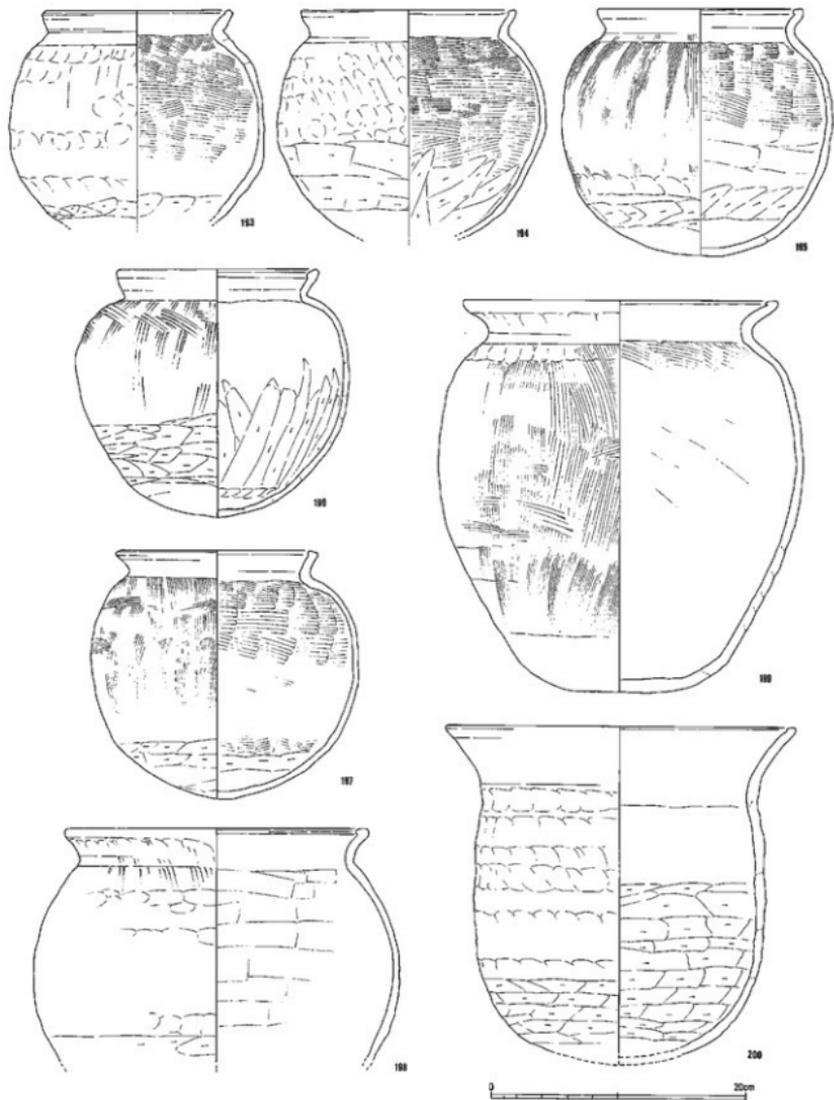
第三-17图 第133次調査区出土遺物実測図(4) (1:4)

S E 8391 (163~192)



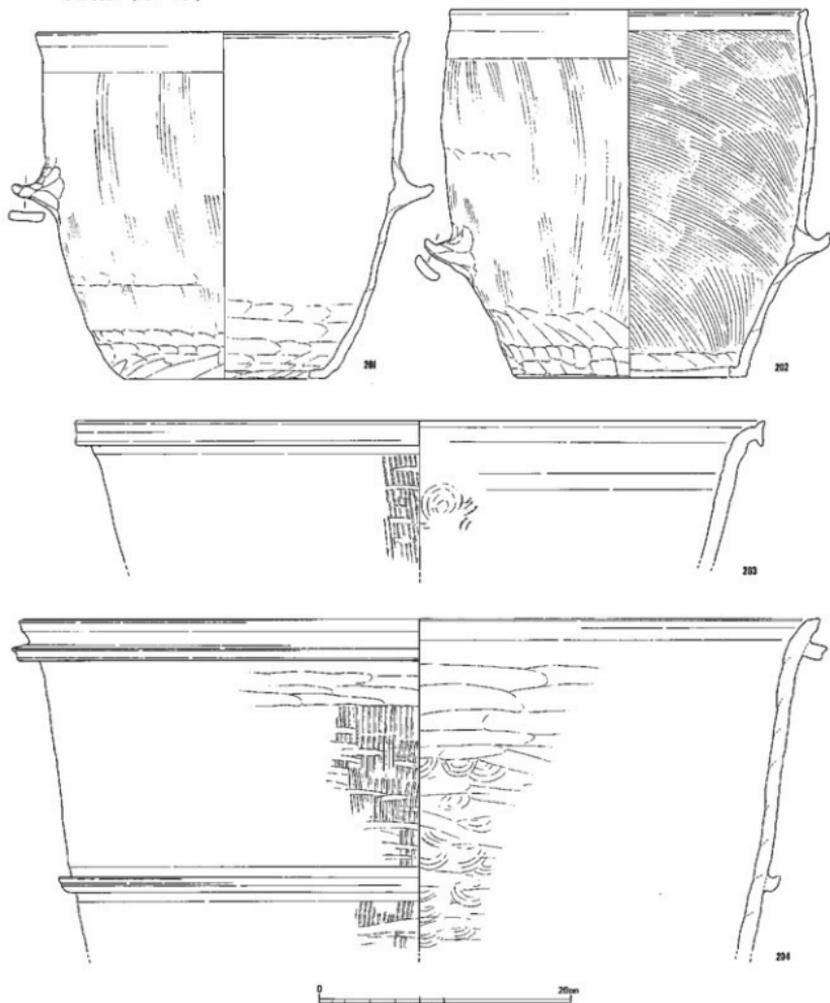
第三-18图 第133次調査区出土物実測图(5) (1:4)

S E 8391 (193~200)

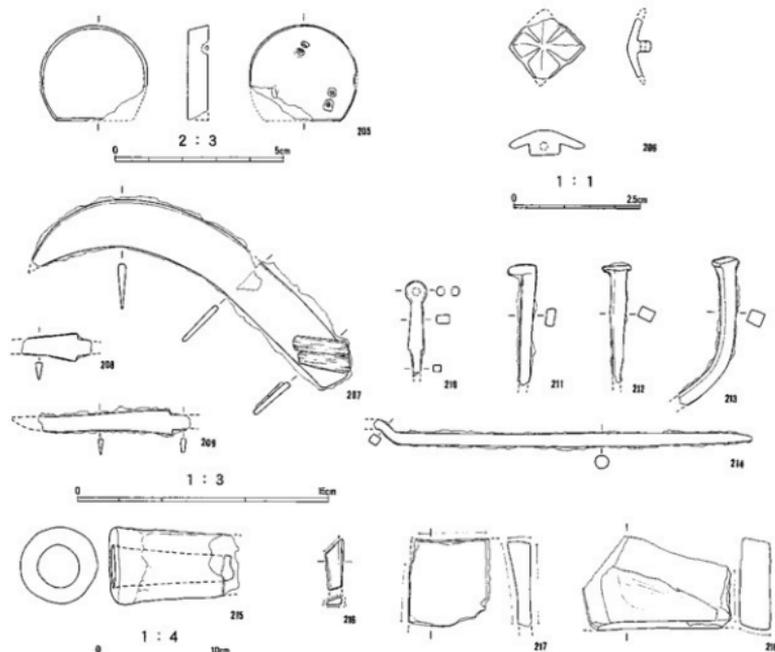


第Ⅲ-19图 第133次调查区出土文物实测图(6) (1:4)

S E 8391 (201~204)



第Ⅲ-20图 第133次調査区 出土遺物実測図(7) (1:4)



第三-21図 第133次調査区出土遺物実測図(8) 205は2:3、206は1:1、  
207~214は1:3、215~218は1:4

次数	地区	グリット	遺構・層名	緑釉破片数	備考
133	T10	f21	SD1842	2	
133	T10	f22	pit7	1	
133	T10	f22	pit8	1	
133	T10	f23	pit7	1	
133	T10	f25	包含層	1	
133	T10	g21	pit5	1	
133	T10	g21	SD1842	2	陰刻文(良好) 1
133	T10	g24	SK8422	2	
133	T10	g24	包含層	1	
133	T10	h21	SD8423	1	
133	T10	h23	pit7	1	
133	T10	h24	包含層	1	
133	T10	h25	包含層	1	
133	T10	i20	表土	1	
133	T11	f5	包含層	1	
133	T11	g1	包含層	1	
133	T11	g2	SK8397	1	
133	T11	h1	SE8391	11	陰刻文1 3片は東濠か?
133	T11	h2	包含層	1	
133	T11	h4	pit3	1	
133	T11	h4	包含層	1	
133	T11	h7	SK8395上層	1	
133	T11	h7	包含層	1	
47	T11	i3	SK2830	1	壊投?
133	T11	i4	包含層	3	良好な底面片1
133	T11	i7	SK8395上層東	3	
133	T11	i7	包含層	1	
133	T11	i4	SK8407	1	第三-16図88に実測器掲載
133	T11	i5	包含層	1	
133	T11	i6	包含層	2	
133	不明	不明		1	
合 計				49	

第三-2表 第133次調査区緑釉陶器出土地点・破片数一覧

#### 4 まとめと検討

##### a 掘立柱建物群について

##### 時期別変遷

今回の調査区からは、既調査区との重複分も含めて25棟の掘立柱建物が確認された。建物の変遷は概ね次のようになると考えられる(第Ⅲ-22図)。なお、建物の時期比定は、柱穴から出土した土器を一定の根拠とするが、それは総じて微細で明瞭なものが少ない。そのため、柱穴出土遺物は大枠での時期を示すものとしてのみ扱い、柱筋や規格性の方を重視する。掘立柱建物の柱掘形などから出土した土器類から推測される時期については、第Ⅲ-6・7表を参照されたい。

**I-4期以前** S B 8463が該当し、西に隣接するS B 8464も一応ここに含めておく。建物の主軸は西に6度傾いており、その後の地割・柱筋方向とは大きく異なっている。また、S B 8463の北部には楕円形の土坑(S K 8413・8428)があり、いずれもN 33° Eの軸方向であるため、何らかの関係があるものと推察される。

**I-4～Ⅱ-1期** S B 1853・1870が該当する。区画溝を中心に、その東西に東西棟の掘立柱建物が規則的に配置される。区画溝を挟んで南北に並ぶ掘立柱建物S B 1853とS B 1870は、両者の柱掘形規模に差があるために一見無関係のように見えるが、東西の梁間柱筋が概ね一致していること、2棟のほぼ中央に区画溝S D 1856・1857の中心が相当することから、2棟は同時期の建設と考えられる。最も明確に区割りが行われた時期と考えられる。建物方位は北から西に3～4度傾く。

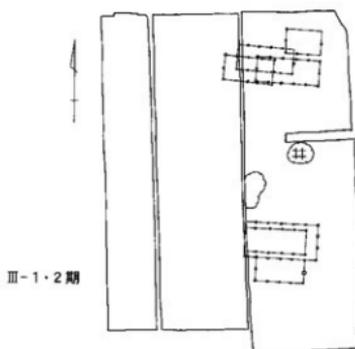
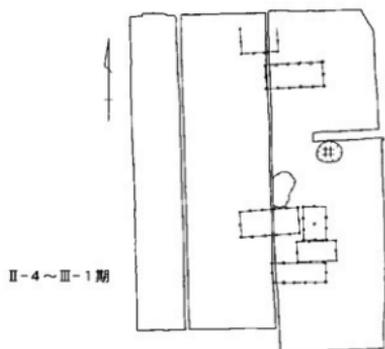
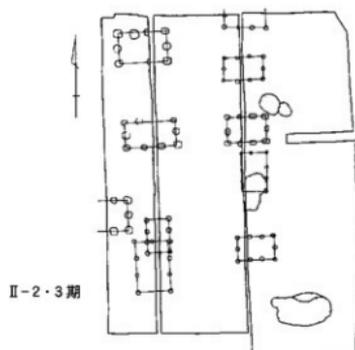
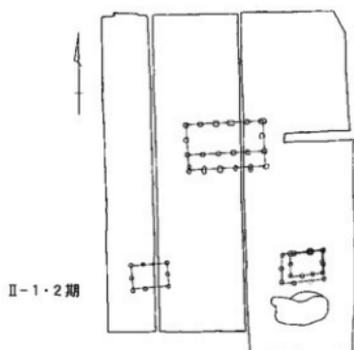
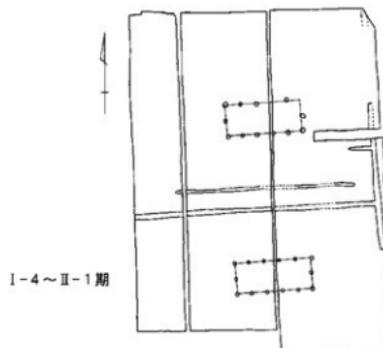
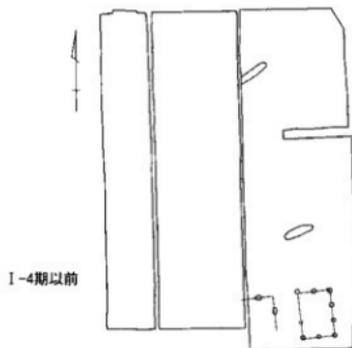
なお、この時期の問題については、後で改めて触れる。

**Ⅱ-1・2期** 前段階の区画溝はほぼ埋没し、その機能は停止しているが、方向的にはそれに沿った建物が建てられ続けている。当調査区では、S B 1860およびS B 8462が該当すると考えられる。またS B 8462と柱筋が符合するS B 1866(34次)もこの時期に相当すると考えられる。一応この3棟で「品」字形を呈しており、それなりの規則的配置が見られる。なお、S B 8461はやや新しいが、S B 8462の建て替えと考えられるためにここに含めた。

**Ⅱ-2～3期** 重複する掘立柱建物が多く、明確に区分できない時期である。この時期も、区画溝S D 1856・1857によって形成された土地区画の方向性は遺存すると思われる。S B 1843・1848・1854の3棟はややズレがあるものの南北方向に連なっている。S B 1854と柱筋を揃えるS B 1438(34次)と、S B 1438と西梁間が揃うS B 1840もこの時期のものとして見ておく。区画の南側にあるS B 1864もこの時期のものと考えられる。これらの建物方位は前段階と同じくほぼ真北方向である。この段階のいずれかの時期に、区画溝上に掘立柱建物が建てられたり、大形の廃棄土坑が開削されるようになったと考えられる。

**Ⅱ-4～Ⅲ-1期** 井戸8391が開削される時期と考えられる。この井戸を中心に、南北2ヶ所に建物群が見られる。北群には2棟、南群には4棟あるが、南群の4棟は重複しているため、大きくは2棟づつで区分できるものと考えられる。建物の柱掘形は円形を基本とするようになり、前代と比べて大きさも全体的に小型化する。建物方位は、前代と同じく真北ないしはやや西に傾くものである。

**Ⅲ-1・2期** 前代と同様、建物は南北2ヶ所にまとまっているが、最大の特徴



0 400

第Ⅲ-22図 第133次調査区遺構変遷図(第34次調査区も含む) (1:800)

は、建物方位が東に3～4度と大きく振れていることである。2群のちょうど中央に位置する井戸S E8391はこの時期に廃絶し、土器群が投棄されている。北群に4棟、南群はS B8457・8458・8460を一連の建物と見れば1棟ある。南北両群間に見られるこの重複度合いの違いは前段階とは対照的であり、北群の方がいち早く建物主軸東偏を実施しているとも見られる。

方格地割の方位が西偏約4度であることを想起すれば、真北ないしは東偏4度の建物群の見られる時期は、方格地割とは別の方位志向で建物群が建てられたことを意味しており、今後検討すべき重要な課題といえる。平安後期に相当するこの時期は、王朝国家期末期から院政期に相当する時期であり、齋宮制度そのものが新たな展開を迎える時期として評価されている<sup>(1)</sup>。その意味でも、齋宮Ⅲ期に相当する時期の精査が、今後の急務であるといえよう。

## b 8世紀末頃における区画と建物群

前項でⅠ-4～Ⅱ-1期とした遺構は、S D2836・S K8392・S K8425の重複関係から還元したもので、区画溝S D2836の時期と認識したものである。区画溝の存在するこの段階は、第133次調査区近隣で最も整った区割りの見られる時期である。区画溝S D2836は、溝が貫通せずに南北端ともに調査区内で一度収束することが判明した。また、遺構の重複関係から見ても、当該遺構はⅠ-4期には完全に機能を停止しており、存続期間はかなり短い。S D2836はこれまで方格地割西加座地区東側を画する区画溝で、道路側溝にあたると考えられてきた。区画溝であることは確かであろうが、途中で収束する道路側溝というのは通常ではあり得ず、他の機能を想定することも必要である。この点について、周辺遺構の関係から見てみよう。

今回の調査区内では、S D2836にほぼ直交する東西溝S D1857は、第47次の調査において既に完掘されている。したがって、今回の調査から両者の先後関係を言うことはできない。ただし、溝の接続状況を見る限りほぼ同時に開削されたものと考えてよさそうである。東西溝S D1857については、その北側約3.5mに並行して走るS D1856とも関係が推測される。S D1857・2836が深さ約60cm・幅約80cmの類似した遺構であるのに対し、S D1856は幅こそ類似するものの、今回の調査区内では深さ約15cmと浅い。そして、その東端部は南北溝S D2836に接続することなく収束する。このことは、S D1857・2836に付随して設置されたのがS D1856であることを示している。

つぎに、これら区画溝の方位とそれに伴う掘立柱建物について見よう。比較を容易にするためにそれぞれを北軸基準で表現すると、S D2836がN4°Wであるのに対し、S D1856・1857がN3°Wである。両者はほぼ直交関係にあるとはいえず、厳密に言えばやや角度を異にしているともいえる。そして、調査の状況から得られた所属時期は、Ⅰ-4期以前である。所属時期の点からいえば、この区画溝に合致する掘立柱建物はS B1853・1870・8463の3棟しかない。このうち、S B8463はN6°Wと大きく軸を違える建物であるから、一致するのはS B1853・1870の2棟のみといえる。

S D1856・1857はS B1853・S B1870間のほぼ中央に位置する。S D2836も含めたこの3条の区画溝とこの2棟の建物とは有機的に関連しているように見てよい。

この状況に合致する遺構を今回の調査区周辺部で見えてみる。第53-15次調査区のS B

3874は、掘立柱建物のラインを若干修正すればS B1870のちょうど西にあたる位置となる。建物規模も同じと見てよい。つぎに、掘立柱建物としてまとめられていないが、第17-3次調査区にもこれら3棟の掘立柱建物と柱間規模が合うピットが存在する。さらに、S B1853・1870の北延長上には第120次調査区があり、ここにも建物としてまとめられていないピットから、同方位・同規模の掘立柱建物が検出できる。これらと一連の建物と考えられるものが、平成14年度に調査した第136次調査区からも見られる。

#### 「寮庫」区画との類似

これらの位置関係を示したのが、第三-23図である。つまり、区画溝S D1856・1857を境に、南北に4棟が整然と配置され、それはさらに北側の第120次調査区にまで及んでいる状況が復元できる。この情景は、当調査区の北側ブロックに相当する「寮庫」とされる区画と極めて類似するものといえよう。

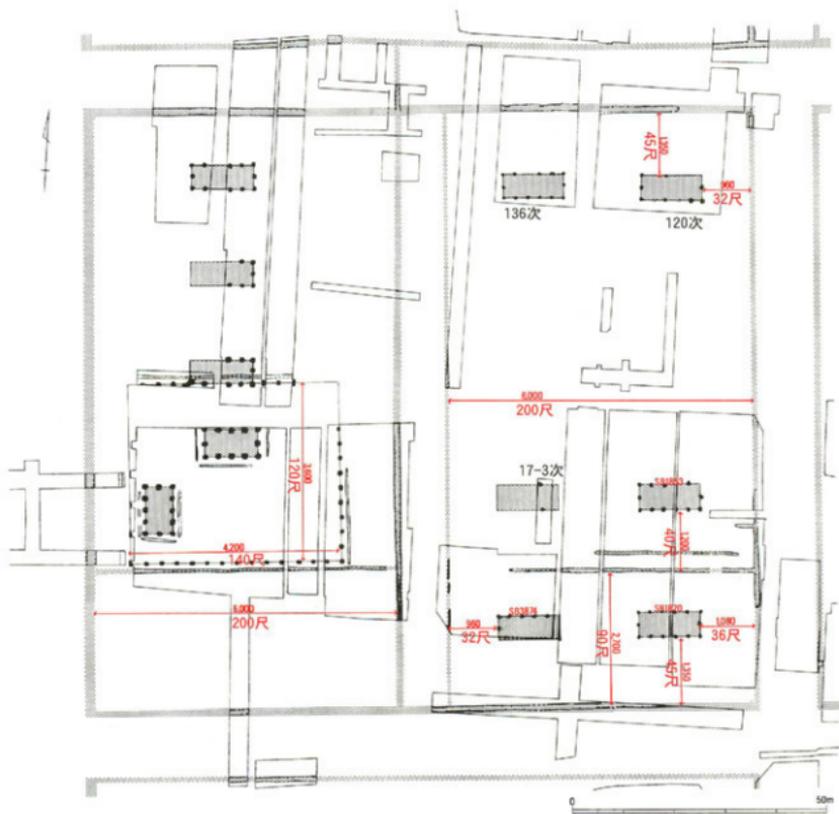
#### 建物規格

なお、第三-23図では1尺 $\approx$ 30cm前後として<sup>(12)</sup>、おおよその数値も入れた。規格は、当初認識されたものと現実の遺構とは対応しないことが考えられるので、「遺構芯々間」といった厳密性をあえて求めず、異なる遺構間の計測数値に最も相応しいと考えられる切りの良い値を求めた。建物は、東西40尺(約1200cm)南北16尺(約480cm)で、ここで触れている掘立柱建物はいずれもこの規格と考えられる。土地に目を向けると、方格地割西加座南ブロック南端の区画溝S D1455からS D1857間が90尺(約2700cm)、S D1455とS B1870南柱列間が45尺(約1350cm)で、区画溝間のちょうど中央に南側柱列間が設置されたと考えられる。45尺という数値は、西加座南ブロック北端の区画溝S D6050と第120次調査区にある掘立柱建物の北側柱列間にも見られ、同じ発想の下で実施されたことを裏付けている。東西に並ぶS B1870とS B1853それぞれの区画溝側柱列と区画溝間は同じではないが、位置的にS B3874の対角線上にあたる第120次調査区の掘立柱建物とは同じ32尺(約960cm)である。このように、これらの遺構群は一定の規格性を志向しているとはいえ、全体として統一されたものではなく、近在の区画溝を用いて合わせるという極めて場当たり的な状況であったものと推察される。

さて、S D1857の西延長線上には、内院北方に設置された「神殿」<sup>(13)</sup>の南区画溝S D5896があたる。S D1857とS D5896間には道路が想定されているが、第133次調査区で検出された遺構については、設計上「神殿」東部に設定された外郭にあたると思われる。「神殿」の外郭に設置された溝は、方格地割内部に設定された方形区画と考えられている。したがって、南北溝S D2836についても、方格地割「西加座南」東部を画する道路側溝としての機能以上に、「神殿」区画との関係で見るとべきであろう。S D2836が、道路側溝としながらも途切れる、あるいは掘削深度に変化を持つ形態をなすことは、やはり無視できない要素である。

ただし、「神殿」北部には、今回確認した5間 $\times$ 2間の建物群と同規模の建物が3棟方向を揃えて建てられている(第三-23図)。この建物群は、重複関係から「神殿」よりも後出すると考えられているが、建物規模や方向性からは、今回西加座南ブロック東部に想定した建物群との関係が深いと考えられる。「神殿」がやや先行する施設で、その区画方位に沿って西加座南ブロック中央通路や方格地割が形成され、「神殿」廃絶に伴ってブロック東部・西部建物群が形成された、という可能性が高いが、今後の発掘調査で遺構の重複関係などからより厳密に検証する必要がある課題である。

今回の調査では、方格地割(道路側溝)機能時期における「神殿」東部区画の利用状況



第Ⅲ-23図 方格地割西加座南ブロック内建物配置と区画溝の関係（1：1,000）数値はcm

がある程度判明した。だが、道路側溝とされる南北溝 S D 2836 の調査成果は、斎宮における方格地割の存在そのものを改めて考え直す必要を示唆している。この方格地割は、当然のことながら平安京・長岡京などにおける条坊制と同一視はできない。しかし、斎宮寮が官衙であることを想起すれば、その内部が道路で分断されていること自体不自然とも言える。予察の域を出ないが、斎宮寮における道路を画一的に見るのではなく、それぞれに相対的な差を見出し、まさに公用道路といえるものと敷地内通路と見るべきものなどに区分していく必要がある。

## 道路と通路？

斎宮跡における方格地割は、現況の地割にもかなり反映されていることから見てもその存在は明白である。しかし、その一方で「道路側溝」とされている遺構の機能時期が全体的に短すぎることは、やはり認識すべきである。道路内側に設置された区画溝の可能性を含め、再度検証すべき課題であろう。

### c 斎宮Ⅲ期の遺物

今回の調査では、井戸 S E 8391 を中心に、斎宮Ⅲ期の遺物が多量に出土している。これはこれまで比較的資料の少ないこの時期の基準となるものである。第三—13図の分類図を基に、土器を整理するなかで見出したいいくつかの事柄についてここで触れておく。

**土師器類** ここで皿として分類したものは、斎宮Ⅱ期までに見られた杯・皿形態が融合したものと把握できる<sup>(14)</sup>。一方、台付皿は斎宮Ⅱ期の皿 A 系統に乗ると考えられる一群で、脚台部を付加するという要素がこの段階で新たに加わったものと考えられる。小皿類が多数を占めることをも含め、この段階で、後続する中世土器様相をほぼ具備した状況になっていると評価できる。

**土師質土器類** 小皿・皿類はこれ以後13世紀初頭までの期間、一定量存在し続ける器種である。この段階に、土師器：土師質土器が2：1ほどの比率となっていることに注目したい。

精製の素地を用いる椀は、この時期に特徴的に見られる器種のように、その後はあまり見られない。後述の陶器類以上に灰釉陶器との形態的類似性が高く、土師器・陶器といった区分が一見無用なようにも見える。

なお、S K 8407 の椀(第三—16図)は、形態・外形から見れば82・83が黒色土器、84は土師器、85・86は灰釉陶器の影響を見る必要がある。しかし、黒化処理・調整の点からは、土師器との形態的類似性が強い84は黒色土器に含まれる。このように帰属の不明確さを特徴と把握して、土師質土器を捉える必要がある。

## 回転成形の黒色土器

**黒色土器類** 黒化処理をしたものとして一括してしまいがちであるが、整形手法・形態の点からは土師器ないしは土師質土器に帰属すべきものが認められる。これまでの概念上、黒色土器として違和感の無いのは、103~106の全面黒化処理をしたものに限られる。土師質土器を黒化処理したものは、斎宮跡でははじめて認識できたが、森隆氏の研究によれば近畿地方外縁部を中心に多く見られるものであり<sup>(15)</sup>、斎宮の土器もこれらと同様な視点から再度見直す必要がある。

**陶器類** 灰釉陶器の影響を受けていると考えられるが、極めて雑な作りのものが多く、産地比定すら現状では困難な状況にある。斎宮近隣地における当該時期の陶器生産も考慮する必要がある<sup>(16)</sup>。

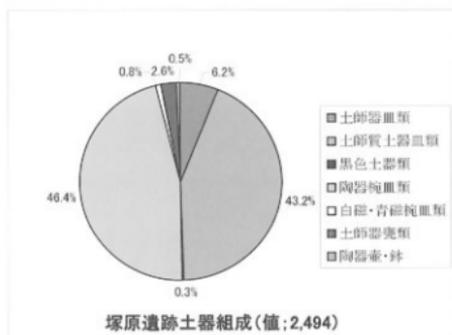
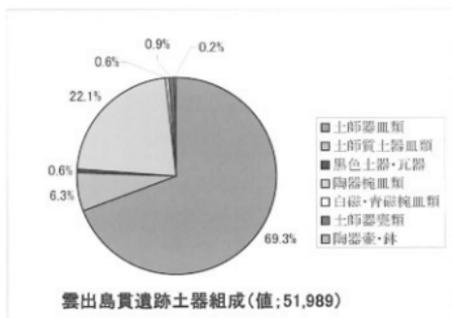
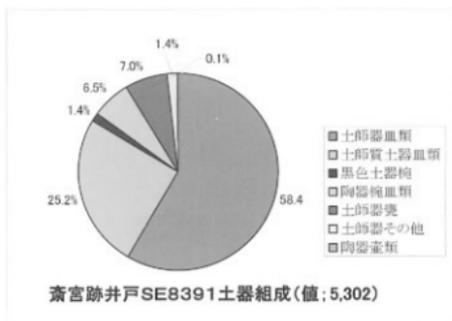
### 供膳具の優位

組成に関して 当該時期の土器を多量に出土した井戸 S E8391では、第三 - 1 表にまとめたような組成を示している。これを円グラフにしたのが第三 - 24 図である。土師器皿類が全体の 6 割近くを占め、供膳土器類全体では 9 割を越えている。この状況は、時代は異なるものの、この時期以前の斎宮に見られる傾向と類似したものと考えられる。

なかでも注目しておきたいのが、土師質土器類の占める割合がかなり高いことである。全体比率としても高く、供膳具全体としては 3 割近くを占めている。S E8391 と同じ III - 2 期に相当する S K 1730 では、破片数による集計であるが土師質土器は全体の約 25%、S K 1074 でも約 18% で<sup>(17)</sup>、この時期の斎宮における土師質土器の使用頻度が高いことがいえる。

### 斎宮の土師質土器優位

比較資料としていくつか見ておく。北勢地域に相当する塚原遺跡の 11 世紀 ~ 13 世紀代の組成<sup>(18)</sup>では、約 43% が土師質土器であるのに対し、土師器の組成は 6% 程度である。また、陶器碗皿類が約 46% を占めている。陶器と土師質土器が主体となる遺跡といえる。中勢地域に相当する雲出島貫遺跡の 11 世紀後半 ~ 12 世紀後半頃の組成<sup>(19)</sup>では、土師質土器は全体の 6% ほどである。ここでは土師器が約 69% と非常に高率で陶器類も 22% と高率である。南勢地域に相当する鴻ノ木遺跡の 12 世紀後半頃の組成<sup>(20)</sup>では、土師質土器は 3% 程度である。これらの状況からみて、土師質土器の比率は、伊勢では北部ほど



第三 - 24 図 各遺跡の土器組織 (11 ~ 12 世紀代)

高く、南部ほど低い傾向にあるといえる。そのなかで、斎宮跡は南勢地域にありながらもその組成は中勢地域と北勢地域との中間的な状況を示すといえる。この理由については今後さらに検討が必要であるが、斎宮という一大消費地に対する物資搬入の問題とも深く絡んでいることが推測され、中世成立期の土器流通を考えるうえで重要な意義を内包していると思われる。

(伊藤裕偉)

<註>

- (1) 斎宮歴史博物館「斎宮の土器・みやこの土器」(国史跡斎宮跡発掘30周年記念特別展「器は語る700年」記念シンポジウム資料2000年)および講演記録「斎宮歴史博物館研究紀要」10(2001年)、駒田利治・泉雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年)
- (2) 都城編年については、奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XIV(1993年)のほか、古代の土器研究会編「古代の土器 I 都城の土器集成」(1992年)を参照した。
- (3) 明和町・三重県斎宮跡調査事務所「史跡斎宮跡昭和60年度現状変更緊急発掘調査報告」1986年、p.4
- (4) 伊藤裕偉「室田島貫遺跡における古代の土師器」(『鶴技』III 三重県埋蔵文化財センター 2001年)
- (5) 太宰府分類については、横田賢次郎・森田勉の両氏による分類(『太宰府出土の輸入陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4(1978年)をさらにまとめた山本信夫氏による分類(『陶器の分類』(『太宰府桑坊跡』II 太宰府市教育委員会 1983年)を用いる。
- (6) 伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相—雲出島貫遺跡出土資料を中心に—」(『鶴技』III 三重県埋蔵文化財センター 2000年)
- (7) 田中琢「古代・中世瀬部の地域的特色(4)畿内」(『日本の考古学』IV 河出書房 1967年)
- (8) 斎藤孝正「東海地方の旋輪陶器生産—猿投窯を中心に—」(『古代の土器研究—律令的土器様式の西東3—』古代の土器研究会 1994年)
- (9) 口線部1/12を1とカウントする方法(宇野隆夫「食器計量の意義と方法」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992年)を主に採用し、高台のある物についてはそれも同じ手法で行った。また、甗については、把手1個分を6(6/12)とカウントしている。これらの方法のうち、個々の土器において数値上最も高いものをそのデータとして用いている。
- (10) 森川常厚「森脇遺跡(第三次)発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター 1991年)など
- (11) 天野秀昭「特別展中世の斎宮」(『展示記録』斎宮歴史博物館 1997年)
- (12) 斎宮跡で使用されている尺は、天平尺に相当する29.6cmと想定された(坂田仁・泉雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から—史跡東部の区画造営プランをめぐって—」(『古代文化』43-4 1991年)。その後は、29.6~29.7cmとする見解(大川勝宏「第103次調査」(『史跡斎宮跡平成5年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1994年、同「第108次調査」(『史跡斎宮跡平成6年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1995年)29.4~30.0cmとする見解(赤岩操「第109次調査」(『史跡斎宮跡平成7年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1996年)がある。当報告文では最大70m程度の比較なので、どの値を取ってもそれほど大きな差は出ないと考えられる。したがってここでは、便宜上中間値の29.7cmを1尺として見ていく。
- (13) 「神殿」の認識については、渡辺寛「斎宮とは何か—その制度と祭祀—」(『幻の宮 伊勢斎宮』斎宮歴史博物館 1999年)の57ページ図4で触れられているに過ぎない。何をもって「神殿」と認識するのが今ひとつ不明であるため、ここでは「神殿」と表記した。
- (14) 大川勝宏氏は「杯C」と「杯B」との融合と表現する(大川「第108次調査」(『史跡斎宮跡平成6年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1995年)。大川氏の「杯C」は当報告でいう杯A1の系統、「杯B」は当報告の杯A2に相当する。用語の違いはあるものの、意味するところは同じである。
- (15) 森脇「西日本の黒色土器生産」上・中・下(『考古学研究』37-2~4 1990・1991年)
- (16) 百瀬正恒氏(財)京都市埋蔵文化財研究所のご教示による。
- (17) 駒田利治・倉田直純・泉雄二「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年)
- (18) 濱邊一機「塚原遺跡」(北勢町教育委員会 2002年)
- (19) 伊藤裕偉「鶴技」II(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
- (20) 森川常厚「まとも」(『鴻ノ木遺跡』上層編 三重県埋蔵文化財センター 1998年)

遺構番号	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリッド	時期	寄宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SD 1447	導排水路	133	溝3	T11	f8~j8	江戸後期		18世紀後半
SD 1842	溝	133	溝48	T10	f21 g21・22 h22	近世?		東西溝。遺物は古いが、埋土の状況からは近世以降と考えられる。溝52と並行。
SD 1856	溝	133	溝79	T11	g, h2	奈良・平安	I ~ II	東西溝
			溝33	T11	i2			溝79と一連
SD 1857	区画溝	47		T11	f3~j3			47次調査分の範囲を確認したのみ
SK 1863	落ち込み	133	溝43	T11	f4	平安前期	II - 2	落ち込み状
			土坑83	T11	f4・5			溝43と同じ
SD 2826	導排水路	133	溝4	T10・11	h4~6・23~2 6 i5~7・23	江戸後期?		遺物が多いが、ほとんどは下の遺構を掘削してしまっただけに代り
			溝8	T11	h2~i7	江戸後期?		
			土坑67	T10	h24・25	江戸		溝4・溝8の続き
SK 2832	土坑	133	土坑40	T11	i, j4	平安	II - 3?	
SD 2836	区画溝	133	溝1	T10・11	j1~5・24・25	奈良末~平安初	I - 3~4	j2の遺物は溝1確定前につき、信用できない
SK 8381		133	土坑2	T11	j1	平安	II - 3	SD2836より新
SD 8382	導排水路	133	溝5	T11	f~j7・8	江戸後期		
SD 8383	地境溝	133	溝6	T11	g, h2	近世?		地境溝、遺構図作製時には消滅、略図にのみあり。
SD 8384	溝	133	溝7	T11	g8・9	江戸後期?		
SK 8385	土坑	133	土坑9	T11	j2	平安前	II - 3	円形小土坑。土坑2より新。
SD 8386	小溝	133	溝10	T11	j6	特定不可		東西小溝
SD 8387	小溝	133	溝11	T11	i, j5	平安初	II - 1	東西小溝
SD 8388	小溝	133	溝12	T11	i, j5	平安初	I - 4?	杯 東西小溝
SK 8389	土坑	133	土坑13	T11	j4	平安	II ~ III	SD2836より新
SK 8390	土坑	133	土坑14	T11	j1	平安	II ?	溝1より新。
SE 8391	井戸	133	井戸15	T11	h, i1	平安後期	III - 2	11世紀中葉、灰釉陶器百代寺堂行、土器群良好
SK 8392	土坑	133	土坑16	T11	j1	平安初	I - 4?	溝1より新。土坑2・9より古。
SK 8393	土坑	133	土坑17	T11	i1	奈良	I - 4	黒色埋土。
SD 8394	土坑	133	溝18	T11	i, j5	平安初	II - 1	杯
SK 8395	大土坑	133	土坑19	T11	h, i7	平安中	II - 3	土坑45の上層に相当、灰釉K90
			土坑45	T11	h, i7	平安前期	II - 2	井戸45を改築 土坑19は上層
SD 8396	小溝	133	溝20	T11	j4	特定不可		東西小溝
SK 8397	土坑群	133	土坑21	T11	f, g2	平安	II - 4~III - 2	複数土坑の重なり。切り合い不明。埋没最終段階は井戸15並行期。重形土器。
SD 8398	溝	133	溝22	T11	i, j1	奈良?		溝1と関連か
SK 8399	土坑	133	土坑23	T11	j6	平安前	II - 1	黒色埋土。土坑24より古。
SK 8400	土坑	133	土坑24	T11	j5	平安前	II - 1以降	黒色埋土

第三 - 3 表 第133次調査区遺構一覧 (1)

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリッド	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
	8401 欠番	133	土坑25	T11	i5			i5 Pit7に変更
SD	8402 小溝	133	溝26	T11	i, j5	特定不可	Ⅱ以降	東西小溝
SD	8403 小溝	133	溝27	T11	i, j5	特定不可	Ⅱ以降	東西小溝
	8404 欠番	133	土坑28	T11	g2			g2 Pit7に変更
SK	8405 土坑	133	土坑29	T11	f, g2	平安	Ⅱ	土坑30・21と重板。前後不明。
SK	8406 土坑	133	土坑30	T11	f2	平安	Ⅱ	土坑21・29と重板。前後不明。
SK	8407 土坑	133	土坑31	T11	i, j4	平安後期	Ⅲ-2	灰釉陶器百代寺
SD	8408 溝	133	溝32	T11	i, j5	平安初	Ⅱ-1	椀A完形
	8409 欠番							
SD	8410 溝	133	溝35	T11	i, j6	平安初	Ⅱ-1	椀A
	8411 欠番							
SK	8412 土坑	133	土坑37	T11	i4・5	平安前期	Ⅱ-2	
SK	8413 溝状土坑	133	土坑36	T11	i4	奈良末?	Ⅰ-4以前?	不定形落ち込み状。
			土坑38		i4			土坑78fと同じ
			土坑78		h4			土坑38が同じ
SK	8414	133	土坑39	T11	i4	平安	Ⅱ-3?	
SD	8415 小溝	133	溝41	T11	i2	特定不可	Ⅱ以降	
SK	8416 土坑	133	土坑42	T11	g, h7・8	平安初	Ⅱ-1	土坑54と同じ、土坑45より古
			土坑54		g, h7			土坑42と同じ、土坑45より古
SD	8417 小溝	133	溝44	T11	h4	特定不可		
SD	8418	133	溝46	T11	g, h1・2	特定不可		
SD	8419 小溝	133	溝47	T11	g1	特定不可	Ⅱ以降	南北溝、SD8431と一連
			溝75	T10	g25			
SZ	8420 落ち込み	133	土坑49	T10	j21	奈良平安	Ⅰ～Ⅱ	溝ないしは土坑。形態と時期の特定不可。SD2836の延長である可能性大。
SD	8421 地境溝	133	溝50	T10	f~h20・21 i, j20	近世		地割に沿う東西溝。軒椽瓦。
SK	8422 土坑	133	土坑51	T10	g24	奈良後期～	Ⅰ4～Ⅱ1	細片多い
SD	8423 溝	133	溝52	T10	g, h21	近世?		東西溝。近世か? 溝48と並行。土器少量
SD	8424 溝	133	溝53	T11	f6・7 g7		Ⅱ-2	杯
SK	8425 土坑	133	土坑55	T10	j24・25	奈良後期～	Ⅰ-4～Ⅲ-1	土坑58・65・66fと同じ
			土坑58		j24・25			土坑55と同じ
			土坑65		j24			土坑55と同じ
			土坑66		j24			土坑55と同じ
SD	8426	133	溝56	T11	g4～7	平安前期	Ⅱ-2	杯、壺E

第Ⅲ-4表 第133次調査区遺構一覧(2)

通番	遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	蓋宮継年	遺構の性格・遺物・その他
SD	8427	小溝	133	溝57	T10	f22	平安	II ?	浅い南北小溝。土器少量
SK	8428	溝状土坑	133	土坑59	T10	f, g23	奈良	I - 3~4	灰粒K14出土するが、重複するpHの検出前である。 土坑59のトレンチにつき抹消
			133	溝76		f23			
SD	8429	小溝	133	溝60	T10	g, h24	特定不可	II以降	浅い東西溝、土器少量。
SD	8430	小溝	133	溝61	T11	g6・7	奈良・平安		時期の特定不可
SD	8431	小溝	133	溝62	T10	g23	平安前期	II - 2	浅い南北溝。SD8419と一連
				溝70	T10	g22	特定不可		浅い南北小溝、土器少量
SD	8432	小溝	133	溝63	T10	f22	特定不可		南北小溝
SK	8433	土坑	133	土坑64	T10	g, h24	平安前期	II - 2	細片多い
SD	8434	溝	133	溝68	T10	f, g23	平安後期	III	ピットを含む浅い落ち込み
SK	8435	土坑	133	土坑69	T10	f24	平安	II	落ち込み状
	8436	欠番							
SD	8437	小溝	133	溝71	T10	g25	特定不可	II以降	浅い南北小溝、土器少量
SZ	8438	落ち込み	133	土坑72	T10	h25	特定不可	II以降	浅い落ち込み
SD	8439	溝	133	溝73	T11	g, h8	江戸後期		II - 2古の遺物含む SD1447の屑部
SD	8440	小溝	133	溝74	T10	g25	特定不可	II以降	浅い東西溝、土器少量
SD	8441	小溝	133	溝77	T11	g, h4	奈良・平安		時期の特定不可
SD	8442	小溝	133	溝80	T11	h5	特定不可		南北小溝
				溝87	T11	h6			南北小溝
SD	8443	小溝	133	溝81	T11	g4	特定不可	II以降	南北小溝
SD	8444	小溝	133	溝82	T11	g4・5	奈良・平安		時期の特定不可
SD	8445	小溝	133	溝84	T11	h6	特定不可	II以降	南北小溝
SZ	8446	落ち込み	133	土坑85	T11	h6	平安前期	II - 1	落ち込み状
SD	8447	小溝	133	溝86	T11	g5	奈良・平安	I以降	時期の特定不可
	8448	欠番							
SD	8449	小溝	133	溝88	T11	g6	奈良・平安	I以降	時期の特定不可
	8450	欠番							

第Ⅲ - 5表 第133次調査区遺構一覧(3)

遺構通称名	現況時遺構名	地区	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	遺物時期	規模(東西間・m×南北間・m)	主軸	方位 (N基準)	備考
SB1843	SB1843	T10	f21	P1	p1…Ⅱ-1以降	Ⅱ-2	3(6.4)×2(?)	東西	N1° W	
			g21	P3	p3…Ⅱ-2					
SB1848	SB1848	T10	f22	P7	p7…Ⅱ以降	Ⅱ	3(6.1)×2(3.8)	東西	N1° W	Ⅱ-2か?
			f23	P8	p8…Ⅱ以降					
			g22	P5						
			g23	P20	p20…Ⅱ以降					
SB1853	SB1853	T10	f25	P3	p3…Ⅰ-3	Ⅰ-4	5(12.1)×2(4.8)	東西	N3° W	
			g24	P5・P3	p3…Ⅰ-4					
			g25	P1・P12	p12…Ⅰ後半か					
SB1854	SB1854	T10	f24	p1・5		Ⅱ-2	3(6.3)×2(4.1)	東西	N2° W	
			f25	p5・6	p5・6…Ⅱ以降					
			g24	p1・7	p1…Ⅱ-2以降					
			g25	p5・13・3・4	p5…Ⅱ以前、p4…Ⅰ-4					
SB1860	SB1860	T10・11	f25	P2	p2…Ⅱ以降	Ⅱ-1	5(12.2)×3(7.4) 南面底	東西	N4° W	
			f1	p3	p3…Ⅱ以降					
			f2	P2	p2…Ⅱ-2					
			g25	P9・P10・11	p11…Ⅱ-1以降					
			g1	P1						
SB1864	SB1864	T11	f4	p2	p2…Ⅱ-1	Ⅱ-1	3(5.8)×2(3.8)	東西	N2° W	g4-p6はp5に同じ
			f5	p2						
			g4	p2A・p6・p5・p7	p7…Ⅱ-1					
			g5	p21・p7・p6	p6…Ⅱ-1					
SB1870	SB1870	T11	f5	P3	p3…Ⅱ以前	Ⅱ以前	5(12.2)×2(4.9)	東西	N3° W	SB8462より古
			f6	P4						
			g6	p4・p10						
SB1872	SB1872	T11	f5	P1		Ⅱ-4	5(8.3)×2(3.4)	東西	N0°	h5pit18は灰輪K90並行、S B8462より新
			f6	P1						
			g5	P8						
			g6	P6・P9	p9…Ⅱ					
			h5	P11・P18	p11…Ⅱ、p18…Ⅱ-3~4					
SB8451	建物1	T10	h6	P5・P6・P12	p6…Ⅱ-2、p12…Ⅱ-4	Ⅲ-2	5(8.9)×2(4.1)	東西	N4° E	h22pit4に竊羽口片
			f22	P4						
			f23	P1	p1…Ⅲ-1以降					
SB8452	建物2	T10	g22	P6・P3	p3…Ⅱ-2以降	Ⅲ-1	5(10.0)×2(4.2)	東西	N4° E	
			g23	P3・P12						
			h22	P3・P4・P6	p3…Ⅱ-4					
			h23	P7						
			f23	P14	p14…Ⅲ-2?					
			g22	P8・P14						
			g23	P8・P15・P24	p24…Ⅱ以降					
h22	P9・P7	p9…Ⅲ? P7…Ⅲ-1								
SB8453	建物3	T10	h23	P1・P5		Ⅲ-1	5(9.2)×2(3.9)	東西	N1° W	h23pit3に残りの良い台付小皿あり。
			h22	P2・P6	p6…Ⅱ以降					
			h23	P2	p2…Ⅱ以降					
			f22	P13	p13…Ⅱ-3以降					
			f23	P7	p7…Ⅲ以降					
g22	P12・P13	p12…Ⅲ-1								
g23	P14・P21									
h22	P6・P8	p6…Ⅲ-1								
h23	P3・P6・P8	p3…Ⅲ-1								

Ⅲ-6表 第133次調査区掘立柱建物一覧(1)

通称遺構名	視察時遺構名	地区	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模(東西間・m×南北間・m)	主軸	方位(N基準)	備考
SB8454	建物4	T11	f1	P2		II-2	2(4.1)×3(6.7)	南北	NO°	SB1860より新
			g1	P2・P3	p3…II以降					
			g2	P5・P9	p5…II以降、p9…II-2					
SB8455	建物5	T11	f4	P3	p3…III-2	III-2	5(9.4)×2(4.1)	東西	N3° W	f4pit3は良好、SB1864より新
			g4	P9・P2B	p9…III-2					
SB8456	建物6	T11	g4	P1・P4・P11	p1…III-1、p11…III-1	III-1	2(3.7)×3(5.4)	南北	N1° W	g4pit1はIII-1か? H4 pit10は口クロ土師器
			h4	P3・P7・P10	p10…III-1?					
SB8457	建物7	T11	f4	P1		III-2	6(11.8)×3(5.8)	東西	N3° E	g4pit8は土器良好
			g4	P9・P15	p9…III-1					
			g5	P3・P14・P17						
			h4	P5・P13	p13…III-2					
			h5	P16・P19						
			i4	P1・P3	p1…III-2					
			i5	P6	p6…III-2					
SB8458	建物8	T11	g4	P12		III	4(7.8)×2?(4.1)	東西	N3° E	h4pit9は土師器残体部片ゆえ善しい SB8461・8462より新、SB8459より古
			g5	P18						
			h4	P2・P9・P14	p14…II以降、p9…III-1?					
			h5	P1・P4・P8	p8…II以降					
SB8459	建物9	T11	g4	P14		III	3(8.3)×2(3.6)	東西	N2° W	SB8458より新
			g5	P4・P19・P20						
			h4	P18	p18…III					
			h5	P13	p13…III-1?					
			i5	P9						
SB8460	建物10	T11	f6	P2・P3	p2・3…II-2	III-2	5(9.2)×2(4.0)	東西	N3° E	SB8457の付属施設か? SB1870より新
			g5	P14						
			g6	P7・P8	p7…III-2					
			h5	P16・P19						
			h6	P7・P8	p7…III-2					
SB8461	建物11	T11	h5	P2・P5・P12	p2…II-2? P12…II-2	II-2	3(5.2)×2(3.6)	東西	N4° W	SB8462より新
			h6	P15						
			i5	P1・P4・P7・P10	p1…II-2					
			i6	P3・P4						
SB8462	建物12	T11	g6	P3		II-1	3(6.7)×2(4.6)	東西	N5° W	SB1872・SB8461より古
			h5	P3・P7	p3・p7…III-1					
			h6	P1・P4	p1…II-1					
			i5	P3・P7・P10	p7…隕石口					
			i6	P1・P5	p5…II-1以前					
SB8463	建物13	T11	h7	P1	p1…I-2?	I-2	2(5.2)×3(7.6)	南北	N6° W	h8pit1は暗文土師器(精製)
			h8	P1	p1…I-2					
			i7	P1						
			j7	P4						
			j8	P1						
SB8464	建物14	T11	g7	P1・P2	p1…II-1?	II	3?(?)×2?(?)	東西	NO° ?	
SB8465	ナン	T10	h21	p2・p3	p3…III以降	III	3(5.6)×2(3.8)?	南北	N4° E	h22pit2に墨書土器
			h22	p1・p2	p2…III以降					
SB8466	ナン	T10	i22	p1		III	3(5.9)×2(3.9)?	東西	NO°	
			f22	p2	p2…III以降					
SB8467	ナン	T10	f23	p5	p5…III以降	III	4(7.9)×2(4.1)	東西	N4° E	
			g22	p9・16						
			g23	p9・10・20	p20…III以降					

第Ⅲ-7表 第133次調査区掘立柱建物一覧(2)

No.	加工 設備	種類	造 型 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色 調	残存度	備 考	登録No.	
1	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.0 3.3	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:放射状模 反状増文	密 ~1層 細小片	黒	ⅡB/12	調査:外から内へ返回り	008-02	
2	T11-h8 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	12.8 3.0	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	外:煤	011-04	
3	T11-h8 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.0 2.5	放射	やや散 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		011-03	
4	T11-h8-7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	14.1 2.9	口:ヨコナデ、体外:オサエナデ、内外:放射、 内:波線	やや散 0.5~2 細小片	黒	ⅡB/12		005-04	
5	T11-h8-7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.4 2.9	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	胎土:マーブル状 口:波線	005-03	
6	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.9 3.2	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	胎土:原色か文字あり(刺線不鮮) 外:煤	007-02	
7	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	14.0 3.0	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		008-03	
8	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	14.0 3.5	口:ヨコナデ、内:指圧痕、内:ナデ	密 ~1層 小片	黒	ⅡB/12	胎土:赤色陶土 口:波線	007-01	
9	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	14.0 3.2	内外面とも刺線	やや散 0.5~2 細小片	黒	ⅡB/12	寛朝	胎土:マーブル状	008-02
10	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	15.0 3.5	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 ~2層 小片	黒	ⅡB/12		008-01	
11	T11-h8-7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	15.4 3.2	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	胎土:模範産地号	005-02	
12	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢			外:オサエナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	産地	「夏月」	007-03
13	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.0 3.1	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		008-05	
14	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.0 3.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:放射	やや散 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	胎土:マーブル状 口:波線	008-04	
15	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	15.2 3.6	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~2 細小片	黒	ⅡB/12		008-01	
16	T11-h8 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	14.4 3.6		密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		011-05	
17	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	16.7 2.3	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	内:煤	049-03	
18	T11-h7 SK8395	土師鉢 高杯	底径	14.3	内外:ケズリ上げ(横:ナデ)、直線ヨコナデ	密 0.5~2 細小片	黒	ⅡB/12	面:13面	048-02	
19	T11-h7-8 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	27.0 12.2 10.1	口:ヨコナデ、体外:ケズリ、内外:ナデ、内:ナ 底径 器高	密 0.5~3 細小片	黒	ⅡB/12 台6/12	台輪部:高有紐付時の刻み	043-01	
20	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	19.0 5.2	内外:内:回転ナデ、内外:回転ケズリ	密 0.5~2 細小片	黒	ⅡB/12 台2/12		006-05	
21	T11-h7 SK8395	土師鉢 高杯	底径	11.4	内:回転ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	柱完 輪1/12	013-04	
22	T11-h8 SK8395	土師鉢 鉢			口:ヨコナデ、体外:(上)タタキ、(下)ケズ リ、内:十字文同心円あて真直	密 0.5~1 細小片	白B/0	胎土片	2層と同一層体	043-01	
23	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢			口:ヨコナデ、体外:(上)タタキ、(下)ケズ リ、内:十字文同心円あて真直	密 0.5~1 細小片	白B/0	胎土片	2層と同一層体	043-01	
24	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	12.2 3.0	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		012-03	
25	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.0 3.4	口:内:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		010-02	
26	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	13.0 3.0	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		012-02	
27	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	16.0 2.6	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	内:直線	006-03	
28	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	15.2 2.3	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		011-02	
29	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	8.3 7.5	口:ヨコナデ、体外:ケズリ	密 0.5~3 細小片	黒	ⅡB/12		008-04	
30	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	4.1 (8.7)	胎土、胎土部分には筋の痕あり 前後 部:断面V字形の切り込み 上部:接合時に割 みの爪痕付	密 0.5~3 細小片	黒	ⅡB/12	胎土片	043-02	
31	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	12.0 3.9 4.0	内外:内:回転ナデ、内外:回転ケズリ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12 台4/12		012-04	
32	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	27.0	口:ヨコナデ、外:平行目タタキ 内:同心円 で真直	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		009-01	
33	T11-h8 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	15.2	口:内:回転ナデ、外:ケズリ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12		009-03	
34	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	10.0 2.9	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~2 細小片	黒	ⅡB/12	寛朝	013-05	
35	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	15.1	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~1 細小片	黒	ⅡB/12	口:波線	040-01	
36	T11-h7 SK8395	土師鉢 鉢	口径 器高	16.2	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	密 0.5~4 細小片	黒	ⅡB/12		012-07	

第三 - 8 表 第133次調査区出土遺物観察表(1)



No.	加工 説明	種類	寸法 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色 質	残存度	備 考	登録No.
73	T11-4 SK847	土師器 小皿	口径 11.0 高さ 2.3	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 ~1mm 小灰 点	黒	灰白5YR7/2	ほぼ 完全		021-04
74	T11-4 SK847	土師器 小皿	口径 11.2 高さ 2.3	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 ~1mm 小灰 点	中 砂 散	灰白2.5YR/1	0.9/12		031-05
75	T11-4 SK847	土師器 小皿	口径 11.0 高さ 2.6	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 ~1mm 小灰 点	黒	淡黄緑10YR8/4	0.7/12	土上、ウラ凸む 内:割縁	003-04
76	T11-4 SK847	土師器 小皿	口径 13.6 高さ 3.0	口~内:ヨコナデ、外:オサエナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	にぶい緑7.5YR7/4	0.8/12		002-03
77	T11-4 SK847	土師器 小皿	口径 12.4 高さ 3.0	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	にぶい緑7.5YR7/4	0.3/12		002-02
78	T11-4 SK847	土師器 皿	口径 13.8 高さ 3.3	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/6	0.5/12		003-05
79	T11-4 SK847	土師器 皿	口径 13.1 高さ 3.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑10YR8/4	0.11/12		023-05
80	T11-4 SK847	土師器 皿	口径 15.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	中 砂 散 ~2mm 小灰 点	中 砂 散	淡黄緑10YR8/4	0.5/12		002-01
81	T11-4 SK847	土師器 碗	口径 7.8 高さ 5.7	口:ヨコナデ、体外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	緑7.5YR7/6	0.10/12 欠	内:煤	002-06
82	T11-4 SK847	土師器土師 器色	口径 15.2	口:ヨコナデ、内:ミガキ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	黒2/0 にぶい黄緑10YR8/4	0.3/12	黒化はA層 割縁台(ロウク)痕跡	003-02
83	T11-4 SK847	土師器土師 器色	口径 14.8	口~内:回転ナデ+ミガキ、体外:(上)回転ナ デ+ミガキ、(下)回転ナデ、体外:糸切り	黒 ~1mm 小灰 点	黒	緑7.5YR7/6	ほぼ 完全	淡色土層として作られたものか? 内:ミガキ5段位 回転台(ロウク)成 形	001-02
84	T11-4 SK847	土師器土師 器色	口径 (16.0)	体外~内:ミガキ、体外:糸切り	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	黒2/0 緑7.5YR7/6	0.3/12 ほぼ 完全	黒化はA層 回転台(ロウク)底部	003-01
85	T11-4 SK847	土師器土師 器色	口径 18.4 高さ 9.3 底径 12.2	口~内:回転ナデ、体外:回転ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	中 砂 散	にぶい黄緑10YR8/3	0.11/12 台8/12 底完全	回転台(ロウク)底部 内(上)半:煤	001-01
86	T11-4 SK847	土師器土師 器色	口径 8.1	体外~内:回転ナデ、体外:糸切り	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	にぶい緑7.5YR7/4	0.5/12 台8/12	回転台(ロウク)底部 高台割縁 外:煤	002-05
87	T11-4 SK847	長袖土師 器小皿	口径 11.6 高さ 7.1 底径 2.4	体外~内:ロウクナデ、体外:糸切り	黒	黒	灰黄2.5Y7/2	0.3/12 欠		001-03
88	T11-4 SK847	縁起陶器 小皿	口径 10.6 高さ 1.9	体外~内:ロウクナデ、体外:糸切り、高台結 付ヨコナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	望 遠 鏡	黒地、2/6/0	0.2/12 台8/12	ほぼ完全 全面焼結	000-03
89	T11-4 SK847	土師器 付付鉢	口径 14.2	体外~内:ナデ、口:ヨコナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑10YR8/4	0.9/12		003-07
90	T11-4 SK847	土師器 鉢	口径上 13.0	外:ハケム、内:ナデ、転ナデ、ハケム	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	灰緑7.5YR8/2	0.6/12	高台割縁 外:煤	002-04
91	T11-4 SE8391 a1.13	土師器 小皿	口径 9.6 高さ 2.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	0.11/12		024-09
92	T11-4 SE8391 a1.9	土師器 小皿	口径 9.2 高さ 2.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	灰白7.5YR8/2	0.9/12		024-08
93	T11-4 SE8391 a1.13	土師器 小皿	口径 9.7 高さ 2.1	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	にぶい緑7.5YR7/4	完全		024-10
94	T11-4 SE8391 a1.12	土師器 小皿	口径 9.1 高さ 2.1	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	完全		033-06
95	T11-4 SE8391 a1.12	土師器 小皿	口径 10.0 高さ 2.1	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	完全		033-07
96	T11-4 SE8391 a1.13	土師器 小皿	口径 10.8 高さ 2.2	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	灰白7.5YR8/1	完全		024-08
97	T11-4 SE8391 a1.6	土師器 小皿	口径 10.4 高さ 1.8	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	完全		016-01
98	T11-4 SE8391 a1.14	土師器 小皿	口径 10.4 高さ 2.5	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	0.11/12		024-17
99	T11-4 SE8391 a1.15	土師器 小皿	口径 10.8 高さ 1.9	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	にぶい緑7.5YR7/4	口完全 体一部 完全		024-07
100	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 小皿	口径 10.1 高さ 1.9	口:ヨコナデ、体外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	0.13/12		019-04
101	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 小皿	口径 9.8 高さ 1.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~1 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/4	ほぼ 完全		019-02
102	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 小皿	口径 10.8 高さ 2.5	口:ヨコナデ、体外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~2 mm小 灰点	黒	淡黄緑7.5YR8/3	完全	釜み大	024-03
103	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 小皿	口径 11.2 高さ 2.4	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~3 mm小 灰点	黒	淡緑5YR8/2	7/12		041-07
104	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 小皿	口径 11.9 高さ 2.6	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~3 mm小 灰点	黒	灰白10YR8/2	0.11/12	底:割縁成	033-03
105	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 皿	口径 12.8 高さ 3.0	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~3 mm小 灰点	黒	にぶい緑7.5YR7/2	0.9/12		032-03
106	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 皿	口径 13.0 高さ 3.5	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:ナデ	黒 0.5~2 mm小 灰点	中 砂 散	灰白7.5YR8/2	0.8/12		033-02
107	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 皿	口径 12.4 高さ 3.2	口:ヨコナデ、外:オサエナデ、内:割縁	黒 0.5~1 mm小 灰点	中 砂 散	緑7.5YR7/6	0.11/12		033-03
108	T11-4 SE8391 a1.16	土師器 皿	口径 13.8 高さ 3.1	口:ヨコナデ、体外:オサエナデ、内:割縁	中 砂 散	中 砂 散	灰白7.5YR8/2	0.11/12	釜み大 内:外一側に煤	018-06

第三-10表 第133次調査区出土遺物観察表(3)

№	出土遺構	遺構	法 量 (cm)	調査・技法の特徴	出土 種類	色 調	発祥成	備 考	登録順
109	F11-h1 SE8391 a201	土師器 土師 甕	口徑 器高 13.8 3.5	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		036-05
110	F11-h1 SE8391 a243	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.8 3.7	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥		017-09
111	F11-h1 SE8391 a222	土師器 土師 甕	口徑 器高 15.2 3.6	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~3 黒小石	発祥	胎土中に10mmの土師片	038-04
112	F11-h1 SE8391 a83	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.2 3.4	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥	胎土中に土師片	035-01
113	F11-h1 SE8391 a145	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.4 4.2	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~5 黒小石	発祥		036-02
114	F11-h1 SE8391 a29	土師器 土師 甕	口徑 器高 15.4 4.4	口・ヨコナデ、外・指オサエ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	口底/12 発祥	024-01
115	F11-h1 SE8391 a34	土師器 土師 甕	口徑 器高 15.2 4.7	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		035-04
116	F11-h1 SE8391	土師器 土師 甕	口徑 器高 15.7 4.3	口・ヨコナデ、外・指オサエ、内・ナデ	甕 類	黒 2.5YR/6	口底/12		018-03
117	F11-h1 SE8391 a211	土師器 土師 甕	口徑 器高 15.2 4.4	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		026-02
118	F11-h1 SE8391 a225	土師器 土師 甕	口徑 器高 13.8 4.5	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	黄褐色10YR/8	036-06
119	F11-h1 SE8391 a291	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.2 4.5	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		038-01
120	F11-h1 SE8391 a200	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.8 4.5	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	口11/12 黒、精製土直	039-09
121	F11-h1 SE8391 a202	土師器 土師 甕	口徑 器高 20.8 4.4	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ハクメ	甕 類	黒 0.5~3 黒小石	発祥	灰白2.5Y8/2	041-01
122	F11-h1 SE8391 a240	土師器 土師 甕	口徑 器高 9.8 5.4	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 10YR/4 灰白10YR/2	口11/12 口11/12		019-01
123	F11-h1 SE8391 a240	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.8 4.7	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 10YR/4 灰白10YR/2	口11/12 口11/12	内:有直土	017-03
124	F11-h1 SE8391 a217	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.2 2.5	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	ての字口縁	017-08
125	F11-h1 SE8391 a25	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.1 5.8	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	口発祥 台発祥	025-03
126	F11-h1 SE8391 a112	土師器 土師 甕	口徑 器高 9.8 5.1	口~外・ヨコナデ、内・胴底	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	口底/12 台発祥		024-04
127	F11-h1 SE8391	土師器 土師 甕	口徑 器高 9.8 5.4	口~体外・ヨコナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	高台と皿部素地直	019-04
128	F11-h1 SE8391 a141T	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.6 5.8	口~体外・ヨコナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	口発祥 台9/12	024-11
129	F11-h1 SE8391 a201	土師器 土師 甕	口徑 器高 11.1 3.2	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥	口底/12 台発祥	016-03
130	F11-h1 SE8391 a212	土師器 土師 甕	口徑 器高 11.8 3.5	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥	明赤褐色5YR5/6	016-07
131	F11-h1 SE8391 a142	土師器 土師 甕	口徑 器高 11.8 4.0	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	胎土:粉砂混入 内:有直土	017-07
132	F11-h1 SE8391 a125	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.3 7.9	口・ヨコナデ、外・ナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	内:有直土	024-02
133	F11-h1 SE8391 a16	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.4 5.9	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	口底/12 台発祥	018-08
134	F11-h1 SE8391 a167	土師器 土師 甕	口徑 器高 17.2 5.1	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥	内外:黒	018-09
135	F11-h1 SE8391 a218	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.4 4.8	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		016-05
136	F11-h1 SE8391 a218	土師器 土師 甕	口徑 器高 14.0 7.8	口・ヨコナデ、外・(上)ナデ、(下)ハクメ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~3 黒小石	口底/12 台4/12		032-02
137	F11-h1 SE8391	土師器 土師 甕	口徑 器高 15.0 8.2	口・ヨコナデ、外・(上)オサエナデ、(下)ハクメ、内・胴底	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	口底/12 台4/12		041-08
138	F11-h1 SE8391 a136	土師器 土師 甕	口徑 器高 13.4 7.0	口・ヨコナデ、外・オサエナデ、内・ナデ	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥		025-01
139	F11-h1 SE8391 a173	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.4 1.6	体外~内:胴底ナデ、底外:糸切り	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥	胎土:粉砂混入	032-05
140	F11-h1 SE8391 a232	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.8 2.2	体外~内:胴底ナデ、底外:糸切り	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥		032-04
141	F11-h1 SE8391 a152	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.1 1.8	体外~内:口コナデ、底外:糸切り	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥		017-02
142	F11-h1 SE8391 a188	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.2 2.0	体外~内:口コナデ、底外:糸切り	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		041-03
143	F11-h1 SE8391	土師器 土師 甕	口徑 器高 10.4 1.9	体外~内:胴底ナデ、底外:糸切り	甕 類	黒 0.5~1 黒小石	発祥		032-07
144	F11-h1 SE8391	土師器 土師 甕	口徑 器高 11.8 2.2	体外~内:胴底ナデ、底外:糸切り	甕 類	黒 0.5~2 黒小石	発祥		032-08

第三-11表 第133次調査区出土遺物観察表(4)

編	出土 遺構	葬種	墳 室 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色 調	残存度	備 考	登録順
145	T11-h1 SE8391	土師質土器 小皿	口径 深高	10.7 2.4	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	白 にふい 黄緑 10YR7/3	口9/12 底完形	副胎合(口口口)成形 内面: 上口縁部に僅	041-02
146	T11-h1 SE8391	土師質土器 小皿	口径 深高	11.4 2.9	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	白 にふい 黄 7.5YR6/4	口2/12 底完形	副胎合(口口口)成形	032-08
147	T11-h1 SE8391	土師質土器 小皿	口径 深高	8.4 3.0	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 7.5YR6/6	口9/12 底完形	副胎合(口口口)成形	024-05
148	T11-h1 SE8391	土師質土器 小皿	口径 深高	9.0 2.6	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	白 にふい 黄 7.5YR7/4	口完形 底完形	副胎合(口口口)成形 柱状高台 外: 遺棄	041-04
149	T11-h1 SE8391 a135	土師質土器 小皿	口径 深高	9.0 2.5	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	黄 7.5YR7/6	完形	副胎合(口口口)成形 柱状高台	011-04
150	T11-h1 SE8391 a11	土師質土器 台付小皿	口径 深高	9.5 2.2	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	灰白 2.5Y8/2	完形	副胎合(口口口)成形 柱状高台	041-03
151	T11-h1 SE8391	土師質土器 台付小皿	口径 深高	9.7 3.0	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	白 にふい 黄 7.5YR7/4	完形	副胎合(口口口)成形 柱状高台 外: 遺棄	019-02
152	T11-h1 SE8391 a135	土師質土器 台付小皿	口径 深高	9.4 4.6	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	淡黄緑 7.5YR6/4	口1/12 底完形	副胎合(口口口)成形 柱状高台	025-04
153	T11-h1 SE8391	土師質土器 台付小皿	口径 深高	10.1 3.3	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	淡黄緑 7.5YR6/4	完形	副胎合(口口口)成形	016-04
154	T11-h1 SE8391 a205	土師質土器 台付小皿	口径	10.1	体外～内: ロクロナ子	密 中 軟	黄 朝陽灰 7.5YR7/2	口11/12	副胎合(口口口)成形 内面: 縁	017-01
155	T11-h1 SE8391	土師質土器 台付小皿	口径 深高	9.8 2.4	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	灰白 2.5Y8/2	口4/12 底完形	副胎合(口口口)成形	041-06
156	T11-h1 SE8391	土師質土器 台付小皿	口径 深高	11.0 2.9	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	白 にふい 黄 7.5YR7/4	口9/12 底完形	副胎合(口口口)成形	019-03
157	T11-h1 SE8391 a177	土師質土器 台付皿	口径 深高	15.6 4.2	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	灰白 長陽 7.5YR6/2	口3/12 底完形	副胎合(口口口)成形 柱状高台	017-08
158	T11-h1 SE8391 a142	土師質土器 台付皿	口径 深高	17.4 7.6	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 7.5YR6/6	口1/12 底完形	副胎合(口口口)成形	025-02
159	T11-h1 SE8391	土師質土器 皿	口径 深高	14.8 6.5	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	白 にふい 黄 7.5YR7/4	口2/12 底完形	副胎合(口口口)成形	019-06
160	T11-h1 SE8391 a174	土師質土器 碗	口径 深高	15.5 7.0	口～体外: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 朝陽輪 10YR7/6	口7/12 底完形	副胎合(口口口)成形 精巧	014-03
161	T11-h1 SE8391	土師質土器 碗	口径 深高	14.9 7.1	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	淡黄緑 10YR6/4	口11/12 底完形	副胎合(口口口)成形 底に縁付き蓋のヒビ	025-05
162	T11-h1 SE8391 a147	土師質土器 碗	口径 深高	18.5 7.9	口、口口口ナ子、体外:(上)口口口ナ子、(下)回転ナ子	密 中 軟	淡黄緑 7.5YR6/4	口6/12 底完形	副胎合(口口口)成形 精巧	014-04
163	T11-h1 SE8391	陶器 小皿	口径 深高	9.8 5.2	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	黄 朝陽輪 10YR6/2	口4/12 底完形	副胎合(口口口)成形	028-04
164	T11-h1 SE8391 a228	陶器 小皿	口径 深高	9.4 2.1	体外～内: ロクロナ子	密 中 軟	灰白 7.5YR7/1	口7/15 底完形	縁なし 台: 腐食あり	017-05
165	T11-h1 SE8391	陶器 小皿	口径 深高	11.2 3.6	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	白 にふい 黄 朝陽 10YR7/3	口6/12 底完形	副胎合(口口口)成形	028-03
166	T11-h1 SE8391	陶器 小皿	口径 深高	9.0 5.2	体外～内: 回転ナ子	密 中 軟	黄 灰白 10YR6/1	口6/12 底完形	副胎合(口口口)成形	028-05
167	T11-h1 SE8391	陶器 碗	口径 深高	14.8 6.3	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	灰白 10YR6/1	口4/12 底完形	副胎合(口口口)成形	018-02
168	T11-h1 SE8391	陶器 碗	口径 深高	14.7 7.2	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	黄 灰白 10YR7/1	口6/12 底完形	縁なし 台	014-01
169	T11-h1 SE8391	陶器 碗	口径 深高	14.4 8.2	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	粗 中 軟	黄 灰白 10YR7/1	口4/12 底完形	副胎合(口口口)成形	029-01
170	T11-h1 SE8391 a129	陶器 碗	口径 深高	14.8 6.1	口内: 回転ナ子、体外:(上)回転ナ子、(下)回転ナ子	粗 中 軟	黄 灰白 5Y7/1	口7/12 底完形	副胎合(口口口)成形	027-06
171	T11-h1 SE8391 a220	陶器 碗	口径 深高	15.8 7.6	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 朝陽 10YR6/1	口3/12 底完形	副胎合(口口口)成形	027-04
172	T11-h1 SE8391 a173	陶器 碗	口径 深高	14.7 7.9	体外:(上)回転ナ子、(下)回転ナ子	密 中 軟	黄 灰白 10YR7/1	口7/12 底完形	灰跡つけかけ(上半) 台: ヨシズ牧動物の屎	027-05
173	T11-h1 SE8391	灰陶器 底委	口径 深高	15.6 7.6	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 灰白 10YR7/1	口6/12 底完形	口: 長陽 台完形、台: やや厚	018-01
174	T11-h1 SE8391 a249	灰陶器 底委	口径 深高	16.3 8.5	体外～内: ロクロナ子	粗 中 軟	黄 灰白 10YR7/1	口6/12 底完形	口外(上半): 長陽 台6/12	014-02
175	T11-h1 SE8391 a28	陶器 碗	口径 深高	14.2 7.5	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 灰黄緑 10YR5/2	口6/12 底完形	副胎合(口口口)成形	027-01
176	T11-h1 SE8391 a29	陶器 碗	口径 深高	14.2 7.4	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 灰黄緑 10YR5/2	口6/12 底完形	胎土: 長石を含む	027-02
177	T11-h1 SE8391	陶器 碗	口径 深高	14.1 7.1	体外～内: ロクロナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 淡黄緑 7.5YR6/4	口10/12 底完形	副胎合(口口口)成形	018-05
178	T11-h1 SE8391 a112	陶器 碗	口径 深高	14.0 7.0	口内～外: 回転ナ子	粗 中 軟	黄 灰黄緑 10YR5/2	口4/12 底完形	胎土: 長石を含む	028-02
179	T11-h1 SE8391 a25	陶器 碗	口径 深高	13.8 7.1	体外～内: 回転ナ子、底外: 糸切り	密 中 軟	黄 朝陽 10YR6/1	口6/12 底完形	胎土: 長石を含む	027-03
180	T11-h1 SE8391	黒色土器 碗	口径	14.1	体外: 刃方(楕円)、内: 刃方(楕圓)	密 中 軟	黒 内: 朝陽 外: 淡黄緑 10YR6/4	口2/12 底完形	底色不明 (黒化)外: 黒色体部上半、内面全面 副胎合(口口口)成形	029-06

第三～12表 第133次調査区出土遺物観察表(5)

№	出土 層様	器種	法 量 (cm)	形状・技法の特徴	胎土	構成	色 調	残存度	備 考	登録№
101	T11-1 SE8391	黒色土器 蓋	口径 径高さ 14.4 7.4 6.5	口:ヨコナデ+足ナキ, 体外:オサエナデ+足ナ キ	粗 粒	良	内:黄緑N3/ 外:浅黄緑10YR6/4	口4/12 弁完整	黒色A類陶 (黒化部:外蓋縁部上, 内面全面)	029-07
102	T11-1 SE8391	黒色土器 甕	口径 径高さ 16.0 7.8 6.6	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナ, (下)足ナ, 7.8内:せんせいの4ナキ	粗 粒	良	内:黄緑N3/ 外:灰白10YR6/2	口2/12 弁4/12	黒色A類陶	019-06
103	T11-1 SE8391	黒色土器 甕	口径 径高さ 14.0 6.2	体外~内:足ナキ	粗 粒	良	黄緑N2/ 0.5~1 0.5~1 0.5~1	口3/12 弁完整	黄色砂質陶 白(内):割突状剥離	019-01
104	T11-1 SE8391	黒色土器 甕	口径 径高さ 14.0 6.4	体外~内:足ナキ	粗 粒	良	黄緑N2/ 0.5~1 0.5~1	口7/12 弁完整	黄色砂質陶	019-03
105	T11-1 SE8391	黒色土器 甕	口径 径高さ 15.2 7.2 6.1	体外~内:足ナキ	粗 粒	良	黄緑N3/ 0.5~1 0.5~1	口8/12 弁完整	黒色砂質陶	026-01
106	T11-1 SE8391	黒色土器 甕	口径 径高さ 15.2 6.1	体外~内:足ナキ	粗 粒	良	黄緑N2/ 0.5~1 0.5~1	口4/12 弁完整	黒色砂質陶 口(内):割突状剥離	019-02
107	T11-1 SE8391	土師器 鉢	口径 径高さ 22.0 12.2 7.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナデ, (下)オ サエナデ+ハケム	粗 粒	良	黄緑7.5YR6/4 0.5~2 0.5~2 0.5~2	口12/12 底完整	紅銅	020-04
108	T11-1 SE8391	土師器 鉢	口径 径高さ 21.0 13.8 7.8	口:ヨコナデ, 外:オサエナデ, 内:ナデ	粗 粒	良	にふい黄緑7.5YR6/4 0.5~4 0.5~4 0.5~4	口4/12 外:残	紅銅 内:炭化物	020-03
109	T11-1 SE8391	土師器 付片鉢	口径 径高さ 22.0	口~内:ヨコナデ, 体外:オサエナデ	粗 粒	良	にふい黄緑7.5YR6/4 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口4/12 外:残		022-01
110	T11-1 SE8391	陶器 甕	口径 径高さ 27.0	口~内:自転ナデ, 体外:自転ナデ(輪脚), 底 9.0(外:木脚)	粗 粒	良	灰白7/0	口3/12 底2/12	灰:炭成面剥孔	047-02
111	T11-1 SE8391	土師器 筒形土器	口径 径高さ 14.0 12.0 3.0	口:ナデ, 体外:ハケム	粗 粒	良	にふい黄緑7.5YR6/4 0.5~4 0.5~4 0.5~4	口10/12 底完整	赤(上):煤, 炭成面剥孔の粘付面	031-01
112	T11-1 SE8391	平瓦		切端:赤目焼 凸面:黄タキメ焼	粗 粒	良	にふい黄緑5YR6/3	切端片	黒炭質の焼成	042-03
113	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 15.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナデ, (下)ケ ズリ, 体内:(上)ハケム, (下)ケズリ	粗 粒	良	にふい黄緑10YR6/4 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口10/12 弁完整	煤	034-02
114	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 17.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナデ, (下)ケ ズリ, 底外:ナデ, 体内:(上)ハケム, (下)ケ ズリ(上:カキナゴ)	粗 粒	良	黄緑10YR6/3 0.5~4 0.5~4 0.5~4	口11/12 底完整	赤(上):煤, 炭成面剥孔の粘付面	033-01
115	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 16.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)ヨサエーハケム, 20.0(下)ケズリ, 底外:ナデ, 体内:(上)ハケム, (中)ナデ, (下)ケズリ	粗 粒	良	灰白10YR6/1 灰黄緑10YR6/2	口3/12 底完整	赤(下):煤 底:炭化物	021-01
116	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 16.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエーハケム, 20.0(下)ケズリ, 底外:ナデ, 体内:(上)ナデ, (中)ケズリ	粗 粒	良	灰黄緑10YR6/2 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口2/12 底完整	赤(下):煤 底:炭化物	021-02
117	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 16.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)ハケム, (下)ケズリ, 16.0(下)ケズリ, 底外:ナデ(一部ケズリ), 体内:ハケム, 底ナ デ(一部ケズリ)	粗 粒	良	にふい黄緑10YR7/4 黄緑10YR6/1 0.5~2 0.5~2 0.5~2	口3/12 底完整	赤(下):煤 内:炭化物	034-01
118	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 24.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)ハケム, (上)オサ エナデ, (下)ケズリ, 内:瓶ナデ	粗 粒	良	灰白10YR6/1 灰黄緑10YR6/2 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口2/12 底完整	内:煤 内:炭化物(薄)	020-01
119	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 24.0	口:ヨコナデ, 体外:ハケム(上:細い, 下:細か 31%), 体内:ハケム, 瓶ナデ	粗 粒	良	黄緑10YR6/4 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口4/12 底完整	内(口~底):煤 内:炭化物	030-01
120	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 27.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナデ, (下)ケ ズリ, 底外:ケズリ, 体内:(上)瓶ナデ, (下) ケズリ, 底内:ケズリ	粗 粒	中 敷	黄緑10YR6/4 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口4/12 底完整		029-01
201	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 29.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナデ+ハケム, 29.0(下)ケズリ, 体内:(上)瓶ナデ, (下)ナデ, 把 持部入	粗 粒	良	黄緑7.5YR6/4 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口4/12 底6/12 底1/12		022-01
202	T11-1 SE8391	土師器 甕	口径 径高さ 28.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)オサエナデ+ハケム, 29.0(下)オサエナデ(掌握), 内:ハケム, 把持部 入	粗 粒	良	黄7.5YR7/6 0.5~1 0.5~1 0.5~1	口6/12 底10/12	底:完全穿孔	022-01
203	T11-1 SE8391	陶器 鉢	口径 径高さ 54.0	口:ヨコナデ, 体外:少ナメ, 体内:(上)ナデ, (下)同心円状で具焼	粗 粒	良	灰白6/0 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口3/12 (3片)		047-01
204	T11-1 SE8391	陶器 甕	口径 径高さ 63.0	口:ヨコナデ, 体外:(上)乱ナデ, (中)半円タ キメ+ナデ, 体内:同心円状で具焼+ナデ	粗 粒	良	灰白7/0 0.5~3 0.5~3 0.5~3	口3/12 底完整		046-01
205	T11-2 SE8391	石製 帯状 石(文形)	幅 厚さ 3.2 0.6	表面:丁寧な研削, 外縁部全面磨り 裏面:中 2.05(中:細い縦溝・柄縁部欠, 縦縁部残)					端部 欠損	004-01
206	T11-1 SE8391	金銅製 筒	長さ 径高さ 1.50 1.20+	1.50(中:細い縦溝・柄縁部欠, 縦縁部残)					外周の一部金箔(金メッキ?)残存	004-03
207	T11-1 SE8391	鉄製片 巻物	長さ 径高さ 18.4 2.8 2.8	断面は網との接合のために折り返し					ほぼ完全 残存	004-02
208	T11-1 SE8391	鉄製片 刀子	長さ 径高さ 4.1						刃部は研ぎ減り	004-05
209	T11-1 SE8391	鉄製片 刀子	長さ 径高さ 9.1						刃部は研ぎ減り	004-04
210	T11-1 SK8395	鉄製片 不明	長さ 径高さ 5.6	先端は扇状に整形					先端を欠損	004-06
211	T10-24 SK8422	鉄製片 釘	長さ 径高さ 7.0	断面扇形					先端を欠損	004-08
212	T10-24 表土	鉄製片 釘	長さ 径高さ 7.1	断面扇形					先端を欠損	004-07
213	T11-2 巻物	鉄製片 釘	長さ 径高さ 9.6	断面扇形					先端を欠損	004-09
214	T11-22 巻物	鉄製片 不明	長さ 径高さ 22.0	断面円形, 文様部は断面方形					先端を欠損	004-10
215	T11-2 巻物	磁石 片	長さ 径高さ 4.1	厚ナデ	粗 粒	良	灰黄2.5Y7/2 0.5~3 0.5~3 0.5~3	先端部 完整	粘着あり	039-07
216	T11-1 SE8391	磁石 片	長さ 径高さ 4.1	研削面7面					磁石製 仕上げ済	042-02
217	T11-1 SK8395	磁石 片	長さ 径高さ 7.0	研削面3面					磁石製 中底か?	042-01
218	T11-1 SE8391	磁石 片	長さ 径高さ 11.0	研削面2面					磁石製 底底か?	042-01

第三-13表 第133次調査区出土遺物観察表(6)



全景 (北上空から)



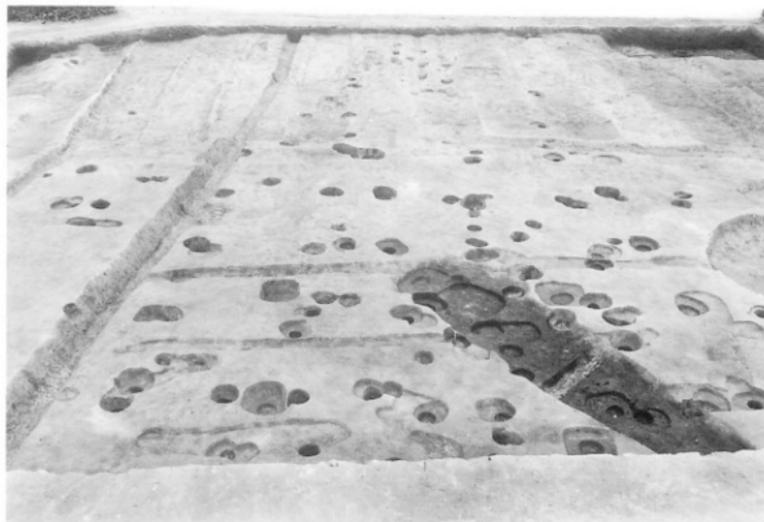
全景 (南上空から)



全景(南から)



全景(垂直写真 左が北)



調査区北部 (西から)



調査区中央部 (北西から)



調査区中央部(南西から)



調査区南部(西から)



調査区西壁土層 (南東から)



調査風景



S D2836 (南から)



S D2836・S K8381・S305・S392 (南から)



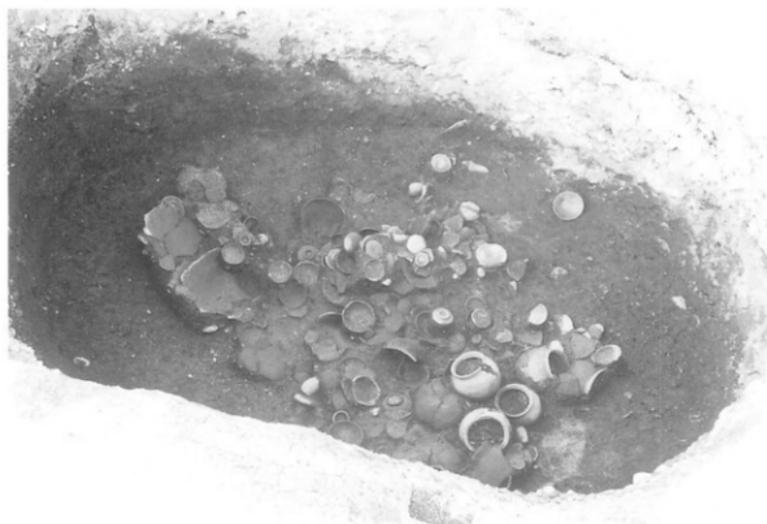
S B8643とSK8395・8416 (南から)



SK8407 (西から)



S E8391 (西から)



S E8391 (南から)







55



67



56



68



58



70



60



71



61



72



65



73



66



74



79



83



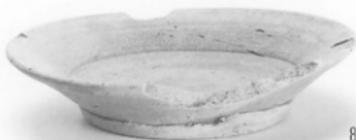
94



85



95



87



96



88



97



89



98



91



99



93



100



101

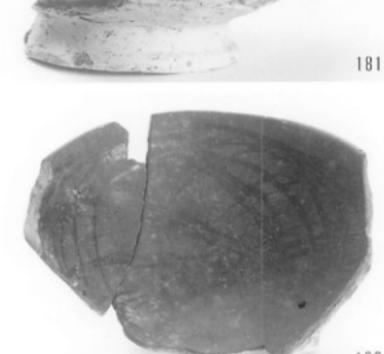
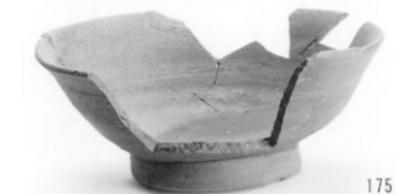






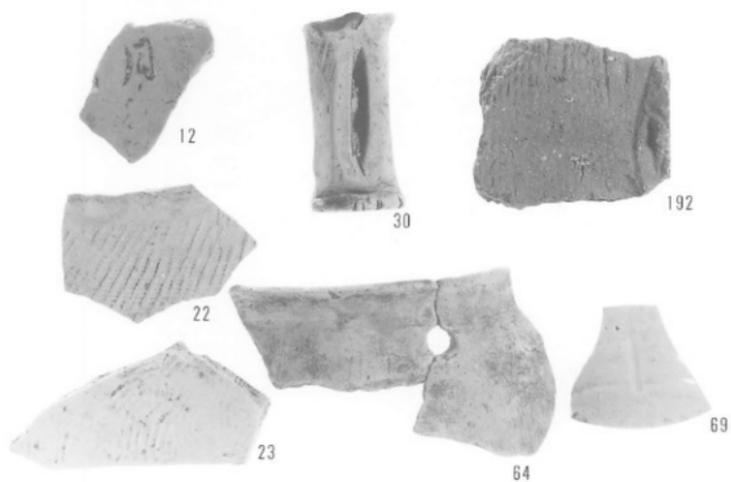




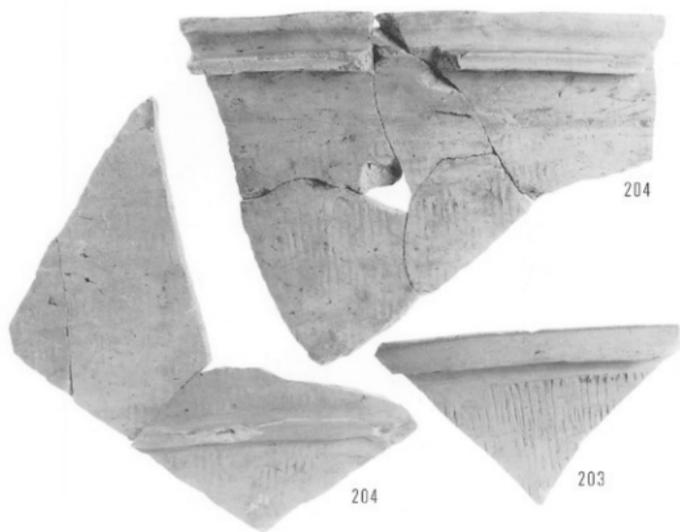




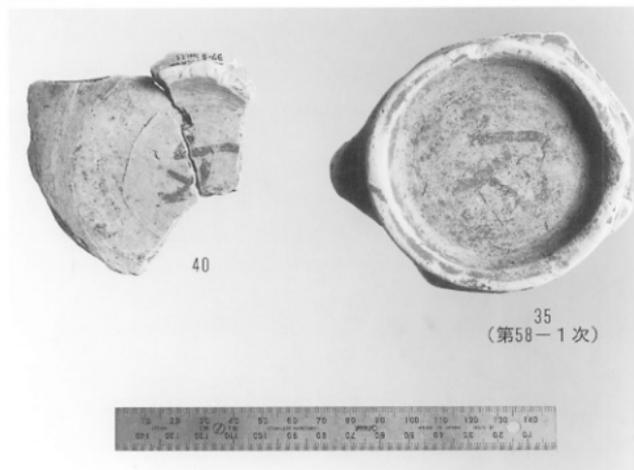




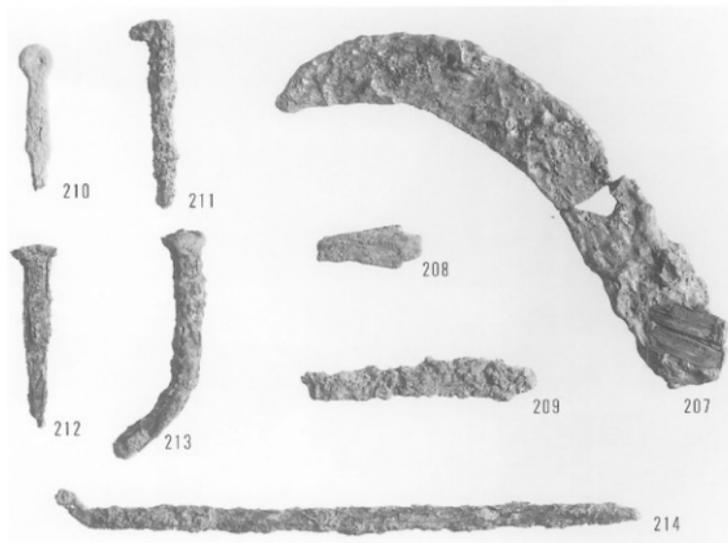
墨書土器、獸足、平瓦ほか



筒形陶器



墨書土器「文」(1:3)



鉄製品

## IV 第135次調査

(6A09・P9 宮ノ前地区)

### 1 調査の契機と経過

#### 調査の経過

第135次調査区は、斎宮跡方格地割の北西隅部にあたる宮ノ前地区に位置する。この区画は、一辺120mを基準とした方形区画で構成され、東西7区画、南北4区画が確認されている斎宮跡方格地割のなかでは、特異な区画であることが判明している。

方格地割の北西隅で、4区画を構成するとみられたこの地区では、第115・127次調査等によって、一辺120mを基準とする方形区画に分割する区画道路・側溝が存在せず、この区画は4区画分の広さをもつ大きな一つの区画として機能していた。



第IV-1図 第135次調査区位置図(1:2,000)

また、区画外周施設は、第113次調査、第116次調査等の結果によれば、他の方形区画が直線的な側溝と道路で方形に区画されていたのと異なり、北辺及び西辺の区画外周は、幅2.8～3.0mの緩く蛇行する道路と両側溝で区画していたことが明らかになっている。しかも、側溝出土遺物から当該側溝は、斎宮第三期第2段階から鎌倉時代に埋没していることも確認されており、区画の成立時期は明確ではないが、方格地割における地割の一部の下限を示すものといえよう。区画の成立時期については、第49次調査、第78次調査、第127次調査の成果からも明らかのように、この区画を西北西から東南東に向けて直線的に横断する道路遺構が確認されており、方格地割成立まで史跡内において敷設されていた律令期初期の官道である伊勢道の存在との関係が注目される。

一方、この区画は、第111次調査報告でも触れたように区画の南西部から中央部を経て北東方向が低く、窪んだ微地形を示している。区画南側の内山地区は標高10.5～11.6m、区画西側は第113次調査区辺りで標高11.3mをピークとして東側に傾斜し、北側の上園・篠林地区では区画外周道路付近で10.2～10.4mとなっているが、区画東側は標高9.7mと低く、標高10.0mの等高線は区画の東側から中央部に向けて大きく入り込み、浅い谷状地形を示している。この区域は、近代瓦粘土の採掘が行なわれた区域で斎宮存続期の遺構が破壊されている区域でもあり、粘土採掘の影響も多少は考えられるが、里道下等で斎宮存続期の遺構が確認されている状況から判断すると、斎宮存続期においても、現地形の状況は似たものであったと推定される。

#### 調査の目的

第135次調査は、こうしたこれまでの調査の経緯と成果を基に、斎宮跡地方拠点史跡整備事業計画における遊水池としての整備を実施するにあたり、遺構の保存状況を確認するために実施したものである。

#### 調査地の現況

調査地は、明和町斎宮字宮ノ前3,122・3,123・3,131・3,132番地内に所在し、既に公有化された町管理の土地であり、旧水田地割は遺しているが、雑種地となっている。

#### 調査期間・面積

調査は、平成14年6月20日に着手し、途中8月4日から10月2日まで他の調査との関係で中断し、10月27日まで実施した。調査面積は1,330㎡であり、遺構図の作成は航空写真測量を株式会社サンヨーに委託して行なった。

## 2 遺 構

調査地区は、東西約26m、南北約50mで旧水田地割に方位を合わせて設定し、中央部に第47次調査のトレンチ調査区を含んでいる。調査地の標高は、10.0mである。

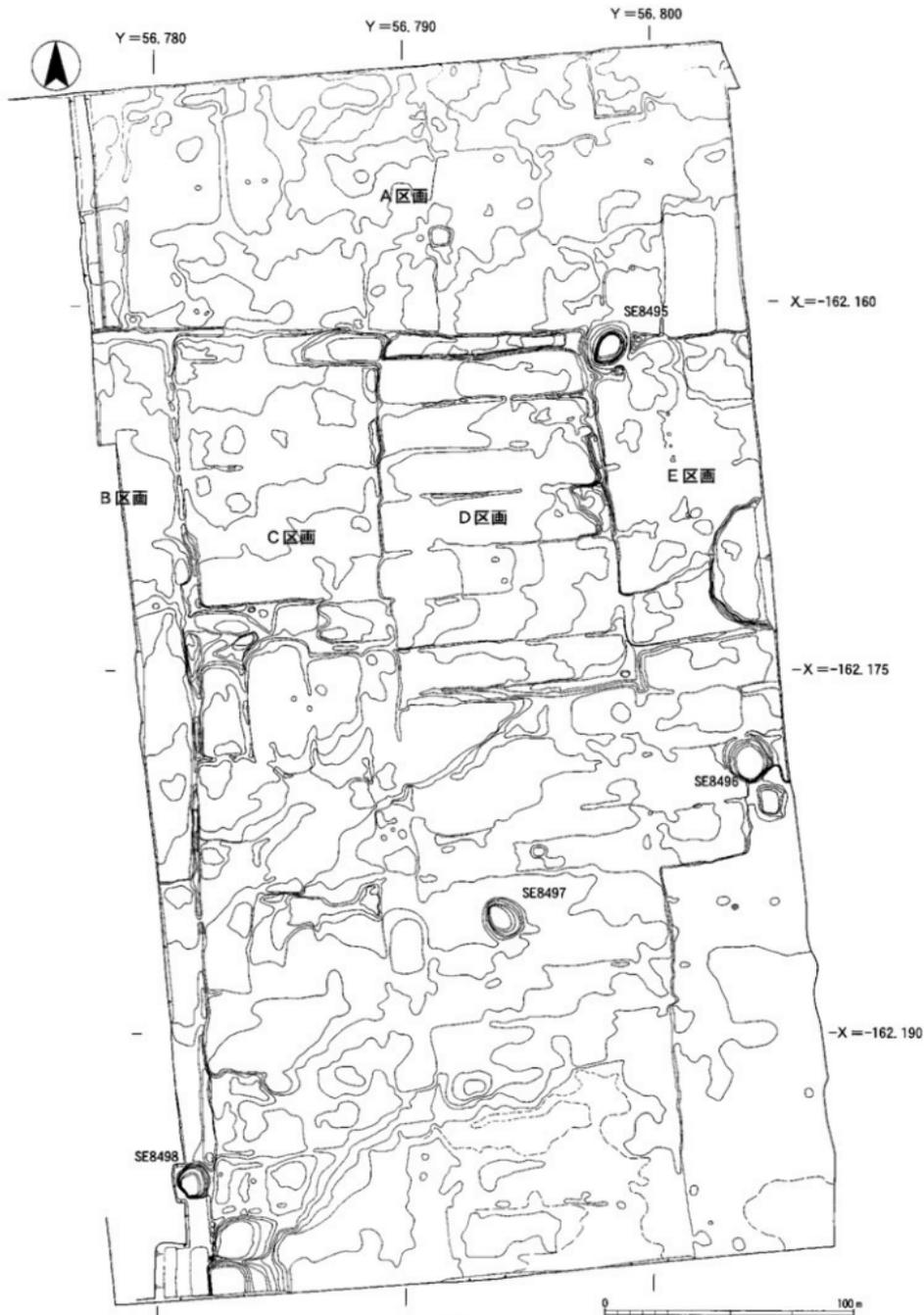
調査の結果、調査区の南東部は、表土直下で淡黄色粘土層の遺構検出面が確認できたが、他の地区では近代の粘土採掘により、斎宮存続期の遺構は鎌倉時代の井戸跡4基以外は、攪乱されていた。

基本的層序は、第Ⅰ層が黒褐色粘質土(表土、旧耕作土)、第Ⅱ層が粘土採掘により掘り返され、浅黄色の粘土ブロックを含む黒褐色粘質土の攪乱層となり、現表土から0.3～0.8mで浅黄色粘土層となる。調査区の南部分では、基盤層である砂礫層が露呈し、微地形として認められる小支谷状の地形が南西から北東に向かって認められる。

#### 鎌倉時代

井戸S E 8495を調査区の北東部で、S E 8496～8498の3基を調査区南部で確認している。

S E 8495は、調査区北東部で検出した井戸であり、確認面で径約2.0mで、深さ1.5



mまで掘り下げて調査を行ったが、確認面から0.3mで周田が、砂礫層となり崩落が著しく、井戸基底部までの調査は断念した。土師器・須恵器片のほか、山茶碗の破片も出土しており、埋没時期は鎌倉時代と考えられる。

S E 8496は、調査区中央部の東端で検出した径約2.6mの井戸であり、深さ2.2mまで掘り下げて調査を行った。土師器・須恵器片とともに山茶碗片も出土しており、埋没時期は鎌倉時代と考えられる。

S E 8497は、調査区中央部の南寄りで検出した径約3.0mの井戸であり、深さ1.6mまで掘り下げて調査を行った。土師器・須恵器片のほか、山茶碗片や中世陶磁器を含まないことから埋没時期は、やや古い可能性もある。

S E 8498は、調査区の南西隅部で検出した径約2.7mの井戸であり、深さ1.3mまで掘り下げて調査を行った。土師器・須恵器片以外の出土遺物が確認されず、完掘していないので即断できないが、時期は平安時代の中に収まる可能性もある。

S E 8496～S E 8498は、調査区南寄り以北西端から北東方向に並んで閉塞されており、厳密な閉塞時期は決め難いが、この部分は井戸の並びの方向に幅13mで、深さ0.3～0.4m(溝底の標高約9.3m)の自然流路となっており、砂礫層が露呈している地区でもあり、このような地形的な要素が地下水の流れと一致し、井戸が開塞されたものと考えられる。

この調査区南端では、表土直下の標高9.8m前後で砂礫層が露呈している状況であり、自然流路の痕跡を遺しており、明確な遺構は確認されない。ただ、調査区南東部の一面では、標高9.8mの地盤で安定した遺構確認面が存在するがわずかに数か所までピットを確認したのみである。

## 近 代

一方、調査区中央部から北側では、整然とした粘土採掘の区画痕跡が確認された。粘土採掘は、調査区南東部でピットがわずかに確認された以外のすべての地区で行なわれており、調査区南部の砂礫層が露呈する地区でも、採掘の痕跡を遺している。しかし、当然のことではあるが、砂礫層が露頭している地区では採掘痕跡は浅い。中央部での採掘の深さは、確認面から約0.3mである。

粘土採掘の区画は、現存する耕作地地割と同じ区画を示しており、区画に従って採掘が行なわれたことを示している。区画は、全部でA～E区画の5区画が認められ、一番北側のA区画は調査区外にも広がっているが、南側にBからE区画との地境となる小径に対して直交するように南北方向に幅約2mで採掘が行われている。

B～E区画は、南北方向に細長い区画でありB区画及びE区画は、それぞれ調査区外に広がり、ほぼ全容がわかるのはC区画及びD区画である。

C区画は、東西幅約9mで、南北に約38.4m以上の広さをもつ区画である。採掘は、区画の長辺となる南北方向の畦畔に直交するように、東西方向に幅1.8～2.0mで採掘されている。

D区画は、東西幅約9mと推定されるが、南側で幅広く認められるのは、畦畔の保存状況によるものと思われる。この区画もC区画と同様に、南北方向の畦畔に直交して、幅約1.8～2.0mで採掘されている。

E区画は、東側が調査区外に広がっており、S E 8496以南ではピットが確認された地区であり、採掘はこの地区までは及んでいない。

### 3 遺物

出土遺物は、整理箱で35箱が出土しているが、遺物は井戸から出土したもの以外は粘土採掘により攪乱されており、原位置をとどめるものは無い。遺物には、奈良時代から鎌倉時代の各種の土器類がある。

#### 奈良時代

土師器・須恵器がある。土師器には杯A・高杯A・椀A・鍋B・甕等があり、須恵器には、杯A・壺B・壺K・平瓶・甕Aのほか、碗の破片等が出土している。

#### 土師器

杯A(1)は、口径18.2cm・器高4.0cmで、緩く内湾して開く口縁部は端部が内傾する面をもつ。底部外面をヘラケズリし、口縁部外面をナデ調整するb手法による。内面は剥離しており、器面調整は不明である。斎宮第Ⅱ期第3段階に属する。

椀A(2・3)は、2が口径17.4cm・器高5.4cmで径高指数31のやや深めの形態を示す。底部外面をヘラケズリ、口縁部外面を密にヘラミガキし、内面は底部に螺旋状暗文、口縁部に斜格子状暗文を施す。口縁部外面に「にすい」か「さんずい」偏の漢字による墨書が認められる。3は、口径18.0cm・器高4.2cmで径高指数23である。丸みをもつ底部と内湾気味に開く口縁部の境は、わずかに肥厚して段状となる。底部外面はユビオサエで口縁部をヨコナデ調整するe手法である。底部内面に螺旋状暗文、口縁部内面に、斜放射状暗文を施す。ともに、斎宮第Ⅱ期第3段階に属するが、3が後出の要素をもつ。

高杯A(4)は、脚部のみ出土であり、脚端部径10.9cm・脚高4.7cmで、端部は外傾する面をもつ。脚部外面は縦方向にヘラケズリで面取りを行う。杯部内面は、ヘラミガキ調整する。脚部内面に、「十」字状の墨書が認められる。斎宮第Ⅰ期第3段階。

鍋B(5)は、推定口径40cmで、焼ひずみが多い。口頭部は直立し、口縁部が大きく斜め外方に引き出され、端部が肥厚して、外傾する面をもつ。内面は、イタナデ調整し、口頭部上部のみヨコハケを施す。外面は、粗いタテハケ調整する。

甕(6)は、口径23.8cm・器高23.3cm以上で比較的小形のものである。体部は、器壁が約1.0cmで、裳衣状に広がる。内面は、縦方向を基本としたイタナデで器壁調整を行い、口縁部のみ横方向にヘラケズリする。外面は、縦方向にハケ調整する。把手は、左右一対のものを器壁に挿入して取り付ける。

#### 須恵器

杯A(7)は、口径14.2cm、器高3.5cmで、わずかに内湾して外開する体部は口縁部が外反する。底部は、平らでヘラケズリし、体部及び口縁部はヨコナデ調整する。

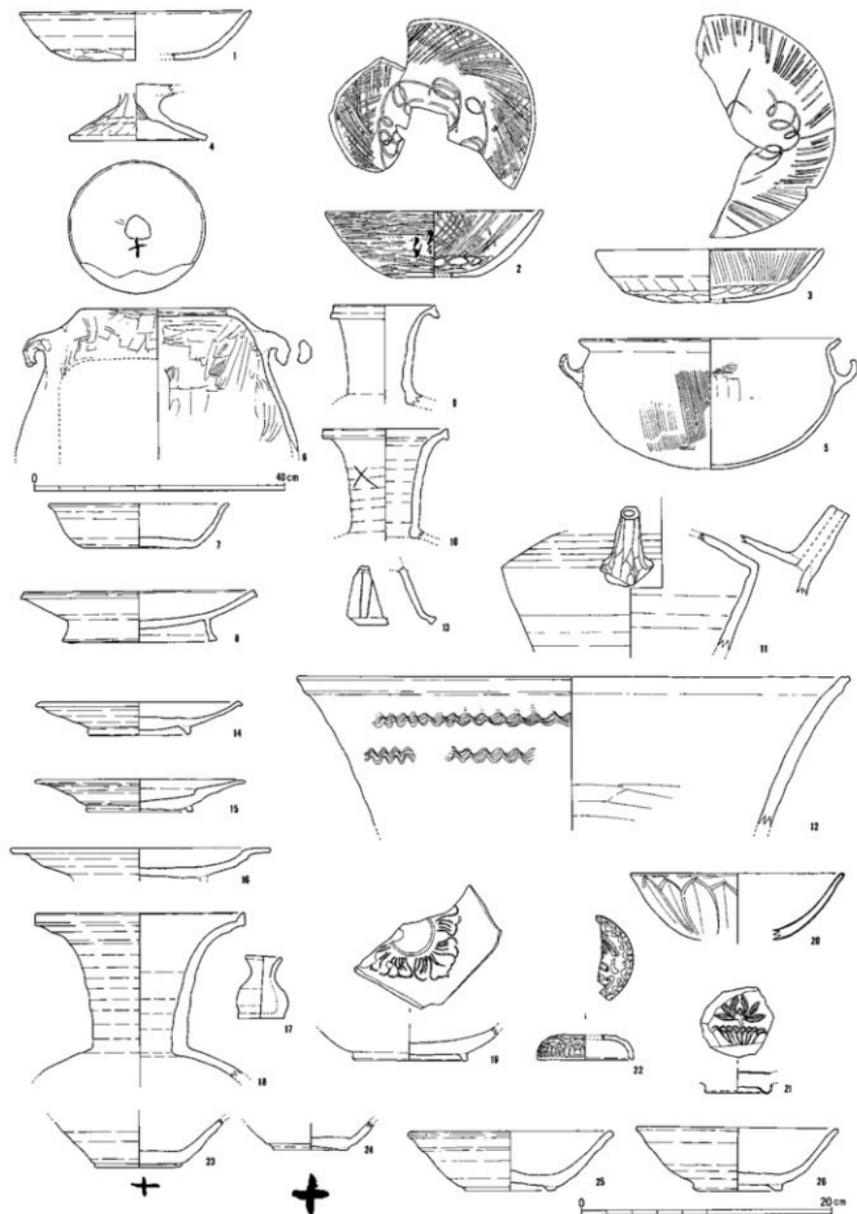
壺B(8)は、口径18.2cm、器高4.1cmで、大きく弯曲する杯部は均一な器壁となり、口縁端部は外面に面をもつ。径11.6cm、高さ1.8cmの高く大きな高台がつけられる。

壺Kの口頭部(9・10)である。9は口径8.0cm・頸部高7.2cm、10は口径10.0cm・頸部高8.0cmで、頸部にヘラ記号「×」を刻む。

平瓶(11)は、肩部径20.4cmで、頸部と体部の境に長さ4.8cmの注口部を南上方に向けて貼り付ける。体部下半及び頸部を回転ヘラケズリし、体部上半はヨコナデ調整する。注口部は、ヘラケズリで面取り風に仕上げ、穿孔は注口部先端から穿っている。

甕A(12)は、推定口径43.6cmで、口頭部は緩く外反して、口縁端部は外面と上方に面をもつ。頸部には、2段の波状文を施す。頸部の上方と下部は、ヘラ状工具でオサエる。

碗(13)は、脚部の破片で口径は不明。脚部には縦方向のヘラ描きの直線を施し、透



第IV-3図 第135次調査区出土遺物実測図(5・6は1:8, 他は1:4)

孔を表現している。

#### 灰釉陶器

皿・段皿・盤・瓶・小瓶等が出土している。

皿(14)は、口径16.4cm、器高2.7cmで、器壁の厚い底部から体部及び口縁部は薄く引き出される。口縁部端部は、外方へ引き出され外上方に面をもつ。高台は、断面逆台形で、外側は垂直に立つ。高台内面は、ヘラケズリする。口縁部及び体部内面には、緑灰色の釉がかかる。

段皿(15)は、口径16.7cm、器高2.6cmで、高台径8.4cmの低い高台が体部先端部近くに貼り付けられる。体部は直線的に開き、内面中央部で大きな段をつける。口縁部端部は、わずかに外反し、端部は丸くおさめられる。体部下半と高台内面をヘラケズリする。

盤(16)は、口径20.2cmで、内湾して開く体部に口縁部が大きく水平に引き出され、体部と底部の境に高台が貼り付けられる。高台は、剥離して痕跡をとどめるのみである。体部及び底部の外側はヘラケズリし、内面はオリーブ灰色の釉がかかる。

小瓶(17)は、口径2.9cm、器高5.1cmの手づくねの製品である。撫肩の体部に緩く外半する口頭が開き、底部外面に糸切痕を残し、外面にはオリーブ灰色の釉がかかる。

瓶(18)は、口径19.4cmの大形の製品で、口頭部は、外反しながら開き、口縁端部は、上方に引き出され、外側に面をもつ。体部は丸く、球形となるものと考えられる。

#### 緑釉陶器

緑釉陶器は、31点が出土しているが、図示できるものは少ない。椀(19)は、底部のみの破片であり、高台径9.2cmで、断面形が方形でほぼ直立する。底部内面には、印刻花文を配する。

#### 青磁・白磁

青磁椀(20)は、推定口径16.8cmで、口縁部は大きく内湾して開き、口縁端部は丸くおさめられる。外面には、太目の鐮蓮弁文を配する。龍泉窯系の製品である。

青磁椀(21)は、底部のみの破片であり、高台径5.2cmの低い高台がつく。内面には、スタンプによる花文を施す。

青白磁(22)は、合子の蓋で、口径2.0cm、器高2.0cmである。口縁部は、緩く内湾して、垂下し、口縁端部は内傾する面をもつ。天井部の中央を欠くが、口縁部外面には、草花文を現す。

#### 山茶碗

山茶碗は、破片を含めると相当数の出土がある。緩く内湾する体部にわずかに外反する口縁部が開く26、口縁部が直線的に開く25等がある。ともに断面が逆台形の低い高台が貼り付けられる。底部外面に「十」あるいは「×」と認められる墨書をもつもの(23・24)もある。

## 4 まとめ

第135次調査区は、これまでの調査成果から近代における瓦粘土採掘により、遺構が損なわれていると推定されていた地区である。調査の結果は、想定された状況が裏付けられ、斎宮存続期の遺構は4基の井戸とわずかなピットのみの検出となった。しかしながら、新しい事実も確認することができた。

粘土採掘の状況を面的に調査した事例には、本調査と第42次調査があり、両者の成果から粘土採掘の具体的な様相を明らかにすることができた。採掘は、北から西に4～6度振った地割を基準として行なわれ、この方向は方格地割の基準軸N4°Wと近





第Ⅳ-4图 史跡斎宮跡地内井戸分布图 (1:5,000)





似する。採掘は、幅約2mを単位として計画的に行なわれているが、採掘の順序については、明確ではない。

今回の調査で、4基の井戸を確認したが、斎宮跡ではこれまで180基以上の井戸を確認しており、斎宮跡の井戸の分布、時期、構造等について整理を行なっておきたい。

## 分布と時期

斎宮跡における井戸の確認状況は、調査の偏在性に左右されるが、史跡内のほぼ全域で確認されている。また、時期的な変遷から考えてみると、斎宮第Ⅰ期14基、斎宮第Ⅱ期36基、斎宮第Ⅲ期31基、鎌倉期64基、室町期以降19基、その他20基となり、鎌倉期以降が83基(約45%)と約半数を占めている。鎌倉期の井戸は史跡全域で確認されているが、史跡西部の古里地区での分布密度が高く、次いで史跡中央部や北部等の方格地割外での確認が特徴的である。斎宮第Ⅰ・Ⅱ期の井戸は、史跡東部に偏在し、斎宮第Ⅲ期では史跡全体に分散していることが窺える。

斎宮第Ⅰ期では、第1段階にあたる飛鳥時代及び第2段階の奈良時代前期に確定できる検出例はなく、第3段階になってS E 1800,3910,4155,4665,5672,6480が確認される。第4段階の方格地割造営期にあたる奈良時代後期では、S E 3200,4118,4401,4549,4580,7920が確認されており、方格地割内の史跡東部に分布が顕著となる。この傾向は、次の第Ⅱ期を通じて認められるが、第Ⅲ段階になると史跡中央部へも分散してくる。このことは、第4段階で造営された方格地割と内院等の中核部での建物変遷も第Ⅱ期第4段階以降不明瞭になることとも密接に関係していることを示唆している。

## 構造

井戸の構造については、斎宮跡では段丘上の乾燥した立地に影響され、木製品等の遺存状態が極めて悪く、井戸枠等の痕跡を確認できないことが一般的であり、概報での報告も素掘り井戸と報告される事例が多いが、必ずしも実態を示しているとは言い難い。斎宮跡では、遺構検出面の粘土層の下部には段丘の基盤層となっている砂礫層が堆積しており、粘土層の厚さは1m以内であり、調査においても粘土層下の砂礫層では崩落が認められ、調査も安全性と周辺遺構の保存のため完掘できない状況にある。井戸開鑿時においても井戸枠を設置しない使用は想定し難く、少なくとも井戸掘形の大きな井戸は、第Ⅳ-5図に示したように井戸枠の痕跡をとどめるものと理解されよう。

井戸の構造的分類は、宇野隆夫氏の分類<sup>(1)</sup>に従って行い、素掘り井戸AⅠ類については再検討を要するため(AⅠ類)とした。斎宮跡で井戸枠が明らかにされた事例はS E 3260の丸太割抜き井戸BⅠ類、SE4250の縦板組の井戸枠とS E 7920(第Ⅳ-5図)に代表される方形板組井戸S E 3134,4155,4250,5880,6240等が少数であるが確認される。これらの井戸の時期は斎宮第Ⅰ期~Ⅲ期に属する。斎宮跡第Ⅲ期第4段階頃からは、S E 2460,4050,5880,6605等から曲物の破片が出土しており、井戸枠に曲物が用いられたことが窺われる。また、S E 5880では、方形板組の井戸枠と曲物がともに出土しており両者の併用も認められる。なお、井戸の完掘事例から斎宮跡での帯水層は、標高4.1~5.7mにあったことが知られ、現地表面からの深さは3.5~4.8mである。

(駒田利治)

### <註>

- (1) 宇野隆夫「井戸考」(『史林』第55巻5号 1982年)井戸の分類は同論文により、AⅠ類:素掘り、BⅡ類:丸太割抜き、BⅡa類:縦組無支持、BⅡb類:縦組有支持、BⅢ類:縦組横板組、BⅣ類:縦組隅柱横板組、BⅤa類:横板組隅柱、BⅤb類:横板組隅柱どめ、BⅥ類:横板井籠組、BⅦ類:縦板組ホソどめ、BⅧ類:曲物横上げ、BⅨ類:桶横上げ、CⅠ類:石組円筒形、CⅡ類:石組すり鉢形、CⅢ類:石組袋状、CⅣ類:切石組、DⅠ類:瓦組、DⅡ類:土器組、DⅢ類:土管組、DⅣ類:埴組、DⅤ類:漆喰組としている。

遺構番号	遺構の性格	次数	調査実施年	地区	グリッド	時期	発掘番号	遺構の性格・遺物・その他
SEB491	井戸	135	井戸1	P9		鎌倉		
SEB492	井戸	135	井戸2	O9		鎌倉		
SEB493	井戸	135	井戸3	O9		鎌倉		
SEB494	井戸	135	井戸4	O9		鎌倉		

第IV-3表 第135次調査区遺構一覧

順	出土遺構	層位	深さ (cm)	調査・技法の特徴	粘土	炭灰	色 調	残存度	備 考	登録地
1	09-118 包倉跡	土師器 杯A	口径 器高	18.2 4.6	口～体外:3コナデ、蓋外:オサエナデ、 4内:割縁	やや密	黄5YR6/8	口4/5		001-06
2	09-119 包倉跡	土師器 鉢A	口径 器高	17.4 5.4	外:3コナデ、内:ナデ+割縁	密	黄2.5YR6/8	口1/2	粘土・石質・長石を含む 体外:割縁	003-01
3	09-118 包倉跡	土師器 鉢A	口径 器高	18.0 4.6	体外:ロクロナデ、蓋外:未調査、内:割縁	やや密	黄5YR7/8 断面:黄5YR6/8	1/2		008-02
4	09-216 包倉跡	土師器 高杯F	口径 器高	16.0 10.0	脚外:ケズリ、裾外:ヘラケズリ、蓋内:丸 弁	密 0.5～2 割縁	黄1 明赤黄5YR5/6	密3/5	裾外:割縁 粘土・炭灰・長石を含む	005-91
5	09-118 包倉跡	土師器 高杯F	口径 器高	40.0 18.0	口内:3コナデ、体外:ハケム、口内:割縁 ナデ、ハケム、体内:板ナデ	密 0.5～2 割縁	黄1 内外:灰白7.5YR7/4 断面:黄5YR6/3	口1/5	内(下):煤	009-01
6	09-220 包倉跡	土師器 方斗	口径 器高	23.0 10.0	外:ハケム、内:ハケム+楕円ナデ、把手: ユビナデ	密 0.5～2 割縁	黄 黄黄緑10YR8/3 に灰白黄5YR5/4	口5/12	部分割縁:割縁あり	011-01
7	09-220 包倉跡	須恵器 鉢A	口径 器高	14.2 3.9	体外～体内:ロクロナデ、蓋外:ヘラケズ リ、内内:ロクロナデ後3コナデ	密 ～1cm 長石	黄1 内外:灰白/断面:灰白4/	口1/8		008-01
8	09-118 包倉跡	須恵器 鉢B	口径 器高	18.2 4.1	体外～体内:割縁ナデ、蓋外:割縁ケ ズリ、蓋内:ナデ	粗	灰白B/2	2/3		007-02
9	09-220 包倉跡	須恵器 盆A	口径 器高	8.0 10.0	割縁ナデ	密 1～3mm 長石	黄1 外:暗赤黄5YR3/2 内:灰白2.5GY5/1 断面:灰白4/	密→口 9/10	内外:割縁	007-03
10	09-118 包倉跡	須恵器 盆A	口径 器高	10.0 10.0	割縁ナデ	密 ～1cm 黒石	黄1 内外:灰白7.5YR7/1 断面:灰白2.5Y7/1	密のみ 割縁	内、ヘラ割縁 裾:(外)灰白7.5Y5/3に灰白黄 10YR5/4(内)灰白7.5Y5/1	010-01
11	09- ト-118 包倉跡	須恵器 平鉢	最大径	20.0	体外:(上)ロクロケズリ、(中)ロクロナデ、 (下)ロクロケズリ、体内:ロクロナデ、注 口:ケズリ	密 2～5mm 割縁	黄1 内外:灰白6/5 内:灰白7.5Y7/1 断面:灰白2.5Y7/1	割→灰 1/4		004-01
12	09-221 包倉跡	須恵器 鉢A	口径 器高	43.0 10.0	口:ヘラケズリ、体外:ロクロナデ+波状 文(部分割縁にヘラオサエ)、体内:(上)ロ クロナデ、(下)ナデ	密 ～2mm 長石	灰白2.5Y7/1	1/8	粘土・長石・石を含む	006-01
13	09-115 包倉跡	須恵器 内面割	-	-	ヘラケズリ	密	黄灰2.5Y6/1	小片		013-01
14	09-117 包倉跡	灰輪陶器 鉢	口径 器高	18.4 2.7	体外～内:ロクロナデ、蓋外:ケズリ	密 1mm石 粒を含む	灰白6/5 黄1 黄緑灰10GY6/1	密1/2 口1/6	内:自然割	012-01
15	09-114 包倉跡	灰輪陶器 鉢A	口径 器高	18.0 2.4	口～体外:(上)割縁ナデ、(下)ケズリ、蓋 2外:ケズリ後ナデ	密 0.5～1 割縁	灰白6/5 黄1 黄緑灰2.5Y7/1	口1/10	粘土・石質・長石を含む	001-02
16	09-220 包倉跡	灰輪陶器 鉢	口径 器高	20.2 ケズリ	ケズリ	密 2mm 小石	黄1 内:灰白7.5Y7/1 内:灰白2.5GY5/1	口1/7	内:反輪ハケ塗り	012-04
17	09-113 包倉跡	須恵器 盆A	口径 器高	2.8 5.1	口～体外:割縁ナデ、蓋外:糸切り割	密	灰白7.5Y7/1	割縁		001-03
18	09-222 包倉跡	灰輪陶器 盆	口径 器高	19.4 ロクロナデ	ロクロナデ	密 1mm石 粒	黄1 内:外:(口～脚) 灰白N7/ 外:(蓋) 明赤灰白 7.5GY7/1	口1/6		012-05
19	09-113 包倉跡	緑釉陶器 鉢	高さ径	9.2 内:繻帯花文、貼付高台	緑釉施 自然割	軟	内外:黄やか心黄緑 断面:灰白10YR7/1	密→体 2/5	口口成面、縁かけ 内外:光沢あり 断面の一部:に灰白黄緑10YR7/4	002-03
20	09-223 包倉跡	青磁 鉢	口径 器高	16.0 1.8	体外:繻帯花文	密 ～1mm 白黒粒	黄1 内外:黄青 断面:灰白8/0	口1/8	継ぎ足	002-01
21	09-225 包倉跡	青磁 高台鉢	高さ径	5.2 内:スタンプによる繻帯花文、前出し黒 石	密	密	内外:緑灰1.5GY6/1 断面:灰白8/0	密→体 5/10	断面黒石 蓋外のみ割縁	002-02
22	09-222 包倉跡	青磁 高台鉢	口径 器高	7.6 外:繻帯の裏返し、内:ロクロナデ	1～2mm 黒石	密	内:に灰白黄7.5YR7/4 裾:波縁～乳白	口→体 1/3		002-04
23	09-223 包倉跡	須恵器 (山形破)	高さ径	6.8 口～体外:ロクロナデ、蓋外:糸切り割	やや粗 0.5mm 粒の粒	黄1 灰白2.5Y7/1	密1/2	粘土・石質・長石を含む 蓋外:割縁 外底全体:割縁施	001-05	
24	09-119 包倉跡	須恵器 (山形破)	高さ径	5.9 体外～内:ロクロナデ、蓋外:糸切り割	やや粗 0.5mm 粒を含む	黄1 灰白2.5Y7/1	密2/3	粘土・石質・黒石・炭灰を含む 蓋外:割縁 外底全体:割縁施	001-01	
25	09-223 包倉跡	須恵器 (山形破)	口径 器高	16.4 4.9	体外～内:ロクロナデ、蓋外:糸切り割	粗	灰白2.5Y7/1	口1/8	内:黄緑	001-04
26	09-114 包倉跡	須恵器 (山形破)	口径 器高	16.0 5.3	体外～体内:ロクロナデ、蓋外:糸切り割	密	灰白N7/	密5/6 口1/8		012-02

第IV-4表 第135次調査区出土遺物観察表



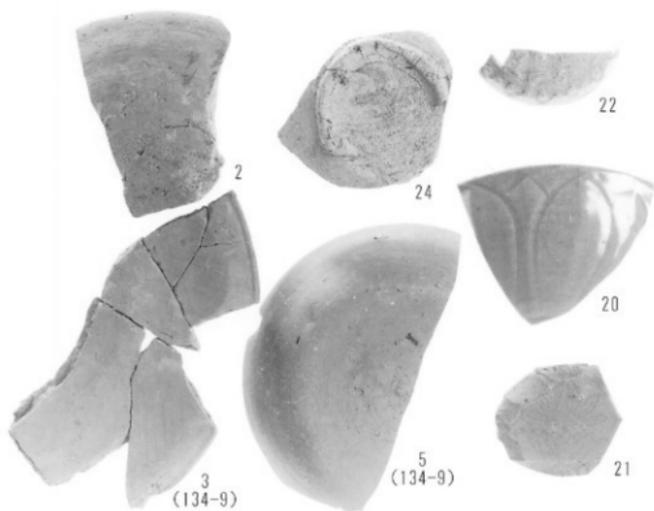
垂直写真(上が西)



全景(北から)



近景 (北西から)



出土遺物 (第134-9次調査区出土遺物を含む)

# 付録 齋宮跡発掘調査次数一覧

次数	年度	調査地区	次数	年度	調査地区
1	S45	試掘	13-11	51	西加座2681-1 (浮田) # 2721-3, 2724-2 (森川)
2	46	古里A地区	13-12	51	東前沖2506-2 (宮下)
3		# B地区			
4	47	# C地区	14-1	52	2 E トレンチ
5	48	# D地区	14-2	2 F トレンチ	
6-1		A トレンチ	14-3	2 G トレンチ	
6-2		B トレンチ	14-4	2 H トレンチ	
6-3		C トレンチ	14-5	2 I トレンチ	
6-4		D トレンチ	15	齋宮小学校	
6-5		E トレンチ	16-1	竹川町道A	
7	49	古里E地区	16-2	# B	
8-1		F トレンチ	16-3	# C	
8-2		G トレンチ	16-4	# D	
8-3		H トレンチ	16-5	# E	
8-4		I トレンチ	16-6	# F	
8-5		J トレンチ	17-1	竹神社社務所	
8-6		K トレンチ	17-2	竹神社防火用水	
8-7		L トレンチ	17-3	西加座2721-6 (西沢)	
8-8		M トレンチ	17-4	楽 殿2894-1 (中川)	
8-9		N トレンチ	17-5	# 2895-1 (西口)	
8-10		O トレンチ	17-6	出在家3237-3 (吉川)	
8-11		P トレンチ	17-7	# 3237-1 (里中)	
9-1	50	Q トレンチ	17-8	楽 殿2894-1 (西村)	
9-2		R トレンチ	17-9	東海造機	
9-3		S トレンチ	18	53	6AEL-E・I (下園)
9-4		T トレンチ	19	6AEN-M (御鉾)	
9-5		U トレンチ	20	6AEO-I・J (柳原)	
9-6		V トレンチ	21-1	6AGN-B (鍛冶山、北山)	
9-7		W トレンチ	21-2	6AEI-D (西加座2711-2/ほか、山路)	
9-8		X トレンチ	21-3	6AFD-D (西前沖2649-1, 大西)	
9-9		Y トレンチ	21-4	6AFH-F (西加座2678, 2679-3, 森下)	
9-10		Z トレンチ	21-5	6AGD-K (東前沖、渡辺)	
10		広城園道路	21-6	6ACA-T (吉里3269-2, 中西)	
11-1	西加座2661-1 (山中)	21-7	6AFE-F (東前沖2631-1, 鈴木)		
11-2	# 2681-1 (山名)	21-8	6AEG-A (楽殿2909-3, 大西)		
11-3	東前沖2483-2 (前田)	21-9	6AED-R (篠林3218-3, 宇田)		
11-4	下 園2926-9 (吉木)	22-1	6AGU		
		22-2	6AGU		
		22-3	6AGW		
12-1	51	2 A トレンチ	23	54	6AEL-B (下園)
12-2		2 B トレンチ	24	6AGF-D (西加座)	
12-3		2 C トレンチ	25-1	6ADP-K (牛薬3029-1, 三重土地ホ一ム)	
12-4		2 D トレンチ	25-2	6ACA-Y (吉里3270, 脇田)	
13-1		東加座2436-7 (浜口)	25-3	6ADD-F (篠林3139-3, 池田)	
13-2		# 2436-4 (中村)	25-4	6AER-H (牛薬3014, 牛薬公民館)	
13-3		古 里3283 (村上)	25-5	6AGN-H (鍛冶山2392, 丸山)	
13-4		楽 殿2916~2917 (松井)	25-6	6AFH-A (西加座2675-5, 谷口)	
13-5		御 館2974-1 (川本)	25-7	6AEK-V (下園2926-10, 奥田)	
13-6		中垣内375-1 (南)	25-8	6AFC-D (西前沖2064-5, 山本)	
13-7		東 裏328 (小川)	25-9	6ACN-C (広頭3387-1, 北出)	
13-8		西加座2771-1 (細井)	25-10	6AEV-A (鈴池339-1, 永島)	
13-9		# 2773 (細井)	25-11	6ACF-B (東裏364-1, 沢)	
13-10		東 裏362-1 (児島)	25-12	6AEE-Y (楽殿2892-3, 山本)	
		25-13	6AEJ-E (西加座2766-1, 山内)		

次数	年度	調査地区	次数	年度	調査地区
26-1	54	6AFR (中西)	48-1	58	6AGM-M (広頭3385、斎宮小)
26-2		6AEX~6ACQ (鈴池、木葉山、南裏)	48-2		6ADP-Q (牛葉3033-1・2、吉田)
26-3		6AEV・W・X (鈴池)	48-3		6ABL-M (中垣内434-6、西川)
26-4		6ACR (木葉山、南裏)	48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
27		6ACG-S・T (東裏)	48-5		6AGD~6AFE (東前沖、町道側溝)
28		6AED-D (柳原)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	48-7		6ADT-H (木葉山307、森西)
			48-8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
			48-9		6AEV-J (鈴池341-1、乾)
30	55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	48-10	6AGT (牛葉、町道側溝)	
31-1		6AD0-M (内山3038-13、岩見)	48-11	6ADP-E (鍛冶山2351-1、2352-1、榎原)	
31-2		6ACP-I (南裏227-2、鈴木)	48-12	6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)	
31-3		6ABD-A (古里588-4、北載)	48-13	6ACM-C (東裏、斎宮小)	
31-4		6ADQ-T (牛葉3018-2、百五銀行)	48-14	6AET (牛葉、町道側溝)	
31-5		6ACC-G (塚山3338-3、水谷)	49	6ADI-D-U-V-W-X (上園3083、他)	
31-6		6AB0-X (古里576-1、池田)	50	6ACH-H (東裏294、297、山本)	
31-7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	51	6AFF-D (西加座2663-1・4、2664、森下)	
31-8		6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)	52	6AGF-D (西加座2703、他)	
31-9		6AGD-L (北野2487-1、中川)	53-1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)
31-10		6ADM-0 (内山3043-3、斎宮駅)	53-2		6ACA-M (古里3280-2、中西)
31-11		6ADT-I (木葉山304-2、澄野)	53-3		6ABE (古里573-2、永納)
31-12		6ADT-J (木葉山304-7、宇田)	53-4		6ADL-S (東裏271-1、田所)
32		6ACE-D・E・F (塚山)	53-5		6ACR (木葉山97-5、田中)
33		6ADE-C・D他 (森林)	53-6		6AGO (鍛冶山、町道側溝)
34		6ADE-F・G・H (西加座)	53-7		6ADD-U (森林3147-3、野呂)
35		6APE他 (西前沖)	53-8		6AGE-0 (東前沖2470-2、上田)
		53-9	6ACS-0 (木葉山95-2、浅尾)		
		53-10	6ACA-R (古里3267-1、西川)		
		53-11	6ADR-W (木葉山131-7、西村)		
		53-12	6ABL-K (中垣内464-2、沢)		
		53-13	6ADQ-L (牛葉3022、辻)		
		53-14	6ACM-0 (東裏287-3、体育館)		
		53-15	6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)		
		54	6AFE-N (西前沖2630、他)		
		55	6AEN-P (柳原、御館2785-1、他)		
		56	6ACH-S (東裏289-1、他)		
		57	6AGF-H・I (東加座2441、他)		
		58-1	60	6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	
		58-2		6AFH-N (西加座2681-1、三村)	
		58-3		6ACM-N (東裏3385-2、斎宮小)	
		58-4		6ABL-A (中垣内4731-1、小家)	
		58-5		6ADQ-Q (牛葉、町道側溝)	
		58-6		6ADR-V (木葉山1131-3、西山)	
		58-7		6AGS-G (中西611、山路)	
		58-8		6ABM-A (中垣内430-3他、近鉄)	
		59		6ACJ-I (広頭3379-1、他)	
		60		6AGJ-B・D・G (東加座2450-1、他)	
		61		6AFF-H・I・D (西加座2663-1、他)	
		62		6AGI-J・K (東加座2425、他)	
		63		6AFG-M・N (西加座2659-1、他)	
		64-1		61	6ACO-H (牛葉3395-1、トーカイ)
		64-2			6AGL-F (東加座2435-1、大和谷)
		64-3			6ADD-A (森林3136-1、山路)
		64-4			6AGR-N (笛川2340、丸山)
		64-5	6ACM-R・Q・P (東裏3385-2、斎宮小)		
		64-6	6ACK (東裏 361-2、竹川自治会)		
36	56	6ARI-F (中垣内)	58-6		
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	58-7		
37-2		6ADQ-R (牛葉3021-2、野田)	58-8		
37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、神田)	59		
37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本経木)	60		
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	61		
37-6		6ABD-A (古里588-2、北載)	62		
37-7		6AEC-M (刈干2861-2、斎王公民館)	63		
37-8		6ADR-P (木葉山128-8・13・14、富山)			
37-9		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)			
37-10		6AED-0 (楽殿3217-1、渡部)			
37-11		6ADN-0 (内山3043-3、斎宮駅)			
37-12		6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)			
37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)			
38		6ACD-S (塚山)			
39		6ABD-R・S・T (古里)			
40		6AGH-L・M (東加座)			
41	6AGJ-J他 (斎宮地内)				
42-1	57	6AEI-D・F (楽殿)	64-1		
42-2		6AEX-A・B (楽殿)	64-2		
43-1		6ADC-C (出在家3235-2、永田)	64-3		
43-2		6ADT-B (木葉山308-1、山本)	64-4		
43-3		6ACP-T (南裏241-1、辻)	64-5		
43-4		6ADS-D (牛葉123-3、西山)	64-6		
43-5		6ADE-D (森林3220-3、澄野)			
43-6		6AGE (東前沖、町道側溝)			
43-7		6ABD-F (古里588-6、今西)			
43-8		6ADQ-H (牛葉3025-2、大西)			
44		6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)			
45		6AEG-P・Q (楽殿2904-2、他)			
46		6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)			
47		6ADJ-D・G他 (西加座・御館・宮ノ前他)			

次 数	年度	調 査 地 区	次 数	年度	調 査 地 区	
64-7	61	GAGI-G (東加座2435-2、大和谷)	76-17	63	6AEV-A (鈴池339-5、永島)	
64-8		GAGR-J (雷川12341-6、山下)	77		6AGJ-D (東加座2453、他)	
64-9		GADQ-M (牛養、町道側溝)	78		6ADL (宮ノ前3054、他)	
64-10		GACF-A (東裏365-1、樋口)	79		6AGG-A・B (東加座2440、他)	
64-11		GACM-O (東裏3385-2、斎宮小)	80		6AFG-F~I (西加座2696、他)	
64-12		6ADE-B (篠林3162-3、江崎)	81-1		H 1	6AEC~F (町道塚山線拡幅)
65-1		6ACC-M (塚山3331-1)	81-2			6ABJ、6ABK (古里、県道拡幅)
65-2		6AEG-S (築殿2908-2、他)	81-3			6ADS-M (木葉山137、中川)
65-3		6AEI-L・M (築殿2917-4、他)	81-4			6AED-L (築殿2881-2、山本)
66		6AGG-C (東加座2437-1、他)	81-5			6AFQ-C (中西597-2、木戸口)
67		6ABF (古里523、他)	81-6			6ADD-F (篠林313、池田)
68		6ABF (古里502、他)	81-7			6ABL-U (中垣内430-7、川本)
69		6AGM-E~H (東加座2373、他)	81-8			6ABJ (古里、明和町)
70-1	62	6ACC-X (塚山3325-1、江崎)	81-9	6ACF (中垣内、三重県)		
70-2		6AEE-W (築殿2875-2、岡田)	81-10	6ADR-V (木葉山297、明和町)		
70-3		6ADR-I (木葉山129-5、大西)	81-11	6ACM-N (広頭3385-2、明和町)		
70-4		6ACN-A・B・E・L (広頭3389-8、林)	81-12	6AED-A (篠林3225、中川)		
70-5		6AEW-A (鈴池 333-1、八田)	81-13	6ACB (塚山3276-19他、明和町)		
70-6		6ABL-S (中垣内430-6、奥山)	81-14	6AED-F (築殿2844-2、澄野)		
70-7		6AEE-T (築殿577、浅尾)	81-15	6AED-U (築殿2885-2、西山)		
70-8		6AEU・6AEX-A (牛養、鈴池、三重県)	81-16	6AG (北野3655-1他)		
70-9		6AEP-C・D (御館、榊原、近鉄)	82-1	6ADI-F~J (上園3095他)		
70-10		6AFD-B・D (西前沖2649-4、大西)	82-2	6ADI-K・L (上園3100他)		
70-11		6AGO-H (鍛冶山2363-2、川合)	83	6AFJ-C~F (西加座2770-3他)		
70-12		6ADD-F・G (篠林3158、長谷川)	84-1	6AFJ-G (西加座2764-3)		
70-13		6AEC-N・G (苧干、佐藤)	84-2	6AFH-G・H (西加座2679-1他)		
70-14		6ABL-R (中垣内459、北岡)	85-1	2	6ABD~6ACD (古里、三重県)	
70-15		6AFD-A (西前沖2644-1、山本)	85-2		6ACA-P (古里3279、松本)	
70-16		6ACB-A他 (町道塚山線拡幅)	85-3		6ACJ-B・D (東裏、明和町)	
71		6ABE (古里501、他)	85-4		6ABE (竹川1573-1、永納)	
72-1	6ABE (古里500、他)	85-5	6AED-U (築殿2885-2、西山)			
72-2	6ABF (古里523、他)	85-6	6AFH-B (西加座、明和町)			
72-3	6ABF (古里551-2、他)	85-7	6ACB-C (塚山3276-3他、加藤)			
72-4	6ABF (古里528-1、他)	85-8	6ABJ-N (中垣内427-1、小林)			
73	6AFF-B・C・E・G (西加座2663-5、他)	86	6AFH-F・G・H (西加座2679-1、他)			
74-1	6ABF (古里523、他)	87	6ACE-N (塚山3356、他)			
74-2	6ABF (古里522、他)	88	6AGN-C・D (鍛冶山2411-1、他)			
74-3	6ABE・F (古里524、他)	89-1	3	6ADM-O (内山3043-5、近鉄斎宮駅)		
74-4	6ABE (古里548-1、他)	89-2		6AGI-M (東加座2432-2他、北村)		
74-5	6ABE (古里543、他)	89-3		6ADM-N・O (内山3060-4、近鉄斎宮駅)		
75	6AGF-C (西加座2702、他)	90		6AFH-A・B (西加座2680、他)		
76-1	63	6ADB-A~D (町道塚山線拡幅)		91	6ABH-F (中垣内393、他)	
76-2		6ADE-F・G (篠林3158、長谷川)		92	6AGN-A (鍛冶山2734-3)	
76-3		6ABE (古里554、明和町)	93	6ADN (内山3045-12、他)		
76-4		6ACK (東裏354-13、山際)	94	6AEM (御館2942)		
76-5		6AEE-W (築殿577、岡田)	95	4	6ADN (内山3046-17、他)	
76-6		6ACB-A (塚山3276-1、今西)	96-1		6AGM (東加座2374、丸山)	
76-7		6ACM-M (広頭3385-2、斎宮小)	96-2		6ADO (内山3068-3他、明和町)	
76-8		6AFM-G (鍛冶山2736-3、近鉄)	96-3		6ACA-D (古里3260、清水)	
76-9		6ACQ (南裏144-1、田所)	96-4		6AFN (中西2749-1、本山)	
76-10		6ABD-U (古里579、池田建設)	96-5		6ADR-T (木葉山28-3、加藤)	
76-11		6ABE (古里554、明和町)	96-6		6ADD-D (篠林3138-1、藤井)	
76-12		6AEE (築殿、町道下水管)	97		6AEM (中垣内482、他)	
76-13		6ADD-K (篠林3143、中西)	98	6AFM-C・E (鍛冶山2475、他)		
76-14		6AEE-S (築殿2878-3、山路)				
76-15		6ABF~6ABH (中垣内、県道拡幅)				
76-16	6AEX-B (下園2936-2、明和町)					

次数	年度	調査地区	次数	年度	調査地区	
99	5	6ADN (内山3046-11、他)	123-5	9	6AEE (刈干地内)	
100		6AB1-T (中垣内423)	123-6		6ACC-I (塚山内)	
101		6ADG (篠林3194)				
102-1		6ADS (木葉山119-5、澄野)	124		1 0	6AFM-B・E・G (鍛冶山内)
102-2		6AED-J (薬殿2882-5、杉本)	126		6AGU (中西)	
102-3		6AAQ (花園663-1、中川)	125-1		6ACC-I (塚山内)	
102-4		6ACF-A (東裏365-1、樋口)	125-2		6AES他 (斎宮・竹川内)	
102-5		6ABJ-D (中垣内493-6、川口)	125-3		6ADD-R (篠林内)	
102-6		6AG (鍛冶山内、明和町)	125-4		6ACN (広頭)	
102-7		6ACG-E (東裏318-1、川本)				
102-8		6AE (薬殿内、明和町)	127		1 1	6ADK-H、I (上園3113、他)
103		6AEQ-A (柳原2779-3)	128-1		6ADP (鍛冶山2737-1)	
104		6AGT (笛川1048-1、他)	128-2		6ACA-W (古里3270-4)	
105		6	6AFN (鍛冶山2758-1、他)		128-3	6AEW-A・C・M (鈴池内、明和町)
106-1	6AEW-J (鈴池338-1、森西)		128-4	6ACK (東裏内、明和町)		
106-2	6AEE-W (薬殿2891-3、向井)		128-5	6AEP (御館2975-1他、明和町)		
106-3	6AFL他 (鍛冶山内、明和町)		128-6	6ADN (内山内、明和町)		
106-4	6AEC-L (苧ノ2861、坂本)		128-7	6AAQ (花園内、明和町)		
106-5	6AGO (鍛冶山2362、青山)		128-8	6AEC-M (刈干地内、斎王公民館)		
106-6	6ACC-B (塚山3340-4、田畑)		128-9	6ACS-G (牛葉96-8、浄化槽)		
107	6AB1-O (中垣内414-1、他)		128-10	6AFE-F (斎宮2632-1)		
108	6AEQ-C (柳原2779-2、他)		129	6AEU (御館2969-1他)		
109	7		6AFL-D (鍛冶山2763-1、他)	130	1 2	6AFG (西加座内)
110-1		6ACM-J (東裏262-3、斎宮土地改良区)	131-1	6AAO (竹川741)		
110-2		6AGR-O (笛川2345-3、竹内)	131-2	6ACQ (東裏282-1・明和町)		
111-1		6ADM (内山内)	131-3	6AEU (牛葉571)		
111-2		6ADK (上園内)	131-4	6AFJ-A (西加座2773-1)		
111-3		6ACB-B (塚山3276-15、他)	131-5	6AGD-I (東前沖2494-2)		
112		6AFL-D (鍛冶山2763-1、他)	131-6	6AFC-M (東前沖2505-2・盛土)		
113-1	8	6ACI (広頭内)	131-7	6ACO-F (牛葉3397-2)		
113-2		6ACI (広頭内)	131-8	6AER-J (御館2975-2他)		
114		6AEQ-E・F (柳原内)	131-9	6AED-S (篠林3219-3)		
115-1		6ADK-DL(上園・宮ノ前内)	131-10	6ACM (広頭内・明和町)		
115-2		6ADK (上園内)				
116-1		6ADG (篠林内、他)	132	1 3	H10 (竹川字中垣内439-5・446-1)	
116-2		6ADM-A (内山)	133	T10・T11 (斎宮字西加座2,713ほか)		
116-3		6ADJ-Q (宮ノ前内)	134-1	Q14 (斎宮字鈴池333-1・4,438、八田)		
116-4		6ADI-M・N(上園内)	134-2	I13 (竹川字南裏内、水道)		
116-5		6ADI (上園・篠林内)	134-3	I13 (竹川字南裏内、水道)		
116-6		6ADH (篠林内)	134-4	P12 (斎宮字内山内、水道)		
117-1		6AEF (薬殿2984-4)	134-5	Q13 (斎宮字牛葉内、水道)		
117-2		6ADF-A・B(篠林3155-1、他)	134-6	U11 (斎宮字鍛冶山2,363-1、川合)		
117-3		6ABJ (中垣内内)	134-7	P12 (斎宮字牛葉内、水道)		
117-4	6ADP (牛葉内)	134-8	P12 (斎宮字内山内、水道)			
117-5	6AFC-M (北野3553-1、他)	134-9	L8・M8 (斎宮字塚山3,322-2、澄野)			
117-6	6ACM-B (東裏266-6)	134-10	T7 (斎宮字東前沖3,554、梶溝)			
118	9	6ADN (内山内)	134-11	I12 (竹川字東裏354-1、鈴木)		
119		6AFM-E・G (鍛冶山西地内)	134-12	P 9 (斎宮字上園2,296-16、奥田)		
120		6AFI-C・E、6AFC-R (西加座内)	134-13	F11 (竹川字花園659-5、高槻)		
121		6AJB他 (宮ノ前地区、他)	134-14	U12 (斎宮字笛川2,359、丸山)		
22		6AFN (鍛冶山内)	134-15	09・P9 (斎宮字宮ノ前3,122ほか)		
123-1		6AFQ-A (中西地内)	135			
123-2		6AFN他 (中西・笹川内)				
123-3		6ADP-F~H・L (牛葉内)				
123-4		6ADQ-A~C (牛葉内)				

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせい13ねんどはつつちようさがいほう							
書名	史跡齋宮跡 平成13年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒田利治 泉雄二 伊藤裕偉 水橋公志							
編集機関	齋宮歴史博物館							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 In 0596(52)7027							
発行年月日	2003年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さいくうあと 齋宮跡	たきごみめいじちよう 多気郡明和町 さいくう・たけがわ 齋宮・竹川	24442	210	34度 31分 55秒 ～ 34度 32分 30秒	136度 36分 16秒 ～ 136度 37分 37秒	20010401～ 20020330	750㎡ (132次) 910㎡ (133次) 1,330㎡ (135次)  合計 2,990㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
齋宮跡 第132次	集落・官衙	弥生  奈良 平安 中世前期	方形周溝墓4基  柱列 ピット・土坑 溝	弥生土器・石器  土師器・須恵器  土師器・陶器		弥生中期土器良好 包含層から垂流遠賀川 式土器 古代の遺構希薄		
齋宮跡 第133次	官衙	奈良  平安	掘立柱建物4棟・溝  掘立柱建物21棟・井 戸・土坑・	土師器・須恵器  土師器・須恵器・緑釉 陶器・陶器・金銅製釦 石帯(丸柄)1点 鎌		竈庫と類似する遺構配 置 11世紀中葉頃の土器良 好		
齋宮跡 第135次	官衙	奈良 平安  中世前期	なし(削平) なし(削平)  井戸4基	土師器・須恵器 土師器・須恵器 ・緑釉陶器 土師器・陶器		近世の粘土探掘坑		

---

---

史跡 齋宮跡

平成13年度

発掘調査概報

平成15年3月28日

編集発行 齋宮歴史博物館

印刷 光出版印刷株式会社

---

---

本書は齋宮歴史博物館の許可を得て、国史跡  
齋宮跡出版会が出版したものである。

